

市内墓志らべ

特257

47

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

始





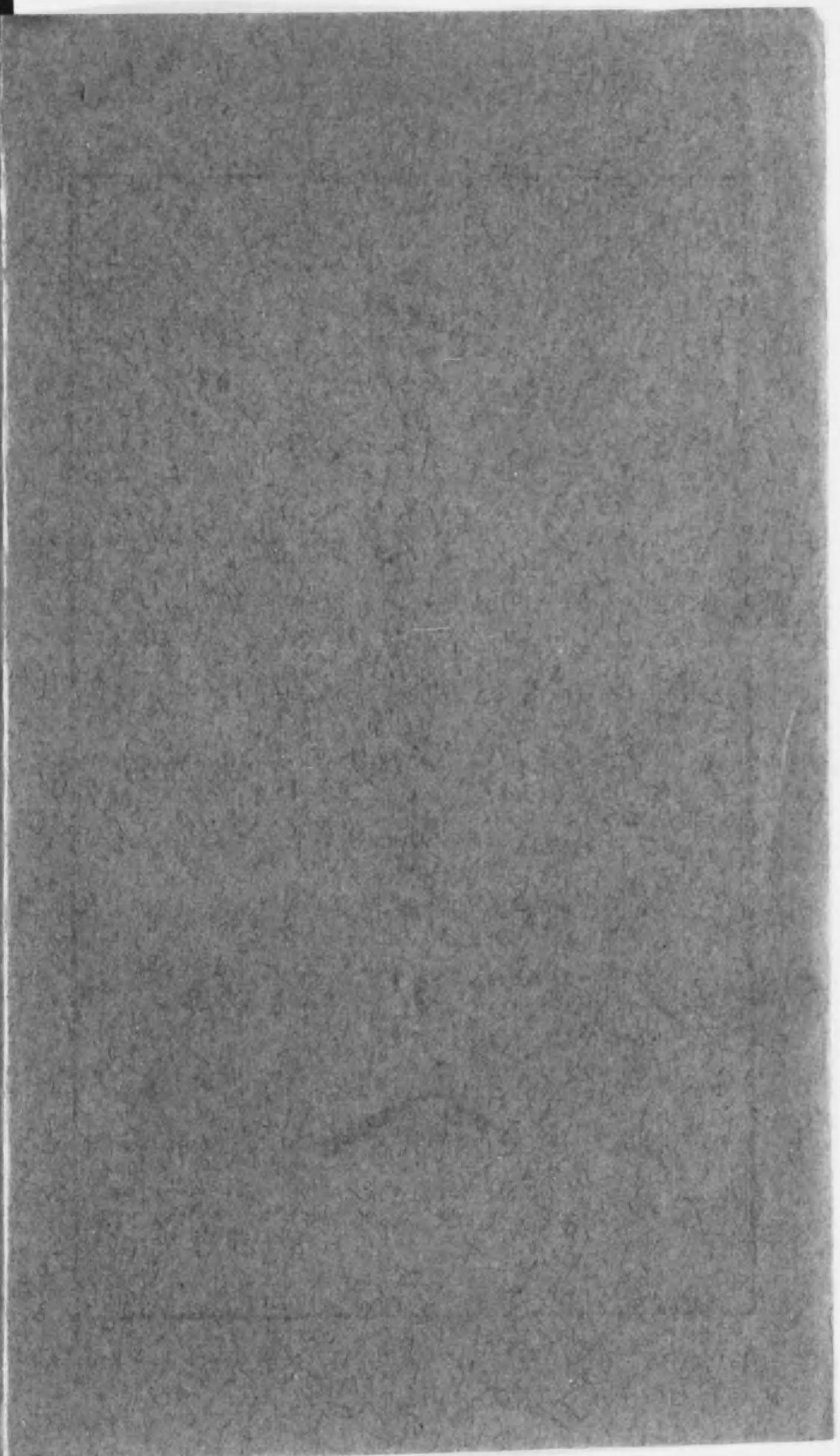
特257  
47



市内義士志



藤井準一郎 編著





# 市内墓しらべ 目次

## 前編

一	はしかき	一
二	墓しらべの動機	一
三	墓所調査の進行	三
四	實地調査の寺院	五
五	各寺院の創建期	六
六	墓地心理	七
七	墓地に對する予の信念	八
八	附記	八
九	墳墓の古いもの	九
一〇	五輪塔等の不明のもの	一〇
一一	墓所の荒廢	一一
一二	浄土宗の寺院	一二



一三	旧藩家老以下高級藩士の菩提所	一三
一四	儒者武術家其他由緒ある藩士の墓所	一四
一五	聖恩枯骨に及んだもの	一四
一六	墓所の變更	一五
一七	墓所か他寺に散在するもの	一六
一八	宏大な墓標	一六
一九	戦死病歿等軍人の墓	一七
二〇	墓標と位勲	一七
二一	墓標と營業廣告	一八
二二	寄墓及び其利とする点	一八
二三	調査上寄墓の不便な点	一九
二四	寄墓の一工夫	一九
二五	三浦固行博士が建てられた三浦家の墓について	二〇
二六	御墓と家運	二〇
二七	異様な恰好をした墓	二一

二八	水溜に捨抜穴を具へたもの	二九
二九	無縁墓	二九
三〇	無縁墓供養塔	三〇
三一	無縁墓善處	三一
三二	住職の馬志	三一
三三	質素な墓	三二
三四	買辦人の残した墓標	三二
三五	乃木大將一家の遺髪塔と寶物庫	三三
三六	岡崎家の墓域	三三
三七	南田町興力丁入口にあつた古墳に就て	三四
三八	屈指の町家の菩提所	三五
三九	儒者の墓	三六
四〇	武術家	三七
四一	藝術家	三九
四二	文學者	三九



四三	數學者	〇四
四四	教育者	一四
四五	醫師	二四
四六	辯護士	三四
四七	書家	三四
四八	画家	三四
四九	茶事師匠	三四
五〇	生花師匠	三四
五一	力士藝人	三四
五二	門弟の發起になつた墓標	四四
五三	墓碑の庫藏	四六
五四	墓碑の撰文者	四六
五五	墓碑の揮毫者	五〇
五六	碑文入りの二婦人の墓	五二
五七	法名の字體	五三

五六	辞世邊砂を彫つたもの	五二
五九	共同墓地	五四
六〇	陸軍墓地	五五
六一	跋—紙碑之説	五六

後編 寺院記述順次

一	月照寺	五九
二	月照寺附屬地所内の墓地	六一
三	法眼寺	六四
四	清光院	六八
五	正覺寺	七五
六	天倫寺	七八
七	大雄寺	八六
八	正應寺	九〇
九	内中原町松江神道分局構内	九〇



- 一〇 木沢埋立地 ..... 九一
- 一一 松江城山公園 ..... 九二
- 一二 縣廳正門前 ..... 九三
- 一三 眞光寺 ..... 九三
- 一四 桐岳寺 同寺奥の御葬墓池 ..... 九五
- 一五 萬壽寺 ..... 一〇四
- 一六 千手院 ..... 一〇六
- 一七 順光寺元徳寺 ..... 一一八
- 一八 普門院 ..... 一二〇
- 一九 自性院 ..... 一二一
- 二〇 淨心寺 ..... 一二四
- 二一 本龍寺 ..... 一二六
- 二二 西光寺還來寺 ..... 一四一
- 二三 善導寺 ..... 一四〇
- 二四 妙興寺 ..... 一四三

- 二五 慈雲寺 ..... 一三八
- 二六 長満寺 ..... 一三九
- 二七 久成寺 ..... 一四一
- 二八 龍覺寺 ..... 一四三
- 二九 常榮寺 ..... 一五〇
- 三〇 宗泉寺 ..... 一五四
- 三一 恩敬寺 ..... 一五六
- 三二 永泉寺 ..... 一五八
- 三三 龍昌寺 ..... 一六〇
- 三四 全能寺 ..... 一六二
- 三五 東林寺 ..... 一六四
- 三六 常教寺 ..... 一六六
- 三七 安栖院 ..... 一七〇
- 三八 明宗寺西福寺圓照寺 ..... 一七二
- 三九 尊念寺 ..... 一七四



四〇	稱名寺	二七七
四一	誓願寺	二七八
四二	來迎寺	二七九
四三	天神境内	二八一
四四	信樂寺	二八二
四五	正源寺	二八五
四六	本誓寺	二八六
四七	德專寺	二八七
四八	洞光寺	二八九
四九	極樂寺	二九八
五〇	円成寺	三〇〇
五一	善光寺	三〇五
五二	乃水村共同墓地	三〇八
五三	床几山公園	三〇八
五四	床几山離墓地	三二四

五五	土稻坂墓地	二四四
五六	菩提寺	二四五
五七	安樂寺	二五六
五八	赤崎共同墓地	二五六
五九	津田町本来院	二六一
六〇	常喜寺	二六一
六一	善福寺	二六一
六二	長源寺	二六一
六三	安樂寺	二六一
六四	禪覺寺	二六一
六五	吉祥寺	二六一

以上



# 市内墓くらべ

前編

藤井準一郎 編著

## 一 はしがき

單に墓所と申しては餘りに範圍廣大となるので松江市を舞臺として市内墓くらべと命名した登載人物も舊曆時代を主とし明治大正昭和の物故者にも筆を及ぼし昭和十三年末を締切りとした一讀して玉石混濁だと思ふ人もあらうか、或は自己を中心に追慕感興を波及的に記述した爲めと承知して頂きたい。更に記述上遺漏不行届は免れぬか今日の所はこれにて自ら諦め大方諸賢の示教叱正を待つ計りである。

## 二 墓しらべの動機

予が濱田中學在動中（大正十一年より足柄八年間）寓居前に洞泉寺といふ臨濟派の寺院があつた。毎年或時期になると伊勢大神樂の一座が濱田町に來り各町内を廻つて



大神樂をやるのか例であつたか其内一度は必ず洞泉寺の門内廣場にて盛んに大神樂を興行し年によると慈善的に尤も念の入つたものを興行して觀覽者を迎へ刺へ群集の子供達に菓子を分配した事もあつた。予は最初此事を只奇特の行爲とのみ見て居つたが不圖同寺の墓所巡覽の際伊勢大神樂一座の墓が人目には余りつかないが二墓相並んで居るのを目にとまつた。

一は 堀廣吉之墓 明治二十五年七月十日

伊勢神樂佐々木金太夫建之

一は 佐々木金太之奥津城

大正五年七月三十一日

伊勢大神樂西川市三郎建之

とある。之れに由て考へると彼等は年中旅から旅への興行者の事として一朝斃れた其時は其地に埋葬して墳墓を建て、やるのは全く一座連中の篤志に外ならぬ。同座長佐々木金太夫が堀廣吉の爲めに石塔建立の上年々此地に来る毎に供養だけは忘れなかつたのに其後二十五年其建立者佐々木金太夫自身が又此處に葬られて座長西川市三郎より墳墓を作らざれば甲乙相並んで異郷に靈魂を鎮めて居るのは何等の因縁にや埋骨は豈只墳墓

の地のみならんやて人間到る所青山ありとは申せ異郷此の地涯を目撃した者誰か一滴の涙を灑かぬものかあらうか。予は暫し佇立して此の因縁附きの奇特行爲に何とも言へぬ無限の感懐を覺えたのである。

### 三 墓所調査の進行

予は前記の感懐に耽つた時こんな墓所因縁附きの感懐を起草したら面白からうと思つた。こんな事は孟母三遷の教から申せば零であらうけれど併し昔から門前の小僧習はぬ御經を覺えるとか又他所の午券で法事するとかの諺もある事として人様の御咎を憚らずに卒直に墓所感懐を起草するの端緒を得た。世には御幣かつきの連中が多いのに又して態々求めて縁喜も良くない墓所に趣味を有する痴者が居るのか或は又物好きも程があつて自ら急いで墓穴を掘る爪と嘲笑の的となる事もあらう。併しこれらも心あつての筆のすさびと備に諒承されたい。

濱田を去つて愈々松江に歸住する事になつてから閑散に任せて恩師恩人先輩知友親戚の墓参をなさんとて所々方々の寺院に入つて墓所を捜した。これが第二の勤機となつてそれからこれへと調査の範圍が廣くなり、それと同時に思掛けない副産物が数々



あつた。副産物な何かと云へば文武の方面に師範たるものや文學者藝術家は申す迄りなく苟も一藝一能に長けた者を各方面から集めて見たいと考へそれら區域を市内に限つて居るので予の目に觸れた者を挙げるに止めた。單に儒者教育者と云つても堂々たる藩校の教授より下つては寺小屋式の師匠といふ具合で角力界の番附と一般で獲網格から禪かつきの弱輩迄を網羅したから一切の人物が玉石同俎となるを免れなかつた事を豫め断つて置く。

左記は予の恩師恩人先輩知友の墓所で念彼岸は勿論の事平素も折あらば必ず墓参する事にして居る。此外先輩岸博士、三浦尚行博士、山本康次郎、原巽等の人々に對しても墓前に敬意を表する事を怠らぬ。

- |       |        |         |
|-------|--------|---------|
| 恩師    | 内村友輔   | 龍覺寺     |
| 同     | 河合篤敬   | 桐丘寺神葬墓地 |
| 同     | 西田千太郎  | 長瀨寺     |
| 同     | 渡部寛一郎  | 稱名寺     |
| 我家之恩人 | 大橋茂右衛門 | 法眼寺     |
| 恩人    | 林王之助   | 長瀨寺     |

- |    |       |         |       |
|----|-------|---------|-------|
| 同  | 山崎克三  | 茶事師匠    | 龍覺寺   |
| 同  | 安達世恭  | 安達家藏養父  | 安栖院   |
| 同  | 入戸野虎吉 | 醫師      | 妙興寺   |
| 同  | 矢島景秋  |         | 東林寺   |
| 友人 | 志立富松  | 醫學博士    | 菅原寺   |
| 同  | 松山虎次郎 |         | 西田中墓地 |
| 同  | 加田榮太郎 |         | 真光寺   |
| 同  | 丹羽正美  | 砲兵中佐    | 桐丘寺   |
| 同  | 石原三郎  |         | 信樂寺   |
| 同  | 日野次郎  |         | 真光寺   |
| 同  | 園山市太郎 | 濱田中學校講師 | 大雄寺   |
| 同  | 藤岡宏一  |         | 洞光寺   |

四 實地調査の寺院

曹洞宗 一四ヶ寺 浄土宗 九 真宗大谷派 九



- |         |     |          |     |          |   |
|---------|-----|----------|-----|----------|---|
| 真宗本願寺派  | 七   | 日蓮宗      | 六   | 本門法華宗    | 四 |
| 臨濟妙心寺派  | 三   | 臨濟南禪寺派   | 二   | 真言宗(自性院) | 一 |
| 真言大覺寺派  | 一   | 天台宗(普門院) | 一   | 時宗(善光寺)  | 一 |
| 以上五十八ヶ寺 |     |          |     |          |   |
| 此外共同墓地  | 二   | 陸軍墓地     | 一   | 離墓地      | 二 |
| 無權家は普門院 | 本來院 | 安樂寺      | 禪覺寺 | 等        |   |

五、各寺院の創建期 (鳥根縣史に據る)

松江開府以前に存在してゐたものはセツ寺  
 常樂寺、宗泉寺、安相院、龍昌寺、龍覺寺、常教寺、西光寺、  
 堀尾氏開府の際に廣瀬富田から移轉したものは  
 清光院、大雄寺、普門院、海來院、自性院、桐岳寺、千手院、誓願寺、專念寺、稱  
 名寺、慈雲寺、長清寺、久成寺、本體寺、明泉寺、信樂寺、洞光寺、瑞應寺(圓成  
 寺の事で洗合から現在の地に移された)等、  
 開府の頃乃至や、後れて建立されたもの

- 月照寺、天倫寺、正覺寺、正應寺、順光寺、萬壽寺、真光寺、妙興寺、來迎寺、德  
 專寺 等、

法眼寺は最初龜田山の南裾部にあつたが後に法吉村黒田に移された。龜田山は極樂寺  
 山とも稱して居たがその極樂寺は川津村菅田に移されて法眼寺の配寺となつた。

六、墓地心理

有象無象など、無禮な事を申してはならぬ。元々貴賤食富の差と老若男女の別とは  
 あつたであらうが既に俗行を脱き棄て、綺麗に洗淨された佛達であるから墓地に臨ん  
 では先づ脱帽敬禮すべきである。元來墓地は林らしいもので林らしいのが本體である。昔  
 むせはむす程悲みの思出を深くし瀧める程愁ひの情を催さしめる。一般に墓地を嫌忌  
 する人々の言ふ所を聞くに白玉樓中、石の寶冠を頂いて居られるとしてもその形が大  
 小様々であり右向き左向き或は差向ひ背合せの雜居振りには亂雑極まるもので到底好  
 悪か持てぬとけなし。更に墓地は人生悲哀の地であり特殊の凶地である已むを得ぬ場  
 合の外は之に近づく事は眞平御免だと毛嫌ひする杯言語同断と言ふべきである。成程  
 神社境内の公園らしく樂觀的なるに反し悲觀的感懐に打たれるは自然であるか苟くも



各人に取つて祖先以來の諸靈の鎮座まします所であるから本を忘れる人間本来の性情に立返り素祖の精神を發揮して親しくこれに奉仕すべきものと思ふ。

### 七、墓地に對する予の信念

予は人生を悲觀もせなければ又樂觀もせぬ。虚心坦懐只敬虔の念あるのみである。鬼や南の理窟は別として予は只神在すか如しの信念を捧げるのを本旨とし、何事のおはしますかは知らねともかたじけなさに涙ごぼるゝの歌の如くに祖先以來の諸靈に對して只奈けなきに感激の落涙を催すのである。御佛眼前に在すものと信ずるか故に吉凶共に墓前に報告して益々その加護を祈願する一念あるのみである。更に諸名士先輩知人の墓及び古きは明治十年西南の役を始め日清戰役以來護國の英靈となられた軍人の墓を拜した時は覺えず正襟追慕哀憤感激の念で胸一杯となり真に返り去るに忍びぬとは此時の情致を申したものである。

### 八、附記

序に附加へたい事は長崎市内の墓所が揃ひも揃つて宏大清麗なものが多い事である。

それは外敵撲滅佛教奨励の爲めに幕府の採つた一種の手段政略であつた事は申すもない。我勝ちと廣き場所を選び其域内に宏大な墓標を構え玉垣内が石疊となつて居る。盆祭等には此石疊の上に敷物を展べ親戚知人を集めて小宴會を催すものもあるとの事。現時は故々たる電燈の常設さへあるは無論の事である。此市では石塔担保に金錢の貸借が行はれて居る位なれば墓所の設備に多額の費用を要して居るのも推して知るべきである。凡そ墓地に出入するのは陰氣臭くて眞子御免たと申さる運中もこん所を見られたら心境に變化を生ずるかも知れぬ。話妻つて高野山の奥の院に通ずる道路に沿うて建立された全國諸大名の墓は何れも宏大な物はかりであるか之れに模倣して現代の成金者流が此所に堂々たる石塔を構築して居るのは賣名の心根が覗はれて不快な感を催さるを得ぬ。

### 九、墳墓の古いもの

吾々が墓場に臨んだ時、佛に大寶篋塔とか大五輪塔等の文字に徳川氏以前の元龜天正慶長等の年號更に遡つて室町時代、南北朝時代、鎌倉時代の年號を刻んだものを目撃して、うっかりこれは當時創建の林と早合点早呑込みしてはならぬ多くは後代子孫



が何かの年回を記念に祖先追福の爲め新たに建立するは珍らしからぬ。例へば津田町長源寺の立原氏の祖立原源太兵衛又經の墓には只慶長十八年四月二十六日行年八十二歳と法名だけで墓其物は如何に古く見えても其建立者は頗る最近の後裔である事は其間諒者の實語に徴して明白である。又清光院に在る所の秋庭家の元祖秋庭能登守の卒去は慶長十一年十一月十五日であるが十一代の後裔が三百回忌執行の際建立の旨を明記されて居るのは大に予の意を得て居る。清光院の高松院殿 文明十年戊辰四月廿八日(今から四百六十一年前) 峯松院殿 永正八年未八月廿七日(今から四百二十八年前) 長應院殿 天文北三年庚八月三日(今から三百八十五年前) 飯松院殿 元龜四年西七月十七日(今から三百六十六年前) 大藏院殿 慶長五年月日不明(今から三百三十九年前) 以上は今日文字明瞭に認めらるゝも後世の建立で當時の創建にあらざる事は決して推測に難からぬ。程りて古き年代に属するものには大雄寺に嘉禄二徳七月七日といふのがあるが今から七百十三年前即ち鎌倉時代後堀河天皇の世執權北條泰時頃である。併し誰の墓なる事は不明であるが後代いつの頃か刻み込まれた文字に徴しても當時の建立にあらざる事は明瞭である。(大雄寺は廣瀬富田から移轉されたもの)

佐々木四郎高綱が何れの地にて卒去したかは今以て確定して居らぬが善光寺には佐

々木四郎高綱の墓と傳稱するものがあるもそれは徳川時代の寶曆十二年今より百七十七年前に出来たものとすれば古い様にも矢張り新しい。更に於て當時創建の儘眞に古き墓としては

- 第一か堀尾氏七家老の一人牧志摩正盛 寛永九年のもので今日から三百七十年前(善光寺)
- 第二か堀尾山城守忠晴廟 寛永十年のもので三百六十年前(円成寺)
- 第三か忠晴廟前の堀尾恒馬右成墓 寛永二十一年即ち正保元年のもので二百九十五年前
- 第四か松平出羽守直政廟 寛文六年のもので二百七十三年(月形寺)

### 一〇. 五輪塔等の不明のもの

大きな五輪塔又は寶篋塔の頭部胴部が特に目立ちて墓地の隅々等に残存して名残りを留めて居るのは無限の悲哀である。文字らしいもの一切消滅して居るのは無論だが口碑も何れも傳つては居らぬ由、寺院には掃くにも掃かぬす捨てるにも捨てられず無用の長物の如くに扱はれて居る。こんな古い墳墓の残部が善光寺、法眼寺、天倫寺、清光院其他奥谷辺の山寺に多い。但し善光寺に五輪塔の大なるもの三つあるが、それ



か三ヶ所に轉刷もせず傾斜もせずに残部ばかりも正しく位置されて居るのは氣持がよい。宛にも角にも、つはものどもの夢の跡として深く懐古すへきであらう。

### 一、墓所の荒廢

如何に榮枯盛衰世の習ひとは申せ舊藩上層階級の堂々たる墓塚の多數が草叢に埋れて荒れ果て、居るのが目に附く。現在では兵子孫も此等の墓を持つて餘して居るのではないかと思はれる。随つてその家運の程も推察するに難くはない。當該寺院にては何とか整理して墓場を淨化したい意思があつても容易に手が着けられぬかも知れぬ。通路の狹隘排水の不十分少しく衛生的處置を講せられたいものである。現時流行の文化的とか整理とか統一とかの文句も寺院に對しては當分適用出来ぬかも知れぬ。

### 二、浄土宗の寺院

舊藩高級の人々の墓所が浄土宗の寺院に多いのは徳川氏が浄土宗で其一門松平氏も同宗派たる關係の爲めと思はれる。月照寺、善導寺、誓願寺、信樂寺、來迎寺、東林寺、稱名寺、尊念寺、極樂寺がそれである。乙部家の禪宗、神谷家の眞宗、朝日家の

日蓮宗は例外である。

### 一三、舊藩家老以下高級藩士の菩提所

誓願寺	大橋 三谷 仙石 山口 圓等
天倫寺	乙部 黒澤 長尾
慈雲寺	柳多 朝日 脇坂
順光寺	神谷 葛西 横田 荒井
萬壽寺	神谷 有澤 黒川 垂水
法眼寺	朝日 (元慈雲寺) 大橋 (元誓願寺)
善導寺	有澤 (最近の分から萬壽寺へ) 大野 比良 神山 雨森 水代 飯島
信樂寺	石原 高水 棚橋 袴田 香西
洞光寺	村松 梶川
円成寺	堀尾 奥田
菩提寺	赤水
恩敬寺	今村 早苗



大雄寺 梅 高田 外山 松田 橋本  
清光院 松原 海野 岡田 大塚 横井  
桐岳寺 平賀 小田 間瀬 香西 上川  
其他調査不行届

一四 儒者武術家其他由緒ある藩士の墓所

是等の入々の墓所は洞光寺、清光院、法眼寺、天倫寺、桐岳寺、萬壽寺等にあるが、是等の寺は悉く禪宗である。禪宗と武術家等とは其間修養上密接の關係があるのではなからうか。

一五 聖恩枯骨に及んだもの

明治四十年五月東宮殿下山陰御行啓の節  
陞贈従三位故従四位上左近衛少將 松平直政  
大正四年十一月十日大正天皇御大典の節  
贈正五位 長尾隼人正一勝

陞贈従三位 故従四位下 松平治郷  
贈従五位 朝日郷保

長尾一勝賢性英敏學殖深く作州津山侯森長成を輔けて前代の弊政を改め大いに農業を奨励し、貞享五年七月には元弘帝の舊跡院の庄の荒廢せるを慨き新に櫻樹を栽植し碑を建て、兒島高德の忠誠を顯揚し、又作陽誌を編纂する等その治績顯著であつた。元禄十年森長成封を除かるゝや一跡浪居の身となり同十三年六月廿一日松平綱直に召されと出雲に來り百人口を給せらるゝ。子孫代々松江侯に仕へて重く用ひられた。

一六 墓所の變更

慈雲寺にあつた朝日家の墓が感情の衝突其他の点からして自宅に近い法眼寺に墓石を移された事や、又菅野寺にあつた大橋家の墓が最近或る事情に本つぎで法眼寺に移された事は格別として普通には火葬を嫌つて土葬の出来る山寺に墓地を求めたとか、出水を恐れ若くは排水悪しく濕地勝ちなるを忌むとか、遠隔の墓參を厭つて便宜上近接の寺に變更するの例は近來珍しからぬ様である。



### 一七 墓所が他寺に散在するもの

歴代の菩提所が決定して居るに拘はらず他寺に亘りニエヤ所に散在して居るのかある。中には宗旨違ひにて一寸異様の態あるもそれは家長が中途特別の信仰歸依に由つたものである。或は家族の都合によるものもあつて例へば柳多家より有澤家へ縁組の際本人の希望を容れて他日身まかりたる跡實家の墓地に埋葬し冥れとの條件に本ついたものである。又は山荘居住の關係で特に其の附近の寺院を遷んだとか。例へば大野義純の墓が乃水村の善光寺にあるのはその爲めと思はる故國相朝日太夫紀功碑が元川津村志立山上に建立せられたのも山荘の關係であつたが現在は特に月照寺不昧公廟前に移されて居るのは適所と申すべきだ。

### 一八 宏大な墓標

一見して該寺の禮頭棟であることを示したものの或は資産身分榮達に任せて建てられた宏大な墓標が兎角世人の目を牽いて居る往昔とは相反して現時は概して士族の墓よりも町家の分に宏大贅澤なものが多いが一々家名を列擧する必要もない。徒らに虚

榮に任せて相競ふか如き事は先づ慎むべきである。護國の神靈と仰かるゝ軍人の墓ならば格別なるもこれとて矢張身分相應にあつてほしい。

### 一九 戦死病傷死等軍人の墓

大概の寺院の墓場にて真先に目に着くのは日露戦役以来滿洲事変日支事変に於ける戦死傷病死軍人の墓標である。墓其物が斷然頭角を抽んで居るのは言ふ迄もないがそれと共に法名其物に忠勇・義烈・至誠・武勲・愛國・奉公等の文字が眼に入る上は近寄つて一見せずとも必ず軍人の墓たる事が容易に首肯せられる。殊に滿洲事変日支事變の墓標は石材体裁共に一段と善美を盡してあるのは國家の優遇と優渥なる御下賜金の光榮として左もあるべき事である。名義は單に日支事變と稱せられても其實東洋永遠の平和を確保すへき我帝國重大な使命に關する承曾有の大戦役の事とて其犠牲者の多いのは先づ陸軍墓地に参拜照禱して其多數なるに感謝感激し、次ぎに市内寺院に入りて更に親しく正標参拜すべきである。知ると知らざるとを問はず断くする事が我々銃校の義務であつて又美はしき國民性の發露と稱すべきである。能く外遊者がワシントンの墓に花輪を捧げて敬意を捧ふのは無論であるか一方又無名軍人の記念碑等



に對しても花輪を捧げるのを忘れてはならぬ。所謂赤誠にも國境なしと云ふべきである。

市内にて戦死等將校の筆頭は歩兵中佐正六位勲四等功四級平賀正三郎（桐岳寺）千手院の陸軍歩兵中佐從五位勲五等加村旭にて、之れに並ぐものは西光寺の輜重兵少佐正六位勲四等佐々木泰次郎、石橋共同墓地の歩兵少佐從六位勲四等工藤才次郎、誓願寺の歩兵大尉正七位勲五等功五級齋藤晋、洞光寺の歩兵大尉從七位勲五等功五級永井成太郎を始め將校の數も少くないが何れも皆其芳名や千載不朽である。茲に盡忠報國の大精神を發揮した將校下士兵を戰役別に其概數を左に示すと（昭和十三年十二月三十一日總切）

- 法眼寺 滿洲事変二 外一
- 清光院 日露戰役三 滿洲事変一 外三
- 正覺寺 日支事変一
- 天倫寺 日露戰役二 滿洲事変一
- 大雄寺 日露戰役一
- 正應寺 北清事変一 日露戰役一 日支事変一 外一
- 眞光寺 北清事変一 日支事変一

- 桐岳寺 西南の役一 日露戰役一 日支事変三 外二
- 萬壽寺 日清戰役一 日露戰役一 滿洲事変一 外一
- 千手院 日露戰役一 日支事変一
- 順光寺 日露戰役一 日支事変一
- 淨心寺 日露戰役一 外三
- 本龍寺 日支事変一 外一
- 西光寺 日露戰役四 日支事変一 外二
- 善導寺 北清事変一 日露戰役二 日支事変一
- 妙興寺 日清戰役一 北清事変二 日露戰役三 日支事変一
- 慈雲寺 日露戰役三
- 長瀧寺 日支事変一 外一
- 久成寺 滿洲事変一 日支事変一 外一
- 龍巖寺 北清事変三 日露戰役二 日支事変二 外一
- 常榮寺 日露戰役一 滿洲事変一 日支事変四
- 宗泉寺 西南の役一 日露戰役一 日支事変五 外一



永泉寺 日露戦役一 外一  
 龍昌寺 日露戦役一 日支事変四 外二  
 全龍寺 北清事変一 日支事変二  
 東林寺 日清戦役一 北清事変一 日露戦役一 外三  
 常教寺 日支事変二 外二  
 安栖院 日清戦役一 日露戦役二 日支事変一 外一  
 明宗寺 日清戦役一 日支事変五 外二  
 稱名寺 日支事変一  
 誓願寺 日露戦役二 外二  
 來迎寺 日露戦役一 滿洲事変二 日支事変二  
 信樂寺 日露戦役二  
 正源寺 日露戦役一 日支事変一 外一  
 本誓寺 日支事変二  
 德尊寺 外一  
 洞光寺 日清戦役一 北清事変一 日露戦役四 滿洲事変一 日支事変五 外四

極樂寺 滿洲事変一 日支事変一 外一  
 円成寺 西南の役一 日露戦役一 日支事変一  
 善光寺 日清戦役一 北清事変一 日露戦役一  
 乃木共同墓地 滿洲事変一  
 菩提寺 日清戦役一 日露戦役一  
 石碕共同墓地 日支事変六

以上 (津田町の分は一切省略)

前記統計

明治十年西南の役三 日清戦役八 北清事変一二 日露戦役四六 (内遼陽四 黑溝臺四 奉天附近七) 滿洲事変一二 日支事変五八 (内台兒莊及附近一四) 此外三八  
 戦死軍人の墓の見當らぬは恩敬寺・尊念寺

二〇 墓標と位勲

故人の位勲を墓石の部分に刻んだもので五位以上の者を挙げると (軍人以外)  
 従三位勲三等平塚忠之助墓 (高等學校勅任教授理學士) 正四位勲三等岡崎國臣墓 正



五位勲四等杉本辰三郎墓、故大阪控訴院判事五位勲六等岡田多四郎墓、從五位勲四等岡崎運兵衛墓、故陸軍三等主計正從五位勲四等渡部龜三郎墓、從五位勲五等岩崎龜太郎墓、從五位勲五等中村鐵太郎墓、從五位勲五等津村一郎墓、從五位勲五等伊藤志之墓等である、實際に五位以上の位勲を有する者數があれど墓石に何等の記録のないのは當人及び遺族の意志に本づくものと寄墓となつた關係上自然見合せたものと察せられる、墓標に勲位があつても無くても何等差別的ない等で一國の宰相でも單に原敬墓にて済まして居られ、所却つて輿論にさか恩はれるては無いが、

## 二 墓標に營業廣告

墓標の側面箇字の肩書に自家の營業種目を入れたものが常榮寺に武居文居書面骨董熊野とあるのは他では全く見受けぬ營業宣傳である、

## 三 寄墓及び其利とする点

人口増殖 墓地整理 都市計劃 土葬制限等の理由にて同墓地に散在(若くは連接)して居る墓標を一ヶ所に取絡めて一墓標を建て石塔の表面には〇〇家累代之墓とか〇

〇家先祖代々之墓とか其他之れに類似の文句を以て表明されて居る其中で異様に思はれるのは桐岳寺に〇〇家先祖代々臣下之墓及び〇〇家代々下之墓とあるが臣の一字は總當でない、此度臣は目の誤で目は即ち己に當るのである、同寺内に蕭生家先祖目下之墓とあるのを参考とすべきである、目下寄墓が流行するのは時世の推移上斯くするのが場所によりては當然で所謂文化的であらう、概して寄墓の利とする点は

一家の源泉として家祖の念を一段と高め郵重に奉仕する事が出来る、一度改道して置けば石材の質の如何にも由るか先づ入しきに亘つて經濟的に保存が出来る、基礎工事が安全に行はれ而も清浄となり遺骨保存に尤も相應しくなる掃除するにも供花するにも或は点燈の場合にも一ヶ所に限られて居ると専心一意一層恭敬の至誠を捧げる事が出来る、一家の子孫にしても將又第三者(血縁外の者)としても墓参に便宜を感じいつも記憶を確實にする事が出来る旧形式を打破すると同時に墓地は整頓せられ大局から見て一段と墓地の面目を漸次に一新する事が出来る、以上、

年一年と寄墓の多くなるのは以上列擧した様な理由に本づくものと思はれる、如何に資力あるものにてり決して贅澤に失する事なく身分相應に成るべく石材の良質を選んで墓所改造せられるのは先づ總當と云ふべきである、



### 二三 寄墓の不便な点

予が市内の墓所調査をやつて尤も不便を感じたのは寄墓の多くは只正面何家の墓たる事と側面に改建の年月日と苗字とを彫つてあるだけなれば、若し同墓地に本家の外に分家があるとか更に又無関係の同姓者あるとせば第三者としての墓参者若くは調査者に取りては一寸手の着け様かない。そんな場合其寺に就て聞合せても往職不在の場合とか又古い墓に就いては頭と要領を得ぬ事が少くない。どの家にしても創業者もあれば守成者もある。家に由りては中興者もあれば更に又特別の中興者があるとは斯る特殊な功績者が世間的に歴史的に世人の目にも觸れなれて影武者となつて隠れて仕舞ひ全く忘れられるのは遺憾である。假りに例を松江初代の市長橋岡世徳に取らんか只橋岡家歴代の墓を拜せは足るてはないかと申せばそれ迄なるも一歩進んで其人を追憶し印のあたり市長の逝去年月日を知らんとしても全然不可能である。況んや法名享年などに於てをやである。調査の事は文献に依るのは無論分り切つた事なれば墓場心理といふものはそこに微妙な感應ある事を知らねばならぬ。

### 二四 寄墓の一工夫

前記の不便を補ふ爲めに茲に用意周到とも云ふべき寄墓のある方は大いに吾人の意を強うするに足る。寄墓を正面にし其側に横幅廣き標石を据えそれに細かく歴代家長を始め家族の法名年月日を記入したもので餘白を存してある此の如きは天倫寺の天野綱次郎家を始め他にも大同小異の物を見受ける。信樂寺の大石原家の分は元租より代々相續者の俗名法名年月日を順次に列記したもので十一代鎮次郎に至つて盡きて居る。十二代三郎は新に石原家の大寄墓を建立して前號の續きの如くに其体裁を爲して居る。又和多見淨心寺の久保田家の墓は正面に久保田家代々之墓と彫り其石塔の三方面に掛けて元租何某夫妻を始めとし代々夫妻の俗名法名年月日を列記せられ第八代目の所に愛之丞としてある。普通大の石塔に仲々要領を得て居るも、これとても限りある三方面の事として餘白幾何もないのは當然である。要するに此寄墓の一工夫は相當の面積を要するので何れの寺院にも實現する事は頗る困難である。

### 二五 三浦周行博士が建てられた三浦家の墓について



法眼寺裏手の墓地を少々取を上った所に三浦家の墓が第一第二第三と番號をつけて都合三基あるが、大正十三年七月十世文學博士三浦周行建としてある。三基中第一の分丈けは區域も可成廣く取られて規模が大きい。石塔は片隅に寄せて建てられ石塔の周りに一面を石敷と爲し殆んど周圍に低い石の欄干を繞らし石敷の真下は土塊、即ち暗室にて高五尺餘底水の浸入を防ぐ爲め入念にコンクリートで底部及び四壁を固め覆に外部との昇降口があるのみである。内壁三方面に同じくコンクリートの欄干を設け此には銅板及び遺骨を安置し銅板の表面には法名死亡年月日何某。裏面には世代事歴行年を銘記して永遠の保存を主とし博士自己を中心にして子孫永代迄の遺骨安置の計画は流石に國史專攻の博士程あつて歴史家たる態度を遺憾なく發揮されて居るのには大いに敬服せざるを得ぬ。此第一の墓と相臨する事數歩の所に第二の墓がある。こゝは博士の両親の英霊の安置する所、更に少しく離れて第三の墓には祖父母より遡つて祖先迄の分を合併安置したものである。何故に博士は當世風に一大奇墓にせなかつたか、近い親戚中には奇墓を主張して既に便宜平坦の個所に墓地買入の契約迄あつたにか、はらず博士の意見は從來の墓地を其儘に保留すべきが當然であつて苟も子孫たるものか祖先以來の安住地を勝手に移動するか如きは我國本來の國民性情から申しても絶対反對で

あるとて断乎として拒絶し自己の所信通りに實行された。更に外觀を飾らずに重きを内容に置き内部構造等工事費用合せて五六百圓を要したとの事である。予は博士としては先づ理想的の墓を營造せられた者と深く敬仰する次第である。博士の經歷は世間周知の事なれば省略する。予は附屬校以來の親友にて互に往復し音信を絶たざるべしと約束したにも拘はらず中年以後いつしか消息絶えた。併し間接に相知る事は渝りもなかつた。惜しい事には昭和六年九月六日享年六拾一にて八ヶ年前に建立された第一墓所に永眠して居られる。

## 二六 お墓と家運

「お墓と家運」

松崎整道居士講演各宗聯合大井佛教會編纂 非賣品

「墓相と家運」

今井鴻象著 發行所東京市虎橋區戸塚町一丁目東學社菊版極美本精

入 總頁三百四十頁・説明圖版二百個 定價貳圓叁拾錢 送料貳拾貳錢

「神道佛式墓相圖解お墓の建て方」 今井鴻象著 四六倍判三二〇頁寫真版凸版説明

圖三五〇箱入美本 定價三圓八十錢送料二十二錢



今井鳴泉の二着書は新聞紙上の廣告を見た文句であるか、松崎整造居士遺稿のお墓の家運は知人より貸せられ一通り讀んだので其の概要を申すと大筋の如きものである。生存中に自己の墓を造り置くべきものでない子供に承かあると、死後に初めて着手して石塔に法名其他を表明するのが子が親に對する道であると、親の墓以上に立派なお墓を造るべきものではない。質素であつて余り人目を奪かぬ様なお墓かよろしい。概して寄墓を非難して居る。善い墓の例として祖先以來同じ大さうのお墓を造るべき事。悪い墓の例として土臺石を三段乃至以上に積み重ね更に其上に餘計な体裁裝飾を加へたもの、宏大なお墓を建てた者は家運決して繁昌せぬものであるとて衰微零落断絶等を例證してあつた。自然石のお墓はよろしくないと、奇を好んだ変形なお墓を造るべきものではない。住職が墓地整理の名の下に無縁墓を廢理するに當つて處符も甚しいこと。無縁墓を善處した関東地方某寺院の好例。青年團等の協同事業として町村寺院墓地の掃除を引受けて居る美談。

以上

之れに由ると寄墓といふものを褒めぬ斗りてなく寧ろ非難し頗る舊慣墨守の方である。又宏大なお墓を建て、居るものは家運上甚だ悪いと云ふのは言は、結果から推断して例證したに過ぎぬ。決して十軒か十軒悉く然りといふのではないと思ふ。旧慣を

墨守せず又迷信に扱はれることもなく何事も世と俱に推移すべきを本旨とせねばならぬ。日進月歩人口増殖の今日に於て全然寄墓を排斥したならば墓場は畢竟どうなるであらうか。

### 二七 異様な恰好をした墓

桐岳寺には近頃迄墓場通路の傍に石の大壺の眞中に大酒徳利型の石塔を載せたものがあつたか無縁墓で戒名等も判讀出来なかつた。今頃は見當らぬ。此外に同寺には遺愛の洗手鉢を石塔代りに立立てこれに天水を受ける様にした石塔は同寺内に久城春臺を始め外に一個所、其他信樂寺、清光院にも各一個所現存して居る。茶人の趣味として水溜を抹茶碗に花立を茶釜に象るとか、酒呑み居士が花立を酒徳利型に肖せたものなどは異様にあらすして意匠を加へた迄である。酒呑みの藝術家小林如泥百年忌に建てられた如泥之蹟は特に加賀浦産瓢箪形の自然石を利用してあるか異様の感はなくて意匠が籠つて居て面白い。

### 二八 水溜に栓抜穴あるもの



大きな水溜に於て穴を掘りて水の酌替掃除に便にしたものか二箇所ある。これは一寸氣のきいた思付きて其當時こんな事迄注意したのは振つて居る。一つは普導寺の有澤院部入道委身藤原直玄。有澤能登藤一通連記の一基と。今一つは慈雲寺の眞善院殿妙有日實大姉、信愛院殿妙要日持大姉連記の一基かそれである。

### 二九 無縁墓

各寺院の墓地に入つて一番氣の毒に思ふのは無縁墓の多い事である。如何に榮枯盛衰世の習ひとは申せ其家断絶若くは零落の餘り他郷に放浪するとか種々な原因にて年忌供養も出来ず誰も墓参回向する人かないのかと思ふと眞に涙かこぼれる。某住職の咄によると無縁墓として見る影もなく扱はれたものかいつしか墓参し佛事供養を營むものかないではない。是等は多年異郷に出慈して居て生計に餘裕を生ずると郷土か志しくなり祖先の佛事供養を心掛ける様になつた爲かと思はれると。

### 三〇 無縁墓供養塔

寺院に於ける無縁墓供養塔は形式大小、精粗、文字等様々である。無縁墓の處置は

人権に關係する重大問題なれば只法規を猶とするのみでなく出来る丈け慎重に手を盡して決して惨酷に扱ふことなき様心すべきものである。

### 三一 無縁墓善處

予は「お墓と家運」を一讀して関東地方の某寺院にては無縁墓を處理するに寺内一ヶ所に取絡め石塔の正面を前方に向けて三月の雛壇式に巧に配列し置き、萬一親戚縁故者の來りて心當りを搜索するに便ならしめたものである。寺院によりては戒石其様の石塔を踏段と爲し踏石として容赦なき處置に比へては大變な相違である。

### 三二 住職の篤志

只今でこそ無縁墓となつて無用の長物の如くに扱はれて居ても往昔其家隆盛の頃は堂々たる壇頭にて寺院の爲めに随分盡したものに相違ない。是等特殊な無縁墓に對し金彼岸等に花を供へて回向して居られる住職の行爲を目撃し親しく其咄を聞いて大いに感に打たれた。兎角に本を忘れ勝ちな現代に於ては確かに奇特である。又大雄寺の現住職は先代の事業を繼續して檀家の系譜事蹟を誦べ特に無縁墓調査に至りては實



に列れり盡せりと謂ふべきである。之れには從來幾多の費用と日子とを要せられた事と深く敬服する所である。此寺には檀家夫々の細密な調査書が出来て居て至極便利であるが他寺院にても過去帳の修整は必要な事と思ふがこれは時日を要する大問題に違ひない。

### 三三 質素な墓

墓は虚栄心の展覧會ではない筈だ。これ見よと言はん斗りの宏大な墓は決して人々の好感を牽くものではない。歴々な方の質素な墓は何となく床しく見えて却て人から見上げられて居る。例を挙げると幾多もあるが山内曲川、堀東風田村導我等かそれである。

### 三四 異郷人の残した墓標

異郷人にて當地官衙等に在職中死去したものの若くは其家族の墓標を往々見受けるが特に目に着くものは天倫寺に山口縣人の島根縣令境二郎の母及び鹿兒島縣人の島根縣知事藤崎五郎の母の墓標がそれである。

### 三五 乃木大將一家の遺髪塔

乃木大將は祖先崇拝の爲め態々善光寺に来て在々高綱の墓に参拝供養された事が兩度あつた。こんな因縁で同寺には大將一家の遺髪塔が建立されて居る。寶物庫には近親者玉水正之より石倉住職宛に贈呈せられた乃木伯爵の遺髪遺齒伯爵夫人及び長子の遺髪目録と將軍の軍帽一個の目録とがある。尚ほ東郷元帥揮毫の遺髪塔云々の一幅、玉水正之謹誌の幅物、將軍の詩歌、石倉住職宛の書簡、又正面には在々水高綱の水徳と位牌とか安置してある。

### 三六 岡崎家の墓域

菩提所は寺町水龍寺なるも墓所を松江分元山極樂寺に卜し、そこに墓域二ヶ所を劃り其内に大小十數基並んで居るか墓石刷面に内田氏とある分と岡崎氏とある分とがある。聞く所に由れば内田は浪士時代の姓で岡崎は町家となつてからの屋號で、祖先は三州岡崎の出身との事。中興元祖は岡崎屋次郎右衛門清房、中興五世は伏五位勲四等岡崎運兵衛真清、中興六世は正四位勲三等岡崎國臣である。



三七 南田町與力町の入口即ち西角にあつた古墳に就て

桃節山好格の未定稿に地理圖説録二大區南田町の部に左の記事がある。

一 道幅 東南隅に東西何町南北何町の屋敷あり堀尾吉晴の隱居所に造れるものにして京極氏の時はその老臣多賀備中の屋敷となりしを松平氏の時に至り老臣大橋茂右衛門の屋敷となる。故に城下第一の大宅にして宅の西南隅に辻番あり

二 古墳 與力町の西角吉晴隱居所の西北隅にあり何人の墳なりや詳ならず或は曰ふ吉晴の墓なりと富田の岩倉寺に吉晴の墓なりとてあれども此は其子忠氏の墓なるべし吉晴の歿せしは松江に移りし後なれば「武」の説を正しとすべきか 以上

予の少年頃追與力町の西角に松山某の屋敷があつたが只今では全部住宅に分割せられて當時の面影は何もない。古老の咄にも古墳の跡は確かにあつて堀尾公の菩提所があつたと云ふ事と、更に其後松山の隣家のものゝ實話によれば兩家の境界には竹藪があり其竹藪に接して六疊敷位の土地が地面より稍高くなり此の石敷の中央に自然石があつた。又北側の道路に面し東北隅一坪位の場所に石の祠があつて其左右に小燈籠の

掘之てあつた事を覺えて居る。古墳があつたと思はれる証據には大雨降り續いた折には竹藪の辺表面の土砂を流し流し住々小骨片の露出して居ると認めたる者たと、要するに堀尾氏古墳の件は確實な文献なく桃節山も単に一私見を述べて疑を存するに過ぎないか思ふに主要な物は夙に堀尾氏に關係深き円武寺などに抄されて其跡方を神聖淨化したものであるまいか。

因に多賀備中は京極若狹守の家老にて知行一萬三千石此人の空屋敷を大橋茂右衛門が松平直政より受領したものである而して予の居宅は此宏大な大橋家居宅の最小部分である。

三八 屈指の町家の菩提所

今日では主客轉倒して町家の方が大概當該寺院の檀頭である。隨て檀頭株の墓所も一見して認知せらるゝ位である。

本能寺——岡崎	常放寺——佐藤	三成
信樂寺——滝川	西光寺——三島	森脇
尊念寺——大島	常樂寺——桑原	山内



久成寺——織原 小西 明宗寺——尾原  
 慈雲寺——清原 河光寺——松本  
 龍昌寺——山口 東林寺——内藤  
 法眼寺——加納 桐岳寺——原田  
 此外遺蹟不勸

三九 儒者 (第一流に限らぬ私塾寺小屋師匠合入)

天倫寺 桃源藏白鹿 桃世明西河 桃維忠黄圃 桃世文翠庵 黑澤弘志石齋 生田  
 重兵衛無咎 山根松翠 山本安良  
 清光院 園山雄文恭 田村令終寧我  
 桐岳寺 桃好裕節山 河合篤敬 高橋一 山科大十郎  
 龍覺寺 内村友輔鱈香  
 法眼寺 高水文四郎果 青水弘  
 河光寺 澤野脩輔含齋  
 真光寺 吉田小右衛門藏六

稱名寺 渡部寛一郎桃蹊  
 妙興寺 永田穂積拳齋  
 専念寺 澤野華兵衛  
 常樂寺 田中市右衛門北山  
 信樂寺 祝彌太子猛  
 徳専寺 諏訪部眉捕  
 永泉寺 高橋茂藏  
 久成寺 吉川屋新藏  
 其他調査不行届

四〇 武術家

直信流柔術の傳統者は左の通り  
 開祖寺田勘右衛門清英 二代寺田平左衛門良次 三代井上九郎右衛門正永 四代井  
 上治部太夫正順 五代井上九郎右衛門允克 六代兩森次右衛門行清 七代加藤泉堂  
 正昌 八代石原左衛門中和 九代梶川純太夫一成入道淡永 十代石原左衛門中俊



十一代堀六太夫重正 十二代井上治部大夫正敬 十三代松下善之丞榮道

天倫寺 茂山一傳一存 伊藤次春 伊藤次庸 以上淺山流居相 足立彌次兵衛河親親術兵學

大野松之助 同本流休術等

萬壽寺 富永時愿 劍術射術 喜多川正知火術 布施源兵衛 山鹿流兵法 松下善之丞榮道

柔術

清光院 寺田勘右衛門清英柔術 松本理左衛門管鎗 森住三右衛門術志 劍術 加藤

氣堂正昌柔術

常教寺 大石源内良持 大石源内良寛 以上劍術

善導寺 雨森次右衛門行清柔術槍術 中村力之助正義 劍術

順光寺 横田清漢 入道景義 横田景徳 以上兵學

洞光寺 梶川純太夫一成 入道淡水柔術 柳川安齋兵學 井上九郎右衛門允克 石原左

傳次中和 石原左傳次中從 以上三人柔術

長瀨寺 子松時連山心弓術

桐岳寺 堤六藏柔術 渡部功劍術 井上治部大夫正順柔術

慈雲寺 柳多瓦次郎劍術

柔術

東林寺 矢島半兵衛金麟 石田五兵衛 以上馬術

久成寺 稻垣豊三郎 矩丘馬術

### 四一 藝術家

自性院 倉崎權兵衛陶工 野々見松壽齋 野々見龍玉齋 以上彫金工

常教寺 小林和泥彫木工 高橋理兵衛長信刀匠

洞光寺 荒川重之助龜齋彫木工

信樂寺 小島清兵衛漆壺齋漆工

龍覺寺 勝軍小庵宗一蔀繪 相見松雨印刷

德泉寺 出雲善四郎(雲善) 陶工

法眼寺 飯島八十五郎 飯島島飯 以上御細工物

龍昌寺 石谷為七石工

宗泉寺 村田壽親全彫工

### 四三 文學者

國學 桐岳寺 中村好子



詩人 永泉寺 僧天麟 桐岳寺 平賀靜遠 藤脇松軒 信太松北  
 萬壽寺 西川自宿 村上琴屋(宗宗) 西光寺 三島睡雨  
 洞光寺 勝田睡仙 安栖院 林原蕉窓 真光寺 吉田弘軒  
 久成寺 渡部翠園 円成寺 高橋菊徑 稱名寺 渡部桃蹊  
 歌人 萬壽寺 村上琴の舎正雄 清光院 森為恭 信樂寺 瀧川龍山  
 相岳寺 中村舟子 津田問野義庸 久成寺 村上曾那  
 罪人 法眼寺 百足坊門脇友川 全龍寺 山内曲川 恩敬寺 大谷鏡石  
 常樂寺 山内梅圭 山内好一 土塚政袖山松羅  
 川柳 真光寺 村穂柴舟

四三 數 學 者

明宗寺 尾原總八 洞光寺 藤岡雄市 淨心寺 久保田慶之丞  
 龍昌寺 安食好敬 真念寺 澤野重兵衛 長滿寺 松本文之丞  
 東林寺 天島景秋

四四 教 育 者

桐岳寺 瀧川坐之丞 倉崎金之助 楠田金之丞 天倫寺 桂田猪熊 原巽  
 真光寺 吉田因成 加田煉太郎 江田享次郎  
 洞光寺 栗田幹 中村鉄太郎 藤井芳夫 石原又之助  
 長滿寺 西田千太郎 林玉之助  
 光徳寺 山本庫次郎 久成寺 渡部潤一 松井勘太郎  
 正覺寺 下村元之助 清光院 海野恭基 明宗寺 尾原亮太郎  
 妙興寺 高橋利亭 大雄寺 圓山市太郎 本龍寺 中村徳之助  
 萬壽寺 近藤修之輔 稱名寺 渡部寛一郎 龍覺寺 森本兼之丞  
 真念寺 成相伴之丞 菩提寺 佐藤勝太郎  
 赤崎共同墓地 伊藤蔓之助 勝部龜主 平塚忠之助 足立鋏太郎 福田ヨシ  
 泉泉寺 松村工イ

(此外遺漏不勘)



四五 醫師 (旧藩側醫以下町醫)

天倫寺 杉貞庵 清水道仙 田代鶴平 清水恭儀 佐藤於菟  
桐岳寺 久城春菴 田代基安 北尾漸一郎 西川録三郎  
萬壽寺 北尾德菴 原養哲 原政菴 中川賢(以下) 吉見去春(以下) 楠寛正 松村  
寛藏 西川自省

自性院 坪内春同 坪内春利 坪内春白 古蹟見珉 古蹟勝遊  
大雄寺 橋本元齡父子 橋本其心齋 野々村春昌 石井良益 杉間道外  
妙蹟寺 高橋貞元 高橋利亭 入野野虎吉 清水龍太郎 清水元滯  
清光院 小笹昌榮 田野俊貞 田野嘉一郎

信樂寺 堀三陸 西川水次郎  
善光寺 佐野文修 佐野又新  
洞光寺 田部辰次郎 龍昌寺 長岡謙文  
尊念寺 錦織円右衛門 泉泉寺 金津春逸  
誓願寺 志立富松 真光寺 三谷節郎  
常教寺 瀧田春海  
久成寺 建田快庵  
安相院 林原貞吉郎

円成寺 森本文齋  
明宗寺 佐藤謙吉

常樂寺 前田作  
松江神道分局 久野元明

淨心寺 天野文庵

四六 辯護士 (元代言人)

久成寺 分母合祀 岸清一 萬壽寺 向阪弘  
長瀧寺 松本文之丞 大雄寺 野口敬典  
桐岳寺 萬光萬平 法眼寺 佐野正雄  
円成寺 伊藤博教 赤崎共同墓地 福岡世徳  
善提寺 阪本昌訓  
龍覺寺 松浦六右衛門  
天倫寺 金田市造

四七 書家

萬壽寺 近藤道昭 清光院 海野辰五郎叔明 田村學我  
桐岳寺 藤脇善政松軒 信樂寺 堀 康風 大雄寺 梅式膳靜逸  
全能寺 原一忠清齋 慈雲寺 柳多元次郎 泉泉寺 富村檢校(書道七巧齋)

四八 畫家



法眼寺 飯島雲岳 飯島華岳 常榮寺 田中市右衛門親山 永迎寺 松本教寺院  
 西光寺 堀宗太郎樂山 長壽寺 小村成章應山亭 泉泉寺 中野南涯  
 明宗寺 長谷川新兵衛石峯 自性院 野々見勝四郎大雲 妙興寺 松原文忠  
 常寂寺 佐藤喜八郎愛山 東林寺 内藤敏三郎玉音 萬壽寺 宅和綱一  
 龍覺寺 森本兼之丞香谷

四九 茶 匠

善導寺 有澤能登一通 萬壽寺 有澤宗滴 有澤宗閑 有澤宗枚  
 東林寺 矢島全麟 常樂寺 藤井長古 藤井宗古  
 專念寺 正井道有 龍覺寺 山崎克三 桐岳寺 中山有松庵  
 安福院 立石月淡

五〇 生花師匠

天倫寺 小林源藏 小林米太郎池坊流 真光寺 住職學道權律 古流  
 龍昌寺 宮内九兵衛無存 松月堂古流 明宗寺 長谷川新兵衛一極齋 松月堂古流

全龍寺 米田萬四郎故月軒 松月堂古流 信樂寺 廣瀬慶之助 花道自然流  
 円成寺 小原六合新雲心 小原六合新光雲 盛花  
 正覺寺 原松聲 池坊流

五一 力士藝人

西光寺 雷電為右衛門 四聲山加手右衛門  
 正覺寺 釋迦嶽雲右衛門 雷電為五郎 法眼寺 大門為右衛門  
 千手院 松の音久吉 円成寺 小野川調右衛門  
 善光寺 鉄の戸文四郎 自性院 由良の戸長藏  
 大雄寺 琴引木口谷口彌藏 法眼寺 豊澤新次郎  
 自性院 岡本美千丸 源氏節

五二 門弟の發起に成つた墓標

門弟共の發起に成つた墓標は随分多いか特に有名な碑文入の分は別としても謡曲生  
 花茶道武道裁縫等の建燈建垣等に氏名を列記したものと及び學校生徒が恩師に捧けたも



のは可成り多い。

### 五三 墓誌の摩滅

儒者武術家等の碑文墓標の古きものか任々破損又は消滅して字體の分らぬりのか多い。雲州一帯水侍石を以て墓を造るの普通なるも元來水侍石は体裁佳良なるも堅實でないのは缺點である。碑の角々の破損又は彫方の粗雑な爲めか字體淺薄摩滅して讀むに堪えぬには一番心を痛めた。これでは折角儒者等の墓誌も世に残す事出来兼ねて讀に遺憾千萬である。要するに今後の計畫者は石材彫刻等に細心の注意を拂ふべきである。

### 五四 墓碑の撰文者

桃源藏 白鹿 故國相朝日大夫記功碑 雲藩政仕留守即海野君 白鹿桃翁壽藏碑  
嶺松院孤秀大御墓誌 直敷茂信墓碑 富永時忠墓碑 神谷大夫貞悟君墓碣銘 祝子  
猛墓碑 安齋軒柳川先生之碑 外に萬壽寺に不明の分一。  
桃世明 西河 一指松本君墓碑 蕩々菴原先生之墓 山心子松先生之行狀。

桃世文 翠庵 早苗公錫墓誌

桃好裕 節山 直信流承道寺田先生碑 天野久兵衛正統碑

團山 雄西山 西河桃先生墓碑 黃團桃先生之墓 岸崎左久次時照墓 大石源内良  
故墓。

團山 齡之窓 清水道仙墓 足立治親墓 雨森行清墓碑 柏垣主馬矩立墓碑

田村 令終寧我 文恭園先生碑

妹尾 謙三郎事雨森精翁光雨 寧我先生碑銘 杉貞庵墓碑 吉田氏八世藏六君碑銘 東

風堀先生碑 節山桃君墓碑 瀧川智英墓碑

内村 篤斐 齋香 山科大十郎墓碑 外に(天満宮前銅燈銘)

澤野 修輔 齋 尾原篤能先生碑

永田 德積 齋 澤野重兵衛墓碑

齋 藤 重南 長尾隼人正一勝墓誌 田中北山墓碑

村田 寂順 明治二十七八年戰役銅佛誌

松原 見龍 明治廿七八役戰役着靈表志碑

山村 勉 齋 久野君墓碑銘



松原 和大石源内墓碑。  
 熊谷宣 篤 床几山碑。  
 塩野敬 直 無咎生田先生碑。  
 伊藤次 庸 伊藤次春墓碑。  
 浅田四郎 柳村 松井君頌德碑。  
 岡本全太郎 成章 翠園渡部先生遺惠之碑。  
 村上壽夫 琴屋 (清原太兵衛翁紀功碑) 二礼は佐田に。  
 井川精一 雙岳 悼虎谷駒兵詩。  
 竹内平太郎 四士追悼之碑。  
 高橋 茂 藏 野白嘉次郎墓碑。鈴水孝之助墓誌。  
 常松之茂 合翠 講武亭一即墓誌。  
 中村準一 郎 相見松雨墓誌。  
 中 村 英 神田豊次郎墓誌。  
 小 川 蛤 宮次郎藏墓誌。  
 澁川竜太郎 響言 岸清一博士銅像誌銘。

渡部寛一 郎 桃蹊 渡部謙助及渡部善雄墓誌。大森仁右衛門墓誌。若槻男爵銅像誌。  
 林 崇太郎 原 冥墓碑銘。  
 柳多 元次郎 柳多元碑。  
 松平直亮 伯節 松江城碑。  
 籠手田 安定 西南之役雲石隱戰死者紀念碑。  
 孔 平 信 敬 天隆院壽像碑。天隆公退筆冢碑。  
 重 野 安 輝 内村先生碑。澤野合齋翁碑。  
 山 田 剛 樂山神社碑。  
 草 場 康 老雨雨森君碑銘。  
 小泉栖 吞 頂 天麟法師碑。  
 長 興 專 齋 故佐々水文蔚君碑。  
 鈴 水 虎 雄 文齋森水君碑。  
 其阿上人 懷澄 佐々水高綱墓誌。  
 玉 水 正 之 乃水大將一家遺髮塔誌。



五五 墓碑の揮毫者 (撰目書は同人に記し書方は有略)

海野重茂叔洞 (桃源藏と同様の分は有略)

大石源内良持 天神境内板筆函

藤山 惟熊 天隆院壽徳碑 天隆公返筆款碑

日下部東作鳴鶴 樂山神社碑 内村先生碑

巖谷 修一六 光雨雨森君碑銘

金井 之恭 澤野合齋翁碑

市川 三兼 故佐々水文翁君碑

樋口 敬之 松江城碑

東郷平八郎 乃木大尉一家遺髪塔題字

梅將敷静逸 東風堀先生碑 節山桃君墓碑 久野君墓碑銘

堀義康東風 寧我先生碑銘

雨森精翁老雨 一指松本君墓碑

桃種忠黄園 廣松院孤秀大姉墓碑 薄々菴原先生墓碑

桃世善(黄園の男) 黄園桃先生墓

園山 貞 尺立沱親墓碑

園山 齡一 田村寧我ニ 桃好裕ニ 各々撰且書

毛利八彌元茂 翠園渡部先生遺惠之碑 西南之役宮石隱殿死者紀念碑 文齋森本君

碑

塩野 楠亭 無咎生田先生碑

井山 專方 長尾阜人正一勝墓碑

柳多元次郎 四士追悼之碑

藤脇善政松軒 神田龜次郎墓誌

左藤 惟時 山科大十郎墓碑

山本良次郎 尾原篤能先生碑

佐 成胤 富永時應墓碑

野間 元重 岸崎左久次源時照墓碑

杉間 道外 森為恭大人碑



五六 碑文入の二婦人の墓

一は白鹿桃源藏の内室にて醫師杉玄春の妹名はお越碑文は桃源藏、一は村上舎喜の妻名は曾那碑文は廣瀬春尚、此外に老女龜田の墓と佐藤たけの墓とには簡單な經歷由來が誌されて居る。

五七 法名の字體

字體は概して隋書であるが偶々、隸書行書草書の書風も見受ける。尾原亮太郎の法名行書は友人村上琴屋翁の筆になつて居る南無阿彌陀佛の六字を正面に彫つたものもあれば只單に佛の一字丈け彫つたのが光徳寺に宮内屋として三四基相並んで居る。

五八 辞世等を彫つたもの

墓石に辞世選吟を彫つたものは珍らしくないが其内を少々左に、  
何ひとつ見之年と露の明りかな  
ひと筋に此道ゆかん冬木立  
山内曲川  
門脇友川

「名月や柱のかけの硯箱」もてなしや花に横野の亭主ふり」

石をかむり花見ぬ穴へ隠れん坊

世は蝶の夢とちりつゝ衣手の露

於もしろやいてく死出ぬさくら狩

「遊ふ蝶光る螢や蟬の聲」  
「蜂喧も枝も夢の世の中」

國寶の鐘のひびきや花の山

御屏の誓ひのふねに法のうみ

なみもしつかにわたる彼の岸

歎くなよかりの姿はみへねとも

われは六字の住居こそあれ

現世をいさ立行かむとこしへに

やすき黄泉のたひぞ嬉しき

みほとけにたのみおきつるわか身こそ

物おもひなくこゝろやすけれ

さては散るものと思へど櫻花

袖山松麓

松本寸八

村上泉女

洞臥櫻

武部守典

蝶々（不詳）

松本恵十

義榮

勝部聖洲

山村花香



なほをしまるゝ春のくれかた

あらたのし今そうき世の雲はれて

西のみくはの月を見るかな

今ぞしる彌陀の浄土ともふすのは

地水火風の四大成りけり

八十三とせ過せと何も千秋園

たゝ長生したか万歳

身のかきりいのちつゝして浮の世に

とゝめけむこの魂鎮石

柳多律子

村上智龍

洗心菴

龍川龍山

水村和男

### 五九 共同墓地

共同墓地の廣積なものは北には石橋町赤崎の分と南には乃水村松尾附近とにあるが赤崎の分は基督教、黒住教、金光教、大本教などの墓も交つて居て内地雜居の形である。この外に普通の墓も多いが従来墓地狹隘にして到底それ以上に區域を擴張するだけの餘地なきを遺憾とするものは此地に墓地を選定して思ふ存分の墓を造營するもの

は少くない今夜は此度戦死軍人の墓など相應に殖える事と思はるゝ要するに山地を開拓せば余裕相應にあらんも草花々の林しい個所も少くない。別に桐岳寺奥の山中は主として神葬墓地で社家並に神使の奥津城が並んで居る。

### 六〇 陸軍墓地

正面に満洲事変忠死者之碑とあるも今日では日支事変の忠死者も合同されて居る事は申さぬ。故陸軍少將從四位勳三等功三級飯塚朝吉は第六十三聯隊長にて出動の飯塚部隊長であつたが昭和九年三月十日吉林省依蘭縣土龍山に於て名譽の戦死を遂げられた。此人を合同墓碑の筆頭として向て左側には北川、高爪の両少佐、岩田、加藤、細島の三大尉。鈴木、伊藤、脇谷、長瀬、池淵の五中尉、宮本、吉田、内藤、上田、船越、松原の六少尉を始めとして下士兵百九十五基。又向て右側には原本軍醫少佐、野村、高橋の両中尉。名越、鳥越、舟尾、松村、藤兵少尉を加へて四少尉、富永、作野、押田、中山の四准尉を始めとして下士兵百八十八基。概括すると少將一人、少佐二人、三等軍醫正一人、大尉三人、中尉七人、少尉十人、特務曹長二人、計二十八人、下士兵三百八十三人總計四百一十一人。此内松江出身者は池淵輝久中尉、永瀬清



次郎曹長、古浦繁悦軍曹、大田友榮、古瀬祥、手錢勝郎、梶川正信、田中優、吉岡隆吉、秋鹿才一、海士金一の伍長八人、舟水安隆、糸原金三、田中忠之助、田淵信雄、大田由友、枡田眞市、長谷川俊、佐々木茂、熊野万藏、伊藤忠三、長尾勝理の上等兵十一人、計二十二人を救へることを得た。

新墓地は地盤既に立派に出来て居るも未だ一基も据えて居ない。只入口に磯谷陸軍中將の平忠魂といふ一大燈籠が建つて居るのみである。昭和十三年一月以後の戦死傷者の遺骨は今猶市内の某々寺院に安置されて居る由なるか、追て準備の出来次第此の新墓地に埋葬されて永久に英魂を鎮められることとなる。此の陸軍墓地に足を踏み入れたものは國家最高の尊い犠牲者に對して心の往く迄無限の感謝感激を捧げることを決して忘れてはならぬ。

### 六一 最 尾

前田慧雲文學博士の著述（信は力なり）や紙碑に関する記事の概要を申すと今日では世か進むと共に萬事か華美になつて来たが殊に近頃は戦後で到る處の町村では競ふて戦死者の石碑を建てるやうである。然るに綺麗立派を盡くさんとする結果、中に

は恩賜の金をも石碑の費用に用盡すと云ふやうなものもあるさうである。（中略）先日阪谷朗庵と云ふ人の文集を讀んだ所其文中に「紙碑之説」と云ふものがある。其趣意如何といふに石で碑を造る代りに紙で碑を作つたらよからう紙と石と比較してどちらが永く保つかと云へば一寸考へると云ふ迄もなく石が永く持つと誰でも答へるであらうか再考考へるとさうではない。昔は經書などを千萬年の後に傳へん爲めに特に石に鑄つたものがあるが然るに今日では其石の經書はなくなつて仕舞つて反つて紙に摺つた即ち書物にしたものが今日迄傳つて居る。それから考へ合して見ると石の壽命より紙の壽命が永いと云つてよからし。且又費用の点に就いても石の碑は余計な金銭が要るから餘程富裕な所でないといふ派な石碑は建てられないが紙の碑ならば如何に貧乏な人でも作るよから出来る。そんなら紙の碑とは如何なるものであるかと云へば勿論死骸を埋めた所に相應な墓石を建て、戦死者を記念して宜しいが碑文だけは紙に摺つて小冊子にし千部でも万部でも印刷さすのであるが費用は僅かであるに拘らずその名譽の流傳するところ廣く永く記念せられるであらう。（下略）

予は熟々思ふに従來當市に墓所調査の編纂が有つたか無かつたか存せぬが予は戦死軍人のみに限つて紙碑の必要あるとも思へず市内に墳墓を有せらるゝ一般人士に就いて



てむその知ると知らざるとき間はす成るべく多く故人の事蹟及び名譽を世に流傳せんため大々的に紙碑の必要を感じ聊か敬虔追慕の微意を表したに過ぎぬ。乞ふ徳より始めよやである。

市内墓しらべ 前編 終り

## 市内墓しらべ 後編

### 一 歡喜山月照寺

外中原町・淨土宗本尊阿彌陀如來 元名蒙光山 蒙光攝從四位松平定安謹書。

高真院殿前羽林次將歡譽一空道喜大居士

始祖松平直政寛文六年二月三日歿享年六十六 明治四十年五月陸贈從三位松江

神社祭祀

大國庵前出雲國主羽林次將不昧宗納大居士

第七代松平治郷 文政戊寅年四月廿四日歿享年六十八 大正四年十一月十日陸贈從

三位松江神社合祀

故國相朝日太夫妃功碑 第五世朝日再波卿保の功績桃源藏護撰海叔明謹書。此碑も  
と川津村志立山上に建立せられたものを後年特に不昧公の廟前に移された。大正四  
年十一月十日陸贈從五位。



善隆院殿前羽林次將大譽寬海澄心大居士

第五代松平宣維 享保十六年八月二十七日歿享年三十四

隆元院殿前拾遺光譽四真道祐大居士

第三代松平綱直 寶永六乙丑年十一月十五日歿享年五十一

直指庵前出雲國主從四位上少將竹林瑤光大居士

第九代松平齊齋 文久三癸亥年三月十四日歿享年四十九

寶山院前拾遺高譽元真道徹大居士

第二代松平綱隆 延寶三乙卯年間四月朔日歿享年四十五

月潭院殿前出雲國主從四位下侍從兼出羽守露瀆宗潔大居士

第八代松平齊桓 文政五壬午年三月二十一日歿享年三十二

源林院殿前拾遺真譽覺道俊巖大居士

第四代松平吉述 寶永二乙酉年九月六日歿享年三十八

天隆院殿前羽林次將仁譽義蘊南海大居士

第六代松平宗行 天明二壬寅年十月四日歿享年五十四

奇像碑は安永七年天隆院五十の賀に達せられた時建こられたもので大電上の巨碑

此石材は柱石礎石共元辨縫郡又多美村大字又多美の山中より切出したもの。碑面には臣孔平信敏撰文豊州杵原藤山惟熊書並篆額とある。出雲天隆公退筆冢碑 安永七年夏四月二十七日臣孔平信敏謹撰豊州杵原藤山惟熊書藤山惟熊の事蹟は數年前の鳥根評論に予の寄稿として詳しく出でて居る。展 誠 炭五位伯爵松平直亮書 明治二十年十二月一日松江公舊臣及有志者建之。

### 二月照寺附屬地所内の墓地

外中原町鷹匠町

佐藤家累代之墓 (最近の建立)

大阪院松江藤彦良醫居士 醫師藤原彦次郎墓

明治二十五年一月五日亡享年二十八歳

本姓佐藤なるも藤原家の名跡相續者 産婆佐藤サトの實兄に當る大阪市にて卒去。左記五人の法名一石塔内に連記せられたものは一見一讀真に悲劇の極である。赤岳院徳叟良隣居士

圓明院即應利頓居士 (切腹享年四十九才)



開光院即應良運居士（十九才）

早岸利散童子

判殺り

十五才

一聲利念童子

十二才

天和四年甲子年二月十二日

泰岳院は初代佐藤平兵衛正春の事にて松平直政の功臣延寶八年十月罪ありて仁多郡横田村に替居を命せられ其後一家断絶せしむ同村某家（杜家）にて死去し應分長壽の由に見ゆるも確証はない。圓明院は二代目佐藤平兵衛正秋の事て一族横田村に替居中呼庚されて切腹を命せられ其場所は極樂寺との事同寺に埋葬せられた。開光院は正秋の長男で父子同時切腹。早岸利散童子は正秋の次男一聲利念童子は正秋の三男であるか共に父の手にかかりて泉でたものか。

此外未子一人あつたが窃かに乳母に連れ出されて加賀浦に逃れしと。此の遺児には内々村松將監家より救助手當を與へたとの事である。平兵衛の妻女に就ては不明なるか其實家は天野傳左衛門方ではあるまいか。

以上の五人連記の石塔は平兵衛等百年忌に建立の由なるか誰人の所為かは全く不明天和四年より算せば天明四年に相當する此悲哀事件は何等信據すべき記録なき爲め

狭らに傳説流布して居るか之れに由れば藩侯江戸より御歸國の節常例に依り何か國許にて衰つた事はないかとの御尋に對して天野傳左衛門曰く。村松將監驕に長じ佐藤平兵衛に切腹を命じた云々。村松の驕暴之れより露現したと。此同情者天野なる者は佐藤家に間諜深き者にあらずやと傳へられて居る。

出雲私史に曰く貞享元年（天和四年の改元）二月九日人を遣して佐藤平兵衛及び其子三人を仁多郡横田に捕へしめ十日松江に至り十二日死を平兵衛父子に賜ふ。初め延寶八年十月平兵衛罪あり横田に放たる平兵衛の父は高直公に大阪冬夏の二役に從へる者なり故を以て罪一等を宥し且つ刑に俸米を賜ふ平兵衛快々として米を民に借りて俸を受けず臣籍を除かれん事を乞ひ是より放縱漸く甚しく是に至つて死を賜ふ。或人曰く「此時家光隆次驕權を握つて驕肆にして平兵衛と相惡し平兵衛の罪死に至らず其罪は隆次の驕す所の者多し」と平兵衛は香嶺母孫太左衛門將令の管する所の組士なり。

予の聞く所に由ると村松内膳直賢食禄三千二百六十石屋敷は内中原に在つたと見え今にも内膳橋の名を存して居る。其子村松將監隆次これか佐藤平兵衛一件の相手である。屋敷は今の北殿町四辻の角一帶。其弟の村松將監靜賢（内膳直賢の第四子）



罪ありて國外放逐後は其屋敷は家老大柳多の邸宅となつた。

又佐藤平兵衛は番頭梅源太左衛門の組士で知行七百石職掌は目付であつたと、屋敷は村松將監の屋敷の西隣りにて今頃の健康相談所の辺であるが切腹断絶後は御細工所となつた。

出雲私史に元禄二年二月二十一日村松將監靜賢平買建殿隆寛の爵禄を奪ふ云々寶永四年五月三日村松靜賢國に歸り城下に往むを許され臣籍に復す云々。予の聞く所に由ると佐藤家の再興(第四代目)を許されたのは松平定安の時であつて殿町正城内に現柱の佐藤家は第六代目に相當すと、墓所は元極樂寺にあつたものを月照寺所屬地内に轉移し今日の場所となつて居る。

### 三 圓輝山法眼寺

外中原町 曹洞宗 本尊釋迦牟尼

大橋家墓所 昭和十季仲春大橋茂右衛門第十世孫貞勝敬修 寺町普願寺にあつた墓所を大橋貞勝の發意にて此寺の門前に轉移して一絡めにせられた奥津城である。其壯麗人目を奪き形式も清新である。

林祥院覺岸道圓居士 元租大橋茂右衛門政貞

承應三甲午年十月十六日行年不詳八十餘歲。大橋家は尾張國士にて南朝方に忠勤した舊家であつた。茂右衛門は賤ヶ嶽之本槍の一人福島市松正則に仕へ勇士として世に知られて居た。慶長五年關ヶ原戰爭の前月美濃國波阜城に籠れる石田方の織田中納言秀信を攻め七曲より本丸迄押寄せ進撃中、三ヶ所にて三度手疵を負ひ主命によりて惣里に歸着療養した。功に由つて知行六百石後に千石となる。元和五年六月福島正則罪あり領地没收後は流浪の身となり江州大津に閑居中平野甚兵衛の推挙により寛永十五年申十月十三日松平出羽守直政に召出され同日京極若狹守の家老一万三千石多賀越中の空屋敷拜領松江に於て高六千石の外に尺輕三十人を附けられ格式勤方良まらざるも堀尾祖馬と力を合せ祖馬死去後は三谷半太夫等と共に一藩の樞機を掌り藩主輔佐の功勳くなかつた。

八代目大橋茂右衛門安鏡 貞勝の祖父、西園寺鎮撫使事件に身を以て一藩の安危に任じ決死の盡瘁を以て知らる。大正六年八月十四日歿。

被靈院殿妙應日節居士 第五世朝日柳保墓

天明三癸卯年四月十日歿享年七十九。



雲晴院殿泰山日登居士 第六世朝日丹波保良(恒重)墓

松平齊恒の後見として國用充實の功勞者。文化十二年乙亥年正月晦日歿。禪院菴百霊坊。

文政七年甲申年九月十二日逝去。山内曲川以前の俳句の宗匠。墓の側面に俳句を刻せるも樹陰に妨げられて不明。

紫譽雲岳善士 雲藩御抱繪師飯島助九郎墓

狩野伊川院法印障牋の門に學び榮正と名く。画名雲岳松心齊と號す。天保三年五月十六日法橋位宣下天保十四癸卯年四月二十九日逝去享年六十餘歳。天保十一年八月御城繪圖二枚を命ぜられしもの今猶ほ存して居る。

馳出庵華岳榮翁居士 繪師飯島業右衛門墓

並河權重次男幼名忠五郎にて飯島雲岳の養子。繪画を狩野晴川院に學び華岳と名く。馳出庵も業右衛門も皆藩公直指菴の賜ふ所である。明治十四年三月二十四日逝去享年六十餘歳。

繁林院茂山祥昌居士 翔龍館主青木茂墓

明治二十一年六月二十九日享年四十九。

樂家院碩果得興居士 長善舎主高木文四郎果の墓。

家塾を聞き修進館助教拜命其盛時門人百餘人。明治二十五年十月三十日享年九十餘。機應惠鋒居士 角力東京大阪押合目代頭取大門為右衛門墓。

行年五十七。

諦誠院茂林清儀居士 吉岡林太郎の碑。

明治二十九年五月二十九日。

正五位勲四等杉本辰三郎之墓。

豊山澤道信士 藝名豊澤新次郎墓。

大正二年九月十日。

彰常院清節鹿山居士 武田常太郎墓碑文入。男武田起謹述。

昭和二年一月廿八日行年六十六。

三浦家之墓 大正十三年七月第十世文學博士三浦周行建として第一第二第三とある。

文格院殿嵩山周行居士 京都帝國大學文學部教授文學博士三浦周行 三浦家第一の墓。

昭和六年九月六日享年六十一。

豪徳院正道義雄居士 辯護士佐野正雄。



辯護士向阪弘に就き法律を學び立志上京判檢事試験合格、判檢事、辯護士、同會長、市會議員、衆議院議員、松江消防組頭、公證人從事。

昭和八年三月二十五日享年五十七。

高龍卷舟峰友川居士 六代中興門勝舟友川墓。

昭和九年九月二十五日享年八十一。

自然石碑 ひと筋に此道ゆかん冬水立 八十叟 友川

故陸軍歩兵軍曹勲七等 布施き太則萬常墓

大正六年二月二十四日。

故陸軍歩兵上等兵勲八等 長谷川俊墓

佐水斯富錦に駐屯討伐に轉戦し、昭和八年七月十八日病歿。

故陸軍歩兵曹長勲七等功七級水瀬清次郎墓

昭和九年二月一日晚河附近の戦闘に於て重傷を受け入院中五月十八日戦場死。

#### 四 寶珠山清光院

外中原町 曹洞宗 本尊釋迦牟尼如來

門前大柱石 紫萱酒 海野叔明筆

五輪塔 龍池院祥藏如雲居士 平野甚兵衛墓

寛文十一年辛亥年四月九日。

平野之記に元祖平野甚兵衛本國生國共尾張津島にて賤ヶ岳七ヶ槍の一人平野權平長恭の子孫寛永十五戌寅年出雲に於て松平直政に召出され新知千三百石御番頭役となる慶安二己丑年隱居を許されて隱居料六百石、如雲と號す、出雲に於て死去。

定得院一峯宗麟居士 直信流柔道開祖寺田勘右衛門英墓

延寶二甲寅年八月十七日逝去。文政六癸未年八月十七日一百五十年忌常光師兩森行

清橋景行、當師横山純太夫藤原一成

直信流柔道寺田先生碑 碑銘不明

萬延元年歲在庚申秋八月杳好松撰并書

略歴 若狭の人寺田平左衛門定安の子初名正重父に従ひて出雲に來り父より貞心流和術と號する拳法を學び得しが一日奮然志を立て校事を弟に譲り置て諸國を修業し遂に江戸に出てたが劍道の奥儀を定めるには技術の本にのみ熟して居ては駄目だと悟り終に深山に入って靜座齋心して道を思つた、又禪を澤庵和尚に學び不動林不動



習の妙理を發明し又新道春に就て偏道をも學びて其要領を會得し茲に至つて直信流柔道を創めて松江に歸つた。松江侯大に之を禮遇し別に二百石を與へ藩の柔道の師範たらしめ門弟數百人、吉村扶壽(福野七郎右衛門の高弟で美保の人)、藩士宮崎與三兵衛(元力士巖島の事身長六尺餘強力無双)、井上九郎右衛門等がある。勘右衛門嗣子のない爲めに家は断絶したか其流儀は實弟の良次に傳りたるも其家は天保年間傳八の代に至り江戸に出奔したので家絶えては舞つた。

享徳院乾岳智元居士 海野太郎左衛門安重

寶曆十二年三月二十七日享保八十六

靈齋致仕留守郎海野君 假名海野太郎左衛門諱安重

明和八年辛卯十月碑文は桃源藏櫻狐子日記宮重没拜書孝子大衛騎射郎之書撰、出雲私史に享保元年税則を改めて受免と爲す時に小池安重海野檢田の吏と爲り以爲らく「税則は見取より善きはなと受免より善からざるはなし受免は十歳の入を均して以て常と爲し民をして保して之を出さしむ庶民の愚、費を餘して以て凶を補ふを知らず豊なれば怠り凶なれば病へ田圃異に由て荒廢し保税復出づる所なし且つ出雲の田、山に依る者あり水に傍ぶ者あり彼は水を好み此は旱を喜び一國の間豊凶同じ

からず受免の法何ぞ立つべけんや夫の見取の如きは觀て之を取る豊を豊とし凶を凶とし地を治め田を檢し乃ち其税入を議し之を議するには必ず其入あり税は則ち見取より善きはなし」と因て上書して受免の害を極言せしか報せず、安重は本姓海野氏安重の曾祖之重興、堀尾氏に仕ふ高眞公の封に就くや之重の聰勇を聞召して禄を賜ふ相傳ふ、「先世嘗て山姥を娶つて妻と爲す故に子孫皆赤掌にして多力なり」と、之重一日入朝して佳節を拜す公指して侍臣に謂つて曰く、「此は見れ山姥の孫我家の奇物なり」と、之重の曾孫常重重嘗て新田の害を極言し識者之を稱す、安重は常重の弟なり容貌魁岸にして武技を善くし兼て書算に通じ頗る經史に渉る少にして父安重重に從つて杵築に在り確元公其能を聞き將に命じて檢田の事を習はしむ、初め岸崎時熙等檢田法を發明し秘して人に傳へず安重覃思數年竟に自ら之を得たり今公に至つて進めて吏と爲し遂に列に一家を立てしむ彼海野氏に復す其性甚だ嚴其聲鐘の如く事を論するや貴流を避けず人或は之を惡む、

一刀直心居士碑 森衛忠俗構佐五右衛門

寶永六年己丑十一月六日故あつて自歿年七十三

上信院兼堂復心居士 柔術加藤氣堂正昌墓



文化四丁卯年二月廿二日行年九十六歳

此人は常に円き石を以て柔道本立の傳儀に應用し、勝下丹田の法を多年鍊磨した。故に病死した時も長時間、腫脹の下に血温があつた。平素曰く我が円石は我靈を込め置くものなり云々。その石は彼の産土神田原神社の一小祠に鎮められた。氣堂は常に録倉權五郎が鳥海爾三郎を射返した事を教例として、門人に剛健の氣を養ふべき事を教示した。

一指松本君墓碑 槍術師範松本理左衛門文如

萬治三庚子年九月五日享年七十五。碑文は文化六年歲次己巳秋九月、桃世明撰、清光山襲れて石碑之れか、爲め壞はれ五世の孫、理外の魂により、安政六年、藤集己未季秋、桃世文識、妹尾謙書と追記してある。理外とは理左衛門法名義、鋒院無的、理外居士、文政十一戊子年三月十日逝去。

文恭園先生碑

天保八年丁酉四月、門人若干人、建、田村令終撰、且書。

略歴 園山西山名は雄字は叔飛松江の人、加藤文耕の第三子、初め勇三郎と稱す。侯國山家の義子と爲り、桃白鹿に就て學ぶ。三十二歳で雪川（不昧公の弟、有名な俳人）の

侍讀、寛政四年江戸藩邸の教授を命ぜられ、同六年雪川より西山の號を受けた。碌百石。文政四辛巳年四月十二日、歿行年六十九。

寧我先生碑銘 門人妹尾謙謹撰、文堀義康書

銘曰、先生之學明誠、致功先生之德、孝敬由哀、嗚呼先生之述、詠歎於邦者耶。

田村寧我諱は令終、字は子朗、號寧我、水谷基命の第四子にて、田村光武の養子となる儒學の外書道に巧なり、門人には兩森精翁、桃好裕等。

寧我先生之墓 嘉永四年辛亥七月朔日、卒、田村氏男忠改建。生無益於國、死無損於家、噫嘻。

哉、逝八十二生涯。夏先生所自銘也。門人田代文祥奉遺命拜書。

森爲泰大人碑 千竹園大人、明治丁丑年五月、杉間道外書、門人建。

爲泰通稱左馬之丞、竹園と號す。千家尊稱中村守臣の門人、明治八年四月、歿享年六十五。

元祖大休院殿前能州太守雲峰以開大居士

秋庭能登守諱細典、慶長十一丙午年十一月十五日歿。明治二十八年六月十五日。三百

回忌 秋庭十一代揚一郎建立。

嘉祥院殿藏道禪麟居士 醫師田野嘉一郎墓

明治三十九年五月四日、享年四十。



智休菴源恭君墓 試齋居士 醫師小笹昌榮墓

明治三十六年一月二十日

後徳院殿活學大機居士 醫師田野俊貞墓

明治四十三年十二月十日 歿行年五十六

祖禮興道居士 松江寫真業祖森田禮造墓

大正九年五月十五日

園山家之墓 杏林院釋觀齋居士 園山 勇

自由黨談吹者 醫業會社長 宮崎長野 西縣知事 衆議院議員當選五回 (第三次第四次

次第五次第七次第十次) 大正十年八月十四日歿

徳達院繩山東園居士 從五位勲五等岩崎龜太郎墓

昭和四年十月二十九日 享年六十四

還叟恭元居士 海野恭基墓

多年初等教育に従事し多藝の人にて作法及茶道の師匠 昭和七年四月七日 享年七十

九

故陸軍歩兵特務曹長勲六等功七級平野茂墓

明治三十八年三月六日 盛京省遼東省遼陽市高地にて歿

陸軍二等看護長勲七等功七級 往江傳市墓

明治三十八年九月十五日

第四軍兵站監部附野戰郵便通信手四部彌助墓

明治三十九年三月九日 陸軍病院鉄嶺分院にて歿す

故陸軍砲兵曹長勲七等 秋山堅墓

明治三十九年十月十日 歸幽

英夜院慈濟玄航居士 海軍機関少尉候補生布野英墓

明治四十年八月十六日 吳海軍病院にて歿す 享年二十五

故海軍主計兵曹長勲六等 西山種次郎墓

昭和五年七月十六日

顯彰院忠峰良義居士 海軍中尉正七位勲五等功七級 往江忠太郎墓

昭和十一年一月八日

### 五 久遠山正覺寺



外中原町真宗大谷派 本尊阿彌陀如來

□會 釋雲道 釋迦嶽雲道居士

義芳

側面 釋迦嶽雲右衛門

智淳

年 二十七

身長七尺四寸七步

身重四十五貫八百目

側面 智 弘化二年己七月四日

生所當國能美郡大塚村舊姓天野氏長子

又當事天野雲右衛門

釋 教圓 側面 岡為五郎事當電為五郎

側面 天明五年乙巳十月三日當國御抱相模

昭和八年九月二十二日松陽新報社主催にて此西力士の墓前祭を執行し興行中の横綱

玉錦等参拜した。釋迦嶽永孫岡金太郎は木子市に住す。

照月庵釋和光居士 觀世沓原匠樋野和一郎墓

大正二年一月二十日門人建之

原清風軒松聲 生花池坊師匠 門人献燈

大正六年八月四日

下村家歴代墓 蝶夢菴薄風下村存海 薄流下村古存 蝶子下村存就以上文筆に親み非

句に長じて居る就中存就の手に成れる秘書等大に参考となる。(附記) 正覺寺本堂の

一火懸額は下村蝶夢菴薄風七回忌追善の奉納 (長歌間半幅半間餘上下貳段に列記)

月雪花詩歌連俳人を見渡せば道光上人釋日諫 朝日寺海印智鼓 豊前正行寺雪華方

丈 田村蕭一兵衛寧我 生田重兵衛無咎 乙部三谷の兩家老 注藤喜八郎 勝部本

右衛門 田部長右衛門 誓願寺 西光寺 正覺寺の各住職を始めとして家

中 町家 農家計百名に及んで居る。古く煤に染つて居るも所謂月雪花の精彩を集

めたものに大いに吟誦するに足る。祖父七回忌追悼句に、名は浪にさかせる花の

梢かな (薄流) 七七の夢や月雪花の蝶 (蝶子)

學海院釋松堂居士 松堂下村元之助

明治二十一年七月十二日行年二十二才。予は少年の頃此人の指導を受けた不幸短命

可惜

故陸軍歩兵伍長 岡道屋墓



昭和十三年三月二十九日支事妻台兒莊附近三里の戦闘に於て戦死す。

### 六 神護山天倫寺

市外法吉村國屋 臨濟妙心寺派 本尊釋迦牟尼如來

白鹿桃翁壽藏碑 白鹿院桃原子深居士

生前壽藏碑を作り自分で碑文を撰じたもの。享和元辛酉年八月十九日没年八十歳

石見國川合村醫政根幸祝の子幼名友之助 大藏 題藏 碑次郎 源藏名は長字は茂

功 子深 百川 白鹿 養老菴等の號かある。桃原園の養子となる。松江儒學の間

祖孫百石門人には團山雄等實に多數

西河桃先生墓碑 西河院義諒釣翁居士

碑文は團山雄撰撰諱世明字君義 義三郎と稱した。文化七庚午年八月十九日歿行年

六十三

桃白鹿の養嗣桃家第二代目の儒者である。實踐躬行の人で其着座臥記は隨筆ではあるが全篇悉く至誠の文字である。白鹿は嗣子なきを以て其門人より適當の人を選擇して養子とせんとて白羽の天を義三郎に中てられたが義三郎卷寫に承諾せずして曰

く願はくは三ヶ年間の猶豫を賜はれと。三ヶ年候に亘つて始めて承諾の旨を答へた。義三郎は當時農家の一青年で一躍して藩士となり刺へ大儒の養子となり殊上な幸福の身となるべきに拘らず三ヶ年考慮せられたのは取して其責任を究うし得べきや否やを慎重に考慮されたのであつた。既に桃家を嗣かれた後と雖も恭儉己を持し氏神への養錢さへむ毎に養父母に乞うて戴いた程である。島根郡西川津村の人であるから村名を抹つて西河と號した。

黃園桃先生之墓 黃園院志林子存居士

碑文は團山雄撰撰男世文建之男世善謹書 諱子孝字維忠號黃園 文化十四丁丑年二月

二十四日歿行年三十九

翠庵桃先生之墓 一翠庵世文君重居士

團山家より入りて桃黃園の嗣子となる。大藏 世文號翠庵 成慶 明治八年四月七

日歿子好裕

續松院孤赤大姉 桃白鹿の室お縫藏

碑文は老艱桃源藏撰重孫維忠謹書 醫師杉玄春の妹お縫 寛政八年丙辰八月四日享

年五十七



以上桃家の碑文は剝落消滅して殆んど讀まれざるは遺憾の至りである。

桃溪院心源覺性居士 桃硯太郎墓

桃好裕の長子 小學校では予と同期生不幸短命明治十八年十一月二日

黑澤氏石齋之墓 石齋弘忠居士

延寶六戊午年正月十六日享年六十七 藩文學の間祖黑澤三右衛門弘忠字有隣號節齋堂 別號玉峰 石齋様三百石伊勢の人與村三之丞弘宣の次男にて幼名次郎後に幕府の御馬預黑澤定幸に知られ其氏を冒すに至る。林道春に就いて學んだが其推舉により松平直政に仕へて食禄一千石遂に急老格に昇進せられた。我藩文學の間祖にて著書多き中で懷橋談、雲陽話、本朝烈女傳、高直齋山二公御年譜尤も世に知らる。一切の官職を辭した後は老を島根郡菅田村巻石山の別荘に養ひ行年六十七歳。

松雪院殿傑山常英大居士 前佐陽太夫長尾車人正一勝墓

寶永三丙戌年四月二日卒去 文化十五戊寅春正月九世孫長尾勝胤建碑 文は齋藤重

南護撰井山專方謹書

大正四年十一月十日 贈正五位

乘禪院朋來京心居士 桐齋 杉貞庵墓

碑文は兩森精翁撰孫杉元賢謹書 諱弘字は海量初め文伯と號す。本姓中高秋鹿郡醫人某の子にて入つて杉意庵の養子となる。明治十三年八月二日歿齡八十一。

仙岳院道樹居士 四世中興 清水道仙墓

諱布實號若山通稱道仙本姓大國なるか入つて清水家の嗣となる。家貧苦學累進して藩の側醫となる。文化十四丁五年六月二日江戸に於て歿年五十三。碑銘は後學園山齡護撰考孫清水謙益謹書 銘曰勇敢孝慈 備嘗辛苦 功崇業廣 永受斯祐 助厥子孫 清家之祖。

威徳院孔禪自敬居士 辰立彌次兵衛治親墓

細江清親の第二子にて江戸辰立半右衛門の養子となる。銃術軍法築城法の研究家として大銃の工夫製造を以て知らる。弘化四丁未年十月二十三日歿享年六十八。七世孫貞勝建石後學園山齡護撰男園山貞謹書。

淺山一傳一存之實塔

不傳流居相淺山内藏入道一傳の事にて貞享四丁卯年正月五日享年七十八其後八十七年即ち安永二癸巳九月八日奉祀不傳流師範一川五藏正峯入道門外并門人八百餘員欽建之。



伊藤次春之墓碑

碑文 尊嚴曾孫大衛騎將食邑八百石伊藤次庸謹撰 松科長大夫不傳は後山一傳の門弟  
松子直政に召出されて師範校となつた。

兩樂院殿春山宗習居士 伊藤長大夫次庸墓

天明六丙午年春二月晦日 (過去帳には伊藤庄助父とある)

徹源真照居士 生田十兵衛墓

外中原町に私塾を開き和學漢學教授天保十四年癸卯十一月八日卒壽七十三才

無咎生田先生碑は弘化三年丙午十一月門人若干人建塙野敬直撰七十八齡塙野蘭亭書。

天野久兵衛正純碑 碑文は明治三年庚午夏五月學館教授桃好裕撰且書。久兵衛は大坂

の役直政公の從者五十餘人中的一人 馬廻役に大坂夏の役に戦死した。子なき為

め久しく絶家して居たのを明治三年功臣の後を興されたもので其由來記述。

靖國院殿功徽宗敷居士 瀧川源作紀元周墓

文政九年丙戌十一月二十三日

松子齊齋小字鶴太郎父公卒去の時僅に八歳。文政八年十二月三日官命あり曰く「松

平鶴太郎年尚ほ幼し(十一歳) 明年秋を以て日付赤松左衛門瀧川源作を國に遣し以

て之を監せしむ」と。九年七月三日左衛門源作松江に至る。源作疾あり十一月二十

三日を以て没す松江天倫寺に葬る。最近此墓見之す如何なりしか。

大野松之助墓 岡本流休術 藤原備道算法獨道 門弟多數

松翠先生碑

石橋町に成林舎を開いて讀書算術を教授した人。山根松翠先生三十三回忌記念明治

六年二月二十五日建

戒光院殿良皇妙慧大師 島根縣令境二郎母

明治十二年十月二日 (山口縣士族正六位)

蘇崎兼子墓 島根縣知事藤崎五郎母

明治二十三年二月三日歿享年七十二 (鹿兒島縣士族正四位勳四等)

清良院恭温居士 醫師 清水恭藏墓

明治十六年三月十五日

啓教院傳外義昌居士 桂田猪熊

明治二十六年八月二十六日

常照院惠明大師 醫師 錦織祥育娘力



明治四十一年十二月廿七日享年三十七

養氣院若道坦然居士 醫師 佐藤於菟墓

明治四十二年五月九日

贊亮堂透峰祖雪居士 醫師 田代御平墓

明治二十八年十月十八日

朽園山水先生之墓 門人建之

枅園齋居士 山本安良父遺記

文政四年己年正月二十九日歿

鷗寮山水先生之墓門人建之

鷗寮院良阜景波居士 山本安良私化三丙午年正月七日歿

北堀町醫師山本安良は餘文社を設け漢學算道筆道教授

修竹軒松蔭居士 池坊宗匠小林源藏

大正四年八月十日行年七十三

池坊汎大日本總幹事小林修竹軒松蔭碑

修松院德林居士 故大日本總幹事小林水太郎

大正十一年十二月十九日行年四十四

守中院有終東堂居士 第九代 原 冥墓

昭和七年十月十四日享年六十一

碑銘入 交友從五位勳六等林榮太郎識

銘曰温々哲人持己簡約維仁維義憂道鳴鼓

平素身を持すること勤儉身長は短小なるも膽力あり辯論は滔々として一塵を塵じ頗る名利に恬淡にして操守極めて嚴正その剛直驍勇に就ての逸話も夥からず。病を獲て危篤絶命せんとするや横臥しなから自ら筆を採りて書して曰く。六十一年辛酉間無端今朝占安然東堂臨終書。又略画にて寛永通寶を描き之に次り句を添へた。永寶の丸の中にも四角哉。又自ら戒名を定め守中院有終東堂居士と。

山村家之墓 セラニエム栽培家又和歌をよくす 山村百太郎

明和十一年三月十一日享年七十七

みほとけにたのみおきつるわか身こそ物おもひなくこゝろやすけれ 花香

故陸軍輜重輸卒勳七等 大野觀三郎墓

明治三十八年五月十三日盛京省小紀新堡兵站病院にて歿す。



故陸軍歩兵二等卒 水村茂利墓

明治三十八年九月三日三河泡にて病死す。

故陸軍歩兵上等兵勲八等功七級 長尾勝暉墓

昭和九年三月十九日吉林省依蘭縣九里六にて戦死す。

### 七 中本山大雄寺

外中原町本門法華宗本尊南無妙法蓮華經、聞く所に由ると大雄寺を以て一國一宗の八品派といふのは法華經八卷二十八品中尤も大切なるお經が八品ある故に大雄政の塔婆杯にも八品南無妙法蓮華經と書いてある。八品派は一國一寺に限るとの事は虚説ならん。加賀の金澤市には數ヶ寺あると覺ゆ。只出雲には大雄寺あるのみで本山は京都本能寺、藩祖御事蹟に松江大雄寺の第四世日章（日章は足羽氏）といふは博學にして詩文和歌造む心得たる者なれば直政公より毎々召され又寺へも入らせられ御物語などありける由御居間の御座の御手水鉢を賜はりし事ありて今に寺の庭にあり。或日日章へ此寺の門前見之懸りの田地残らず寄附し遣はずべしと仰せられしかばそれは有難き事なり何卒此寺の東横の垣

を堀覆に成し下されたと申上ければ其通りには成し遣はされたとお思召に叶はざりし事と見えて其後には近づけ給はざりし由。

寺の門外道路側に誠齋小世昌蒙先生之碑

明治四十四年三月

松月醫士之墓は松月院天鼓日鳴居士 側醫百石橋本元齡墓

萬延元庚申年十二月二十六日行年五十六

美中居士は美中院解脱日成居士 橋本元齡伴墓

碑文入摩滅嘉永七年甲寅四月廿八日行年二十四才

其心齋醫士之墓 過去帳を調査したるも不明 橋本某

本妙院春昌日信居士 醫師 野々村春昌墓

明治五年壬申十一月廿八日

壽岳泉永信士 力士琴引 本名谷口彌藏墓

明治二十八年七月二十七日

直里院笠舟日來居士 解讀士 野口敬典墓

明治二十九年正月二十三日



徳光院誠忠日榮居士 家扶 足羽仲次郎墓

昭和六年十月十七日

祥雲院殿瑞翁日儀大居士 神祇

嘉永二總七月七日

下部に 佐々木家世々之墓

池本代々之壘

とあり

（嘉禄二年丙戌は鎌倉時代北條義時之頃、誰の墓か不明）

正七位梅式膳輿城 藩の要職にて書道に通ず將殿静進の書號美保神社宮司

明治二十九年四月六日享年六十二

五輪塔本法院石雲園月洞居士 梅式膳、元祖墓

寶永四年丁亥正月初八日

賢徳院殿幸年日輝居士 藤田幸年墓

大正二年十二月十八日

智徳院敬善日正居士 園山市太郎墓

昭和十一年二月二十八日出張先八束郡加賀浦の旅舎にて急死享年六十四、予が島根

縣立濱田中學校在勤中の同僚にて無二の親友多年史蹟名勝天然物調査委員となつて  
盡瘁せられた文部省より表彰を受けられた。

南無妙法蓮華經

竹内氏

海軍少將竹内平太郎分骨埋葬

昭和八年十二月二十一日行年七十六

尤せ成塚 信泉水菴書

寛政己未歲冬十月十二日 泉坊門入

兵庫屋重兵衛の子孫宮田姓の墓

兵庫屋重兵衛は堀尾氏松江へ移轉の際雷田より來つた豪商にて京店に兵庫屋小路と  
云ふのがあつた。縣史に據れば末次本町大橋通りに於て其東側一面を占めたる豪家  
兵庫屋なるものか萬治元年東隣の湯津屋なる町人と相圓り各自に六尺宛の屋敷を切  
りて小路を作りたるもの之れ則ち兵庫小路なりと。

陸軍工兵二等卒 石井哲墓

明治三十八年八月三十一日戦病死

雲賞院道外日詠居士 醫師 杉間道外墓



明治十三年五月二十七日

### 八 専念山正應寺

外中原町真京大谷派本尊阿彌陀如來 昭和十二年四月十四日燒失

故陸軍歩兵軍曹勲八等 伊藤榮一郎墓

明治三十七年八月三十一日遼陽附近にて戦死二十六才

故陸軍歩兵 杉間傳三郎墓

明治三十三年八月五日天津西北火藥局攻撃の際名譽の戦死行年二十三

勲七等 錦織為市墓

明治三十九年十一月十八日死亡

故陸軍歩兵上等兵 山村信次郎墓

昭和十三年十月二十五日

### 九 内中原町松江神道分局構内

久野君墓碑銘

家親從四位勲三等冠手田安定書

廣瀨勉齋學人山村良行撰 靜逸格式曆書

銘曰山陰之山西海之水維永彭沛維山秀峙先生之學永浩山麓耳齒未壯者宿之似乃建新碑表德於此魂無不之儼然來止

明治十有九年五月

略歴 諱元明字泊子幼守密太郎佐賀縣佐賀郡下古賀村の人。家世々醫を業とす。天資英邁廉潔勤勉力行明治三年始めて十五才藩の醫學好生館に入て蘭學を學び後縣の醫學校に學びしが九年東京に赴き大學醫學部に入り十年擢りれて警視局醫學貸費生となる。十七年島根縣醫學校助教諭兼附屬醫院の醫員となる。十八年隱岐巡視の歸途病に罹りて九月六日歿享年二十九。著書に筋肉示要あり。組織學、解剖學、診斷要訣、代數學の諸書は脱稿しなかつた。發行人入戸野虎吉、三浦直三郎、加納榮一郎、佐藤彦次郎、海士乙之助、岡本一之助、補助員高橋盛寧、田野俊貞、渡部孝之、南二郎、堀井洌、河合弘次郎、星野秀太郎、増田正心、田中安五郎。

### 〇 未次埋立地



内村先生碑 明治三十五年壬寅八月

題字松平直亮伯爵 正四位勳三等文學博士重野安禪撰 正五位日下部東作書  
碑銘省略略歴諱爲榮字子輔號龜谷文政四年己巳四月五日生通稱音之助弘化元年實名  
海屋に從事し後藤崎小竹の門に入る。安藤秋里、奥野小山、橋本香坡と共に藤門の  
四天王と稱せられた。嘉永四年昌平校に入り安積長齋等に就て學ぶ。安政四年再び  
大阪に出て、塾を開き此頃勤王志士と交盟し當時の文通今猶ほ存す。歸郷後は藩校  
中學校師範學校の教諭となり傍ら私塾相生舎を開て子弟を教授し門下より人材を輩  
出した。明治三十四年五月二十二日没享年八十一。

### 二 松江城山公園

樂山神社碑 碑銘省略 明治十五年五月

篆額正二位勳二等松平慶永 宮内文學從五位川田剛撰 正五位日下部東作書  
(明治三十一年此に移轉)

阿騎運兵衛翁之像 若槻禮次郎書 松陽新報社副社長勝部本右衛門誌  
西南之役雲石隱歿死者紀念碑

島根縣知事從四位勳三等龍手田安定撰 島根縣屬毛利八彌書

贈從三位源朝臣直政公 帝展審查員米原雲海作

大阪冬陣十四歳にて真田ヶ丸に先驅せらるゝ馬上の勇姿銅像

松江城碑 明治四十三年五月建 (碑文略)

從三位勳四等伯爵松平直亮撰并篆額 東京樋口敬之書

### 一三 縣廳正門前

岸清一先生像 昭和十年十月

銘曰湖山鐘精斯人茲生邦家之光鄉黨之榮

題額樞密顧問官正三位勳一等元田肇 銅像銘撰友正四位勳四等文學博士瀧川實言撰

設計製作帝國美術院會員 内藤伸

發起者 島根縣出雲學生會 東京島根縣協會 松江市長

### 一三 奥谷山真光寺

奥谷町真宗本願寺祇本尊阿彌陀如來



吉田氏八世藏六君碑銘 大參事吉田小右衛門重光

碑銘缺損友人雨森精翁撰文并書

諱重光字子札號牧所福岡世徳の實父 文政五年正月生明治十一年一月四日歿壽五十六年一ヶ月法名曜朗院殿功慧藏六居士

釋學道權律師 第八世真光寺住職にて勸修寺宮家より御繪旨を受けて居らる。

享和元年三月八日歿

出雲開祖贈松月堂古流生元日終監職釋學道權律師之碑

正四位子爵植松雅道誌

百三十周忌追遠の爲め昭和六年三月八日道統門弟中建之

松月堂古流傳統 學道權律師 藩臣石川某 宮内九兵衛 長谷川新兵衛

水田萬四郎 森脇嘉右衛門 等

真明院因成法師 真光寺住職吉田因成

明治二十九年四月二十三日行年五十八

南無阿彌陀佛 吉田因成師(雨森光雨の門弟)

尋常中學 修道館現旧生徒有志者四百六十一名 明治二十九年六月十日七々忌辰納

淨覺院釋慎詳節道居士 醫師三谷節郎墓

明治十六年六月十五日行年三十九

釋即情蓮乘信士 松陽新報記者川柳號珍馬 村總柴舟墓

大正十三年九月十二日

啓成院釋榮昭居士 正七位勲六等加田榮太郎

昭和二年十二月二十八日行年五十八

予の附屬校時代の學友又通摩安農郡大田高等小學校在勤中の同僚にて爾來文情不淺

精華院釋亨心居士 松中教諭江田亨次郎墓

昭和五年十月三十日

故陸軍歩兵二等卒 山畑清太郎墓

明治三十三年八月十五日歿死年二十二歳

常念院釋忠輝 故陸軍歩兵中尉從七位勲六等功五級池淵輝久墓

昭和十二年九月五日河北省靜海縣燒空倉に於て歿死

一四 龍淵山桐岳寺



奥谷町曹洞宗本尊釋迦牟尼如來

經尾忠氏の次子天折し桐岳宗秋童子と諡し其母長松院（前田玄以の女）は菩提の爲め桐岳寺を富田の櫻崎に建てられたが慶長十八年之を松江の奥谷に移された。

靈洞春臺庵主 直政公側醫 久秋春臺墓

正徳五乙未年十月四日歿行年七十六。

尾張國愛知郡の人法橋宗立の子、松江藩に聘せられ直政の側醫として三百石を給せらる。號は木平又椹山。博學多通詩歌に長じ文章を能くし殊に書かうまかつた。子は昭和七年十月四日春臺佛事供養後展覽品を一覽したるに春臺の水像遺品追弔の詩歌俳句等があつた。

春臺は賈性剛直峻烈又頗る廉潔の士であつた。其妻は加藤清正麾下の名士森本儀太夫の娘で夫婦の間に一男一女あつたが男は偽を言つたと云ふので斯る不心得者をして武士の家を嗣かためてはならぬとして斬殺したとの事。女子も亦早世して全く後嗣がなくなつて仕舞つた。藩侯から養子を取勧めになつても固辞し若し養子しても不肖であつた場合はそれこそ禄を盗むと同様で相濟まめとして其禄三百石と家屋敷とを

奉還して法古村雪吹山麓の下屋敷に隱居して仕舞ひ狩野永徳に三十六歌仙の像を描かせ、それに題歌したものをも其堂に掲げ朝夕娛んで風流に一主を送つた。遺命して墓碑を建てたる生前愛用した手水鉢に其法號を刻んで置けは自から天水を受け、水祭りも出来て毫も後人の手を煩はすに及ばないとか靈洞春臺である。春臺今に絶えぬ下の病に効驗ありとて墓水を頂く者が多い様である。此人の醫術が神妙であつた事は今にも傳へられて居る。

徹岩祖祠居士 醫師 田代泰安墓

享保十七年五月八日

久城春臺の高弟である其師恩に感じて特に命じて師の墓側に極めて小さな墓を建てしめたものである。彼の伊能忠敬が其師高橋東岡に對すると同様の佳話である。泰安の墓に大正元年六月建之とあるは如何なる故にや再建造の標にも見之ぬ。

積功院忠山良儀居士 佐田川開鑿者清原太兵衛墓

天明七年丁未十二月二十八日享年七十六。

清原太兵衛翁紀功碑は昭和三年八月佐田神社賽路に建立せられ碑銘は從五位勲五等村上壽夫の撰。銘曰鑿川除害百難不辭衆怨所集挺身當之噫大丈夫其命數寄水流混々



功業萬斯

無輝院春日鴻飛居士 山科大十郎墓

碑文入 内村篤斐撰 佐藤惟時書

山科子起名は正興通稱大十郎父名正雄家は世々神谷氏の與力、後才最も律學に長じ又繪事を好む、熊野祠禮宮司後權少參事、政務に參與した、明治十年五月十三日享年三十一。

直承院誓譽道入柔能居士 柔術井上治部太夫正順墓

安永九庚子年月日不明行年八十六才昔提所は尊念寺にて此に葬る、

幼年より柔術を鍊磨し諸國修業の後江戸に出て諸流を研究して其の精妙を得寺田勘右衛門以後古今の達人と呼ばれ直信流中興の祖と稱せらるゝに至つた、食禄百貳拾石俵傳造昇進した、藩の柔術師範たる事五十六年の長きに及び多くの良門弟を得たが當永源水 坪坂甚右衛門 横山吉郎太夫の三名は有名である、治部太夫が柔術の玄妙を得た事の一例は家に在つて直信流の仕掛けを勤め長合を鍊る時などには門前を小歌で通る者が忽然と歌を中止し又水辺に咏む鷺なとを白眼むと鮎がすくみて動かめ様になつたものだ。

可笑院廓然濁水居士 柔術 塚六藏墓

明治元戊辰年九月十七日

茶琴院有松庵宗象居士 三齋流中山先生門人建之

明治四十年九月十二日

創成院鉄額英心居士 辯護士草光萬平墓

大正十年二月九日歿

樂之院六法退藏居士 詩人 靜遠 平賀卯之助 (兩森老雨高弟)

大正二年五月十二日

清瀾院萬象賢則居士 瀧川空之丞墓

昭和二年二月二日享年八十六

予の殿町小學校時代の恩師、文學博士瀧川龜太郎賢言の父

八世北尾松陰墓 椿香院殿清生洪徳居士 醫師北尾漸一郎墓

昭和三年二月十日

信太先祖累世之墓 松北 信太英太郎

大正十四年十月二十八日享年六十



墓前の石柱には昭和二年八月北詞宗靈前剪松吟社とある。

龍光院録譽清藏居士 醫師勲六等 西川録三郎墓

昭和二年四月七日享年六十

竹内泉策代之墓 海軍少將從四位勲三等功三級竹内平太郎

昭和八年十二月二十一日享年七十六

文久二年十二月十八日松江藩士竹内雄之進の長男に生れ夙に身を海軍に志し明治十八年六月海軍少尉に任官し遂に海軍少將矣獲守府參謀長に累進す。其間日清日露の両海戦に偉勲を立て特に日露開戦の初めには歐洲より日進春日の廻航委員長として二隻の新鋭軍艦を幸ひて無事歸朝し我が海軍に一大偉力を加へた事は有名である。明治四十四年一月豫備役後は松江に歸つて閑居靜養の傍ら弘道會松江支會長、城北學事會長などに盡瘁せられし昭和七年には盡く一切の公職を辭して兵庫縣西宮市に轉居僅かに半歳ならずして逝去された。桐岳寺の外に大雄寺にも分骨埋葬せられ法名篤信院殿平等宗行日進居士。

録性院徹學英心居士 倉崎金之助墓

昭和十二年十二月二十九日

金剛院康心潔道居士 楠田金之丞墓

昭和七年十月十一日行年六十八薨焉て歿す。

善運良英信士 石工度園師 藤井善太郎

昭和五年四月七日享年六十七

直政公銅像盤石、縣社田原神社標石、月照寺内廟墓移轉等此外出雲大社の神苑を始め地方に於ける名家庭園の手入も少くない。

眞悟院殿釋正忠勇臨大居士 故陸軍歩兵中佐正六位勲四等功四級平賀正三郎墓

明治三十七年十二月五日歿

故陸軍歩兵上等兵 講武守一郎墓

鉄心齋義岳英忠居士

碑文入 含翠常松之茂撰并書

陸軍砲兵輸卒 川本駒藏墓

明治三十九年五月二十八日

故陸軍歩兵上等兵 大拙義三墓

昭和十三年四月十八日山東省嶧縣毛埠附近の戦場に歿す。



故陸軍歩兵上等兵勲八等 長谷川誠一墓  
至誠院一貫義徹居士 昭和十二年八月八日出征各地轉戰中昭和十三年六月九日安徽  
省毫縣野戰病院にて戰病死す。享年二十七歳。

同寺奥の山中に神葬の介

桃 好榕墓

明治八年乙亥十一月十八日没年四十四

河合家先祖代之墓 昭和三年五月建之

予の松江中學校時代の恩師河合篤敬

明治二十八年六月九日享年五十三 法名篤敬院諦心居士 寺町明宗寺より茲に移葬

高橋一之墓 勸善齋を開いて漢學教授

明治四十四年八月八日享年七十六歳

松軒居士千載之宅 松軒 藤脇善政

大正十一年六月二十一日歸幽

水江家累代之墓 昭和七年十二月建之

永江真澄 大正十三年六月三十日没

故熊野神社宮司兼權少紋正中村神門臣守手奥城

明治十五年二月四日没享年六十二歳

中村守手姓は神門臣富得と通稱す。飯石郡東方村の農茂助の二子である。年十三中  
村守臣の養子となり皇學歌學讀學を父に學ぶ傍ら儒學を尾張藩醫泰世壽に學び易學  
兵學にも通ず。遂に名古屋に於て學舎を開き國學を振興し屢々尾張大納言の殊遇を  
蒙る。王政復古の際四方に奔走して勤王を唱へ後國に歸り出雲大社禰宜兼學館を勤  
め明治二年松江藩に聘せられて修造館中兼宣教使となる。明治六年國幣小社熊野  
神社宮司に任ぜらる。著書數十卷門人千を以て數へたといふ。

從七位永村和男與城 明治二十四年八月廿五日幽壽七十六年

辭世 身のかきりいのちつくして浮の世にと、めけむこの魂鎮石

大社教中參教羽山繁樹大人與城 享年九十歳

明治二十七年七月五日

贈大社教大教正青木宏造墓 (旧御茶使)

大正七年四月八日没七十八歳



渡部刃渡部ヨシ奥城

龍手田知事時代の撃剣家にて警察署監獄の教師  
非職島根縣島根秋鹿意守郡長藤田諒藏奥城

明治二十二年五月二十六日享年四十七歳  
従七位永田好峯之命奥城

大正八年十一月三十日幽第二十二代甥土谷弘毅建之

六世大野泰恭 明治二十二年十一月十五日歸幽享年七十三

墓誌入 號松榮祿二百石中老參政 長尾義勝の父孝子大野恭謹建之

警視局四等巡查 黒澤柳二墓

明治十年三月十二日熊本城後山にて戦死齡二十五年十ヶ月

故陸軍輜重兵上等兵 村上 勇

昭和十三年十一月五日北支葉屋集野戦病院にて歿す 享年二十三歳

### 一五 菖蒲山萬壽寺

奥谷町臨濟妙心寺派本尊釋迦牟尼如來

瑞雲院殿道昭居士 書家道昭の事 近藤唯一茂信墓

寶曆五乙亥年十一月二十三日享年五十二

碑銘入なるも所々摩滅讀み苦し。君字唯一雲藩司郡總督近藤直應君庶長子名茂信書  
之山中章弘に學ぶ。十六舉試史曹二十内史の事を習ふ。發奮學業益々進む藩侯の知  
る所となり二十二、五口食を賜ふ。二十四別に近藤氏を立て祿二十石を賜ふ（以下  
省略）明和八年辛卯三月君の謝世を距る事十有七年。

銘曰思之思之鬼神遙之琢之磨之珠玉從之誰謂無子何教之忠庶幾道德之不彫贊乎如十  
載之松 桃源藏撰 海外明書 孝子茂德建

海野叔明は近藤道昭の門人

出雲私史に寶曆五年十一月二十三日近藤茂信唯死す茂信十五歳書を山中章弘に學び  
嘗て書未だ成らざるを以て將に廢せんとせしが慨然として歎じて曰く吾何の面目あ  
つて復た父母兄弟に見んやと乃ち寢食を忘る。に至る寒月に及び七日七夜効寫して  
舍ます眼を催せば則ち水に浴して自ら警む書更に由つて大に進む茂信は近藤直應の  
庶子なり二十四歳にして祿を賜ひ別に一家を立て後書師と為り日記役を兼ねしが是  
に至つて死す年五十二なり茂信性剛烈清儉にして構すべきもの多し最も力を筆道に



究め嘗て命を奉じて善陸公墓門の匾額を書す之を書する事数々にして一も其意に憚る者なし筆を投じて大息し深く之を思ひ疲れて寝ぬ神あり鬚髮霜の如く就いて茂信の掌中に書して曰く嘗に此の如くなるべしと茂信心に付つて大に喜び夢乃ち覺めしに恍然として字猶ほ掌に在り乃ち浴嗽して筆を下せば字甚だ妙なり彼江戸に赴き都下の書を善くする者求め贅を細井廣澤に執る一日廣澤と書法を論じ言墓門の匾額に及び廣澤試に之を書かしめ之を奇として曰く「此字照畫入の意外に出づ」と茂信乃ち具に其夢を説く廣澤歎じて曰く「至誠の感する所乃ち此の如きか」と茂信既に廣澤に學んで還り筆道益々明かなり又持明家の書法を受く公特に命じて以て史局の師と爲す今に至る迄史局其様に依り新進に假するに其法帖を以てするは其之を失はんことを恐るればなり卷契に用ふるに至れりと云ふ。

潜龍院巨海一滙居士 我國割田の租岸崎左久次源時照墓

元禄三庚午年正月二十五日

碑文入なるも摩滅 撰文園山雄 野間元重書 司税官、建

藩租御事蹟に時照の列士録に慶安三年御勘定所へ詰め承應二年より明暦三年迄春秋檢地御用を命せられ萬治元年御方役を命せられし由を記せり。後に郡奉行ともなり

て國內の地理を委しく知りたれば出雲風土記の註を作り之を出雲風土記抄と號して世に行はる。

出雲私史に直政公封に就てより二十年間檢田の吏なく秋に至る毎に會計の吏數人を十郡に遣はし承を觀て租を收む其法至つて租なり賤吏に岸崎時照といふ者（佐久次小算用）あり善く田法に通す是に至つて時照（祿百石を賜ふ）及び湯本源左衛門、横山久右衛門を擧用し税則を定め遂に檢田の吏を遣き之を「地方」といひ其法始めて備はる我國の割田蓋し時照を以て租となすと云ふ則田法記見法記などいふ書今に存せり。

蕩々院深總玄校居士 醫師 原 養哲墓

享和元辛酉年九月七日享年二十六

蕩々菴原光生之墓とあり碑文入なるも所々摩滅。本姓岡野諱逸字長羽一字養哲號蕩々菴淨齋子也姓岡原氏云々。幼にして沈思其狀兄原養泉毎に曰く我家を起す者は必ず此兒也と即ち淨齋に請ひて子となさんとす淨齋許さずして曰く吾が唯一男のみ此兒なければ則ち岡野氏の祭長く擧らずと養泉疾む事甚し會々淨齋浪率に東遊するや遂に奪ひて己が子となす是に於て姓原氏を罵す君素と不羈外疎にして内密の息國學



事數年卒に醫を京師に學び後讓の卷に從ひて遊び其秘蓋を盡して既に歸るや一時  
士流皆其名を稱へ醫業將に大に行はれんとす一朝病に罹つて終に起たず年二十六享  
和元年九月七日世を謝す嗚呼それ惜むべきのみ所謂秀で、而して實らざる者なり君  
未だ娶らず其從弟早苗文郁を義嗣となす文郁童齡にあるや友人岡本光樂、北尾子成  
の輩其名の沈没するを患へ乃ち世明をして銘を作らしむ。  
銘曰天固生之又固殺之壽之與夭莫不歸光德不壽賢大不肖耳 義子文郁建 桃世明撰  
桃維忠書

淡水原君之墓 碑石地上に標樹す。碑文中に君諱朗字珉々菴原氏號淡水を讀み得る文  
け事蹟全く不明醫師ならんか。若し原珉菴と同一人とすれば過去帳に涼山道清庵主  
原珉菴 寶曆（此年明和と改元）十四甲申歲五月十七日と記載してある。  
高源院淨觀齋永居士 國府離水（隱居名）墓  
安永三甲午年二月三日享年七十三

碑文入なるも文字剝脱して讀めず事蹟全く不明家柄は次番高百二十石國府久馬の父  
本姓井上氏諱正美本藩文學桃源齋孝子寛信の文字を判讀するのみ。  
謙忠院慈雲紹蔭居士 國府久馬墓

弘化三丙午年五月二十二日

研章院卓堂玄錐居士 醫師 原 養泉墓

寛政二庚戌年十二月十八日 （原養哲の從弟）

慈峰祥雲居士 醫師 原 文郁墓

天保七丙申年十二月十日 （原養哲義嗣）

奇應院銃翁日方居士 火術師 吉岡城八正知墓

天保五甲午年十一月二十六日發行年七十四

碑文入なるも唯讀み得たるは喜多川諱正知字城八幼名政之助吉岡嘉右衛門の嗣子と  
なる火術と林安永に就て學び彼火術教師となる創めて鑄筒の法を得遂に筒三挺を製  
して其一を献す云々（寺の過去帳痛）

孝子恭藏正路撰并書門人中林傳大夫安正立石

質練院炮巖術道居士 墓、墓

寺の過去帳にも漏れ事蹟全く不明、法名中に炮術の句あるを見れば砲術の師子。  
享和元辛酉年九月十五日 門弟記名多數

觀照院覺海總乾居士 山鹿素行門弟布施源兵衛



元禄四辛未年二月十四日

不昧公十五歳の時源兵衛に就て初めて武教全書(素行の着書)の講義を聴かれたと、

功林浄徳菴主 醫師 北尾徳菴

元禄七甲戌年十一月二十四日

一玄宗賢居士 醫師 北尾徳菴

安永九庚子年十一月九日

準繩菴素性卧牛居士 醫師 北尾徳菴

文政十一戊子年八月十三日

禪林院大圓自得居士 從五位勳五等林學士 福田介三郎墓

昭和八年十月二十八日

苦學力行の人明治十八年遂に志を得て上京し駒場農学校に入り二十五年農科大學林學科卒業後廣島、秋田、宮城、福島、長野の林務官技師等を歴任し大正二年秋田大林區署長となり到る所令名あつた。爾來郷里に歸養中澁川郡知井宮村山本家に聘せられ十餘年間同家の林業主任として其職を盡くし禪學修養の外種々の趣味を有した。兄弟五人相助けて各々名を成したが其内に予は學友として福田忠之丞を知つて居る。

功徳院丈松千夫居士 正六位勳五等根岸千夫

明治三十四年十二月二十六日

嶺雲院磐溪良井居士 法學士 根岸磐井

昭和八年三月十四日享年六十歳

元郡長根岸千夫の長男明治七年十二月出生、學歴は松中、熊本五高を経て東京帝大法科に學び同三十三年卒業して直に日本郵船會社に入り後日本銀行に轉じ大正三年松江銀行の聘に應じて歸郷し爾來同行重役の一人であつた。昭和六年二月松平家事務所の家状となる。根岸家の宅は曾て世界的文豪小泉八雲の寓居であつた關係上參觀者絶えず遂に公開せらるゝに至つた夙に入會を創始せられたのみならず自ら筆を採つて「出雲に於ける小泉八雲」を著して之を刊行し松江の一名所として世に宣傳せられた。

修學明良居士 近藤修之輔

大正八年十月二十日

徳光院琴屋壽松居士 元郡長松平家家村上壽夫

昭和七年十月六日東京市にて歿す。詩人にて多年地方吟社の盟主であつた。



村上正雄翁夫婦之墓 琴の舎主村上正雄 琴松院忠功正雄居士

明治三十九年二月十六日（琴屋村上壽夫の父）

大圓院一中央中居士 劍術兵學富永中央時忠墓

安永六年丁酉二月二十一日享年二十二

碑文入 富永時忠字子恭通稱中央 太右衛門時尹の長子なり五歳にして歌を賦し九歳射を學び中原祭に一矢唱中、長ずるに及びて色を好まず孝護を以て稱せらる。嘗て其師に就て軍器、制度山鹿氏の兵法を學び技に於て最も鋭意なり淺山氏の劍術、詩書を深藏に問ふに及びて又篤く聖教を信せり。今茲に余は大學を講するに子恭は二三社友と同じく執講するに一部を聞く毎に善眉字に浮ふ歸れば之を家君の膝下に説く。春半はにして忽ち体中の不佳を覺ゆるも猶ほ強く周旋洋官劍場に踊躍す其夜熱盛なるも明日復劍場に會して角技して己ます時に百日を期す故に病むと雖も敢て辞せざるなり。同學の人爲めに之を喻して後に歸る終に復た起たす伏枕すること八日、安永六年丁酉二月二十一日享年二十二又二 桃源藏 佐 成胤書

朝誠院殿謙徳宗恕居士 陸軍中尉從七位宅和誠之助墓

明治二十年四月十四日

高松院知徳茂承居士 生松茂承墓

明治二十年十月十八日行年四十八

親友建石墓誌記入

松林院丈山慥夫居士 醫師 松村寛藏墓

明治二十二年六月二十日

日誠院直指寛正醫師 醫師 楠 寛正墓

明治二十六年三月四日

興仁院三譽自省居士 醫師 西川自省墓

明治四十五年六月二十八日（眼科の名醫）

醫師中川氏の墓 醫師 中川 賢

明治三十一年二月五日

忠 寛 十 良

精忠院武烈義龍居士 柔術 松下善之丞源道墓

大正十一年十月七日行年八十一歳



景德院功譽顯勵居士 元祖 吉見玄春墓

嘉永元年十月十三日 以下春平迄代々醫師

弘道院仁峯宗義居士 九代目 向坂 弘墓

大正十四年四月二十四日 辯護士衆議院議員二回當選（第八次第九次）勲四等

恒徳院義雲道光居士 園曲教師 宅和銅一墓

昭和六年四月十二日

松濤菴宗開大居士 八代目 有澤能登一墓

明治二十四年十月二十三日

菅田菴尺保宗禎居士 九代目 有澤 昇

昭和二年二月二十日（元宮司茶道宗匠）

慈覺院殿大道宗牧居士 十代目 有澤七之助

昭和七年十月四日

安達家累代之墓

安正院大道普照大居士 安達駿三郎

昭和十三年三月一日行年七十歳

元札幌控訴院檢事長從三位勲二等宮内省より奉祀金三百圓下賜

松濤院至徳淨誠居士 余村松之助

昭和十三年十一月二十七日行年七十三歳

鍛冶町旧御舟屋田村家より余村家を継ぐ少壯志を大陸に求めて朝鮮臺灣支那に悠遊し日露戦役以來奉天にあつて實業界に活躍する事多年各會社重役商工會議所會頭島根鳥取縣入會長等に推され令名を博した。

陸軍工兵大尉正七位勲六等 糸質鏡三墓

真道院玄曉義三居士 昭和二年四月二十五日歿

故陸軍歩兵特務曹長勲六等功七級 石橋恭次郎墓

萬榮院三間泰二居士 昭和八年二月十三日黑龍江省綏濱縣中興鎮にて歿死す。

故陸軍歩兵一等卒 玉井房次郎墓

明治二十八年八月二十五日

故陸軍歩兵一等卒 島根文次郎墓

明治三十八年三月一日奉天附近の戦闘に歿死す。

後大子チャーミー之墓 昭和十二年三月二十八日



松江高等學校教師ウソトマン不在中官舎より失火し人々駭付け如何にチャイミーを  
屋内より牽出さんとするも火に恐れか應せず衣立欄然遂に焼死した。飼主は墓側  
に表札を建て、深く其忠實を表彰した。

"CHUMMY"  
OUR CANINE FRIEND  
NEEDLESSLY KILLED  
MARCH 28th  
1937  
"AS FAITHFUL AS A DOG"  
H. J. WOODMAN  
OWNER.

一六 尊照山千手院

石鶴町真言大覺寺派本尊千手觀音  
松井君頌德碑 (松井勘太郎)  
明治四十一年八月 柳村 淺田四郎撰

山根敬儀先生碑 明治四十二年十一月建之  
十七回忌記念燈

四士追悼之碑 (沈没千島艦乗組員の内島根縣人青木吉太郎・豊島徳太郎・石田俊次  
郎・岩崎要次郎)  
海軍大尉竹内平太郎撰文 柳多元次郎謹書  
雲照大和上

明治四十二年四月十三日示寂  
明治二十七八役歿病者靈表志碑  
明治二十九年六月 宗泉現董松原見龍撰  
翠園渡部先生遺惠之碑 (渡部潤一)

奥谷町に私塾を開いて漢學筆道教授  
明治二十一年十二月諸友門人建之 門人岡本成章謹撰 毛利元茂書  
寶嚴院逸傳嘉増居士 從六位勳六等石倉嘉太郎墓  
昭和十一年七月十四日  
松の音久吉碑 後援會建之



故陸軍砲兵騎卒勲八等 野津柳太郎墓

明治三十七年十月十二日奉天省迎水寺に於て歿す。

故陸軍歩兵中佐從五位勲五等 加村旭墓

昭和十三年四月二十六日台兒莊附近に於て歿す。

### 一七 豊鏡山順光寺 光徳寺

石橋町眞宗本願寺 本尊阿彌陀如来

眞性院殿釋道久居士 元租 神谷富次

萬治二年庚子七月二十八日享年六十八

神谷太夫眞性君墓碣銘 諱富次號兵庫

批源藏謹撰 海野叔明書 七世孫城尹世太夫越前富義建

直政公大阪初陣の際本願寺より軍資金を援助せられた時の約束により國主となつた  
曉には眞宗に歸依して一ヶ寺建立すべき旨の所徳川氏浄土宗たるの關係にて國主自  
由の行動を取兼ね内々神谷をして眞宗に歸依せしめ報恩の道を盡さしめたものと神  
谷富次の母は直政公の母月照院の召仕にて本願寺と所縁ありたれば此の交渉成立し

た。

洞龍院殿釋一清宗寧居士 要門大衆堂落越流間基兵學 横田清溪入道景義墓

天保六年乙未閏七月十四日

眞月院殿釋相道水照居士 横田景徳墓

安政四年丁巳九月二十二日 門人記名多數

智鏡院釋歌樂大姉 醫師玄丹娘 錦織がよ墓

天保十三年十月五日生大正七年八月六日享年七十七

西園寺鎮撫使事件で名を知られた女である。

狭女お加代の墓 墓の頂上石地藏尊安置

釋瓢齋建立(出雲國安來町人大阪朝日新聞社記者)設計施工松丸了丸 石匠熊殿内

昭和十年十一月上演記念

佐川家累代之墓 十三代佐川春水建之

三明院釋玄珠居士 佐川 環

昭和三年十一月二十三日東京にて歿す。

備天麟の門人で三論の造詣深し詩文を能くす。晩年外國語及び社會主義の研究を写



十等爲學の士であつた。永年松江監獄教誨師勤務。

山本家累代之墓 戒徳院釋實言好道居士 山本庫次郎

昭和十年一月一日歿享年六十九 岸博士門下生父兄一同歎嗟

松江中學校卒業後私立三州學校、滋賀縣大津高等女學校、高知縣高知中學校、埼玉縣浦和中學校を歴て明治三十二年五月松江中學校教諭となり同校に教職を執る事實に三拾餘年校の内外を問はず衆人の仰慕する所となる。

文檢應試數學科及商業科合格晩年には岸博士育英會の理事として一心を籠め英才育成に努力せられた事は博士の良譽と相待ちて人々の感銘する所である。性快活人に接するに城壁を設けず將棋と圍碁とに堪能なるは人々の知る所て逸話も仲々多い。

故陸軍歩兵二等卒 和田壽一郎墓

明治三十八年十月八日

故陸軍歩兵伍長 園山 亮墓

昭和十三年四月二十七日北支山東省腰裏嶽にて歿死す。

### 一八 松高山普門院

北田町天台宗 本尊不動明王

天麟法師碑

撰文 真泉大谷派一等教師小泉栖香頂

姓河野諱天麟字縱堅號笠津 菅洲 笠浪 石息 三蕉 竹二 永泉寺二十二世家  
整淡成舎門人多數文化四年丁卯正月二十七日生明治二十四年十二月二十六日歿八十  
五歳

節山桃君墓碑 (碑名片端から損滅)

明治十年丁丑春三月雨森精翁撰文母壽歌等

杉貞庵の第二子 文之助 好谷疏節山 酒井氏を娶て二男一女嗣子現太郎明治八年  
乙亥十一月十八日歿年四十四 墓は桐岳寺神葬墓地

自然石 見たまぐせ樂山の花あうの湖 曲川

自然石 青空のあまり物なり露の玉 友川

芭蕉堂 水邊荒川庵齋の彫刻額面の芭蕉堂七十七翁曲川士

### 一九 龍寶山自性院



木子町眞言宗本尊延命地藏大菩薩

陶樂庵華覺宗心居士 初代倉崎權兵衛墓

元禄七年甲戌二月二十四日

我藩第三代の國主隆元院の時延寶七年長州萩より坂高麗左衛門の門人倉崎權兵衛を聘して樂山焼を改良せしめ此に始めて其名世に顯はるゝに至つた。權兵衛は粗作を世に遺すまじとて茶碗百個も焼きたる中にて僅に會心の作二三を留めて他は皆破壊したと傳へられて居る。天和三年九月島根郡熊野神社に彼が造れる花瓶を奉納す銘に倉崎權兵衛重由とある。其花瓶の寫眞蘇史に載つて居る。彼は延寶七巳未年十月松江に來り當時の勘通狀は現存して居る。御焼物師として召抱へられ銀十枚四人扶持爾來十六年間製陶に従事した。

陶工權兵衛の記念碑は昭和四年五月樂山窯元長岡住右衛門邸宅附近に建設せられ高七尺の自然石に樂山陶祖倉崎權兵衛碑と松平直亮伯か題せられて居る。

機達道英信士 醫師 坪内春利墓

文政六癸未年三月七日

明靜齋白居士 醫師 坪内春伯墓

天保十二辛丑年五月二十一日 (觀霧白庵)

中盛院日新功成居士 醫師 坪内春同墓

明治十年四月十七日行年四十六年十一月 (春谷の子)

貞行院惠迪仙翁居士 醫師 元租高橋尚迪墓

文化十四丁丑年十月廿五日 (高百三十石)

高橋毅齋先生之墓 此外に何等の文字見えず過去帳にも該當するものなし察するに高橋尚迪の墓と見るの外ない。

古瀬家之墓 顯徳自覺居士 醫師 古瀬見坂

大正十三年十二月五日享年七十九歳

古瀬家之墓 仁山勝道居士 醫師 古瀬勝造

大正十四年五月三日享年七十一歳

野々見家代々之墓

覺翁道性信士 元租彫金工 野々見五助

嘉永元戊申年十一月二十一日享年八十八

妙法盛光居士 二代目彫金繪画 野々見松壽齋 (祐之助盛光)



明治三十四年十月四日享年六十七歳

精進良親居士 三代目彫金繪画 野々見龍王齋（正之助良親）

昭和八年七月九日享年六十七歳

自覺良弘居士 彫金 野々見寛三郎（良弘良親弟）

明治四十三年一月三十一日享年二十九歳

大雲高歩居士 繪画 野々見勝四郎（大雲寛三郎弟）

内村龍杏の門人又竹内栖鳳の門弟となり大雲と號した。近衛兵に採られ白露戰役  
從軍中瀧病五ヶ年明治四十二年十二月二十二日享年二十六歳

由良之戸長藏 淡路の力士大西長藏

文化十三年丙午二月三日此地に客死す

源氏師元祖岡本美根太夫門人 岡本美十九丸墓

### 二〇 円鏡山淨心寺

和多見曹洞宗本尊釋迦牟尼如来

藤光院祖榮天遊居士 醫師 天野文庵墓

明治三十七年九月二十八日歿

久保田家代々之墓 八代目 久保田愛之丞

昭和六年四月三日 中溝尾康西師に就て數學を研究し多年島根佐賀両縣中學校師範

學校教諭勤務予は在任中一回も教授を受けたことはなかつた。

洗心菴竹所子牧泉丘信士 吉田中快藤長光墓

辞世 今とせしる彌陀の淨土ともふすのは地水火風の四大なりけり

落合象精靈塔

松雲院鶴翁道壽居士 初名彌七 落合 蓮

大正三年七月十八日行年八十六

御舟屋船手後に御船頭 水泳教授明治の初頃巡查となり勤続七ヶ年明治九年十一月

中 前原一武以下五名就縛の跡格別盡力具後疎麻送方行届きたる為め賞金五圓

とあるが其頃の五圓はたいしたものである。警察署並に小學校水泳教師退職後は漁

業従事

本豊院安翁治心居士 道長男 落合岩太郎

昭和八年十月十六日行年七十二



多年巡査勤績後は水上警察及び縣土工事業に轉勤其長所は警叙と能筆とて又本縣水  
氷水難救界の功績者であつた。

淨照院德皇貞隣大捕 岩太郎妻落合コウ

昭和六年三月五日行年六十八

松本節昌に就て裁縫を研究し三十余年間市内小學校裁縫科教員勤務

故陸軍歩兵中尉從七位勲五等功五級小林勝彌墓 勲忠院殿義範勝彌居士

明治三十八年一月二十八日黒溝臺附近にて戦死享年二十九歳

故陸軍歩兵中尉從七位勲六等 石倉清一墓

大徹院清巖義光居士 大正九年七月五日

故陸軍歩兵少尉正八位 森山古道墓

賢良院勇岳古道居士 大正六年六月二十四日

海軍二等水兵勲八等 大野甚太郎墓

明治三十二年三月二十七日

## 二 明星山本龍寺

和多見町眞宗大谷派本尊阿彌陀如来

松本家代々之墓 說正院釋尊教居士 松本節昌

大正十一年十一月二十九日享年七十二

秋山院釋德水居士 中村徳之助墓

昭和十二年十一月九日歿 本姓米塚 中村泉を継ぎ初等教育界の功績者

故陸軍歩兵伍長 中村武雄墓

昭和十三年五月二日山東省嶧縣姚家莊附近の戦闘にて戦死す行年三十四歳

陸軍二等看護長勲八等 三井熊太郎墓

## 三 市成山西光寺

和多見町眞宗大谷派本尊阿彌陀如来

湖月院釋棟山居士 第十代 堀宗太郎墓

明治四十二年三月三十一日享年五十四

堀良藏長男諱久則鹿嶽山幼より祖父に就て狩野派の繪画を學び後小豆澤碧湖に洋画  
を學んで最も寫生に長ず。明治十七年十一月私立畫學校を茶町に開き方圓舎と稱し



子弟に洋画を教授す。實に松江に於ける洋画の開祖と云ふべし。松江中孝島振師範に教鞭を執られた頃は予の中學生時代であつた。

道祭居士 詩人睡雨 三島佐次右衛門墓

明治四十三年一月十日行年五十九 (松江銀行重役等)

故陸軍砲兵上等兵勲八等功七級 森脇柳太郎墓

明治三十八年一月黒溝臺附近にて戦死す

故陸軍歩兵上等兵 皇谷徳一墓

明治三十八年一月黒溝臺附近にて戦死す

故陸軍一等看護長勲七等 山根倉三郎墓

明治三十八年一月五日盛京省新庄にて歿す

陸軍兵 野波熊市墓

故陸軍歩兵上等兵勲八等 岩橋捨市墓

明治三十八年三月奉天附近にて戦死す

陸軍勲重兵少佐正六位勲四等 佐々木条次郎墓

尚義院釋直明愛山居士 昭和九年九月十八日

故陸軍歩兵上等兵 西村誠墓

昭和十三年五月二日山東京澤縣桃原莊附近に於て戦死享年二十四歳

### 同寺離墓地

関高為輪信士 元祖 雷電為右衛門墓

文政八乙酉耳二月十一日

秀道信士不退 二代目 四聲山加手右衛門墓

天保十五甲辰年三月十日

雷電の生國は信濃國小縣郡越野村字大石。身長六尺五寸横綱谷風提之助の弟子。出雲藩侯の抱力士御給米八石三人扶持。得意の手術が西門であつた。文政八乙酉年二月十一日江戸にて歿す。享年五十九。法名雷聲院釋関高為輪信士。江戸の教王寺に葬る。郷土と松江とに分葬したる由。名跡を継いだ家を関と云ひ二代目加手右衛門は相模頭取御水主となり三代目は為右衛門四代目忠兵衛五代目傳太郎。當市元御舟屋の関傳太郎方には雷電の字形寫の額面。雷電為右衛門略耳譜。雷電の碑文石摺幅物二(郷里に於ける雷電之碑は佐久間象山撰)刀劔二振(銘安國直格)拜領品等



現存して居る。

### 三三 光明山善導寺

和多見町浄土宗本尊阿彌陀如来

月桂院殿真譽宗忠委身居士

有澤家元祖松平直政に仕へて松江に来る。

有澤織部入道委身藤原直玄

延寶二年甲寅五月三日

善生院殿柔譽源清輦流居士

五代目松平治郷不昧公の頃茶道

有澤能登藤原一通

安永五年丙申五月廿七日

以上西人の法名列記、水溜に水扱きの栓孔が出来てゐるのは珍らしい。

興宅院勇譽行清居士 柔道槍術 兩森次右衛門行清墓

碑銘入 園山齡謹撰 孝子定清建石

天保八年丁酉三月三日享年九十五

父清敷母水代氏武術文學に通じ直心流柔術の祖寺田勘右衛門より六代目の師範役で

ある。其武技は各殺に精通し就中直信流の柔術と一指流の槍術と新當流の劍術とに巧みであつた。寛政十年三月師範役となり毎年銀七枚を下賜され御勘定奉行を兼務し柔術は加藤氣堂と協議して適宜に子弟を教へよとの命を受けた。五年後の享和二年師範役御免改めて軍用方奉行となる。長壽九十五歳

靈功院徳譽良真居士 中村力之助源正義墓

明治三十六年四月一日歿

八幡一刀流の元祖崎山五郎兵衛の高弟。江戸定府。松江藩に聘せられて撃劍教授其

後松江警察署勤務門弟建石。

故陸軍歩兵一等卒 高橋正重墓

明治三十三年十月三日

故海軍三等主厨 原垣兵一郎墓

軍艦高砂乗組明治三十七年十二月十三日旅順口封鎖中戦死

故陸軍歩兵一等卒勲八等功七級 佐藤三郎墓

明治三十八年一月二十八日黒溝藩附近の戦闘に重傷を蒙り同月三十一日逝去享年二

十三歳



故海軍兵曹長勲七等功六級 乃水榮墓

昭和十二年十二月廿三日支那揚子江に於て歿死す行年二十九歳

### 二四 龜瀧山妙興寺

寺町本門京本尊十界勸請曼荼羅外四

永田穂積先生碑 門弟建之

高橋家歴代之墓 玄妙院春流居士 高橋利亭

明治十九年一月二十七日歿 利亭は副醫百二十石高橋貞元の子、醫師、大澤南校助教であつた。此人の高弟高橋連郎は新聞記者曾ては大澤南校勤務

入戸野家之墓

本正院青英日仁居士 醫師入戸野虎吉

大正十二年一月十二日享年七十三

貞正院妙英日義大姉 妻 入戸野スエ

昭和三年五月十二日享年六十三

愛知縣人入戸野虎吉は東京醫科大學別科卒業、島根縣醫學校教諭兼府屬醫院の醫員

勤務 罷めて後市内にて開業し相謀つて為春館を設け之が幹部となりて活動し又市内各中等學校及び小學校の校醫たる事多年 妻スエは志立傳八郎の第三女、志立富松の姉である。

富山家歴代之墓 富山院法康日將居士

正六位勲四等功四級陸軍歩兵少佐 富山康之助墓

昭和九年十月二十八日享年六十四

明治二十七年陸軍士官學校卒業後少尉に任せられ果進して少佐に至る。其間日清北清日露の戦役に従軍して功勲を樹つ。明治三十八年三月廣島聯隊區司令官を最後として翌年退役、歸郷後は松江市會議長に推されたのは全く徳望の然らしむる所。多能多藝の人にて寫真術謠曲は別して堪能であつた。

清光院法水日龍居士 醫師 清水龍太郎墓

昭和十三年二月五日行年六十八歳

醫師清水恭藏の長男明治十六年三月父急死後大いに奮闘して未だ丁年に達せざる内に醫術開業試験に及第したるか如き其秀才知るべきである。殿町小學校時代は予と同期



慈光院元壽日妙居士 醫師 清水元壽墓

昭和十三年十一月二日尾道にて病歿

清水龍太郎弟 醫學士 清水分家の祖

妙法安立院妙行日榮大師 武藤工不墓

明治三十四年一月廿二日享年三十七歳

初め内村友輔方に在つて養嗣子邦藏に嫁する苦の所離縁となる。小學校教員となりて母衣尋常小學校に勤務すること多年、不幸にして早く病歿した予の義姉に當るか操行堅固、性格頗る快活、交際円滑しつかりした婦人であつた墓前石の花立には高橋スズ石田タケ中村ツネ神田ヤス佐々水ムツ水溜には石川マヤの名が見えて居る

故陸軍歩兵伍長 須山正典墓

昭和十三年四月廿日台兒莊附近紅瓦屋火突撃の際壯烈なる歿死を遂ぐ行年二十四歳

### 同寺離墓地

妙法中道院拳齋日理居士 拳齋永田穂積墓

明治三十二年十一月十六日歿年六十八

故文忠居士其儘亭有樂山人

墓側に松原氏

同 妻多美子

献燈門弟中

谷文晁の門人文忠、松江藩に仕ふ壯年名を千鶴堂一桂と號し又和歌を學び素鶴居の別号がある致仕後も松平齊齋（ヨシノブ）の同命を（ヨシノブ）つとめ廣應元年歿享年不詳

檀大僧都信海阿彌梨耶 田阪氏之墓

故陸軍歩兵二等卒 杉原善太郎墓

明治二十八年二月二日安東疎軌地定在病院にて死亡す

故陸軍歩兵 兒玉千之助墓

明治三十三年八月十四日北京東直門に於て歿死す

故陸軍砲兵一等卒 藤岡常次郎墓

明治三十三年九月十日清國通州にて入寂す

故陸軍歩兵上等兵勲七等 谷口元市郎墓

明治三十七年七月二十五年大平嶺にて歿死

故陸軍輜重輪卒 岡田嘉市墓

明治三十七年八月十五日亡



故野戰砲兵

大龍友次郎墓

明治三十八年八月二十二日周防灘金城丸にて戦死す

### 二五 啓運山慈雲寺

寺町日蓮宗本尊十界勸請曼荼羅外釋迦牟尼多寶如來

慈眼院殿日雄居士 前堀尾山城守殿七家老

寛永九壬申六月九日 牧 志摩正墓(高二十石)

大日本史料堀尾吉晴の部傳固齋叢談の概要に牧志摩正は元僧侶にて行齋(上牧法花寺の住持)と稱し遺俗を命せられて堀尾吉晴に仕へ頗る智謀才略に富む吉晴の本妻嫉妬心深き婦人なりしか吉晴の側妾某娘める時本妻を憚つて此女を牧志摩に下嫁せしめ若し男ならば予之を養育するも女ならば汝之を養育せよと本妻此件を耳にし其婦人を殺さんと圖り先づ人を遣り自らも駕籠にて同行牧方に赴て巖談に及んば折節志摩正結髪中なりしか髪を振り乱して立ち出て面談に及はんとしたか其風采一見夜叉の如く幽霊其儘なるを大いに恐怖し何れも同章の体にて辞去せりと其奇習此の如し。

此墓石頭首其所を異にし半は地中に埋没せるを今より數十年前住職之を組立て、今日之地に安置し供養を怠らざるは殊勝なり。

真善院殿妙有日寶大姉

延寶三巳卯年六月二十五日

信受院殿妙要日持大姉

寛政元己酉年八月二十四日

此兩人の法名列記、水溜に水抜き之栓孔があるのは有澤家の分に限て居る、兩婦人は柳多家より有澤家に嫁したるものなるか死後實家日蓮宗の菩提所に葬る事を豫約したものと斷る例は珍しからぬ。

淳厚院忠顯日寶大姉 松平家老女龜田墓

名は龜田多年藩侯夫人の殿中老女を勤め其功に由て新に一家名を建てたる事を許され龜田氏といふ。老女龜田は旧津山藩大久保の出明治十二年十二月二十日壽八十、原益衛之が嗣と爲り後に名を民治と改む。 孝子 龜田民治謹誌。

妙法法眼塔 善根主 原千之助

關東地方大震災災禍死者一周忌際記念塔立之 大正十三子年九月立之(裏面文字不



明)

柳多元碑 報國丹誠曾未休半生涓滴奈難酬何榮斯道齊台覽一劍恩光照萬秋

庚戌十月三日 柳多元恭誌

柳多元次郎宮城縣甲田一二の次男柳多家へ入夫、擊劍を以て鳴り又書を能くす。

昭和八年十二月二十日歿享年七十歳

さけは散るものと思へと櫻花なほをしまるゝ春のくれかた 柳多律子

昭和二年六月十六日歿行年五十九

故陸軍歩兵少尉正八位勲六等功五級

大義院正道日守居士 松浦正之助墓

明治三十八年一月二十七日盛京省斜哨附近にて戦死享年三十歳

故陸軍歩兵一等卒 金織藤二郎墓

明治三十八年三月一日盛京省李家窩棚附近にて戦死す

故海軍三等兵曹 三代好太郎墓

明治三十八年九月十一日

### 二六 圖久山長満寺

圖久山の三字額は若槻克堂書 寺町日蓮宗本尊七字首題外九

摩徳院山心日祐居士 弓術師 子松時達墓

天明三癸卯年九月二十八日

山心子松先生之行狀（碑石上部缺損所々摩滅）

時達幼名租八郎長稱源八覽入道蓮芬日置流弓術師役 行狀中の偉行奇跡左の如し

前略 父桐菴以備醫兼行千束郡有二子長曰桐與次郎君也桐與經父業君幼不事筆研十

五志射二十登射堂一日發四千餘箭咽洞一千四百許享祿五年善隆公親臨試諸君譽稱

旨即日給五口米兄桐與嘗因忿手及光娘親賊賊以狂告獨君以為非狂理故嘗然固執不可

以其道大進矣事聞命有罪復舊捧君告司馬曰今之所謂指矢者起天正季年輕弓魚箭使務

去之遠欲發之多更遊戯耳非貫堅中微之技也獨鐵矢中武射之用此謂真技也請廢指矢司

馬因循不報君歎曰我幼學日置氏之道死生必於良豈可默而已乎乃著書數篇辨射學之正

為每一篇成輒密進呈之公嘉納之終廢指矢復日置氏之舊君雖老敢練不倦數有賞賜祿至



八十石以由武而起復氏于子松性純朴尤重節義常謂詐生於己已不詐則孰敢欺子故遇婢僕必以至誠買魚菜無逆其詐久之人漸知之不復飾履初在郡邑日就廣夫買蔬菜農夫曰君今獨居須菜其幾請君自採之價不足言爾後君親採之輒懸錢而去農夫見園中有錢皆知于松處士之所為嘗值無幾君以二口米待缺者身食草根亦實至有菜色其在矣田村貧民某女憐君輒判每為補被澣濯君深德女之心許娶之及嫁足食妻子便備肩輿親迎之父兄錯愕君具說顯承遂載歸請妻之終身不厭其醜陋全循老之道生一男一女男名時乘為君後女嫁杉本某姓其兼者則還於衆學亦村厚志君之教射也不阿貴族不私子弟始為教師歲抄贈謝儀君却之或曰諸敎師皆受君獨不後何君默然良久曰請惠油摺扇一柄其意欲有受贖之名而無貪財之實也其偉行奇跡甚多然亦嘗自稱有人問者咲而不答年及踰八旬自力漸衰將射則門人自旁告昂匣更發莫不中彼發不中乃投弓曰我老矣生無益於國終不食而致時天明三年癸卯秋九月二十八日年八十有五葬于白濁長崎寺高尺者水村厚忠小泉淡英田村光武米田涂故山岡泰福中村公豊松田勝副與君令嗣謀每月二十八日輪為追福之會于今十有五年相謂曰我師技真行高如吳豈可使湮滅不聞乎於是以葬地追使別建一片石于寺門內以勸其行略敘慕君風者世明為文光武子令終書寫

應山亭小村成章先生之碑

秋鹿屋小村儀右衛門の事、應山、月耕等の號、頼璋の弟子、四條派、布志名陶器の繪画に従事、明治三十八年二月十七日午前二時頃和多見火事の火元焼死享年七十四、碑は明治三十一年有志者建之（生前）

光心院賢道日輝居士 西田千太郎墓

明治三十年三月十五日享年三十六歳

雜賀町西田平兵衛の長男、文久二年九月十八日生、明治十四年松江中學校敎諭補助月給六圓より最後は委任待遇敎諭年俸七百二十圓に至る、明治十八年八月より一年間上京遊學外人に就て英語、邦人に就て心理學論、經濟學研究の外は全く獨學であつた、頭腦極めて明晰にして記憶力旺盛その秀才驚くべきである、文檢應試兩度に心理學、經濟敎育英語の諸科合格、中師敎員免許狀受領、兵庫縣姫路中學校、香川縣松立濟々學館敎長、島根縣尋常中學校敎頭、一時松江中學校々長心得勤務、明治二十三年九月ヘルン松江中學校の英語敎師として來任し熊本五高に轉任する迄一年有餘の間日夜ヘルンに親炙して其研究を助けヘルンも亦大いに其學徳を慕ひ比類なき恩人として文際せられたるの松江中學校時代の恩師である、

林 林次郎君之碑 明治二十五年八月日友建之



明治二十四年八月十四日歿於東京行年二十九

松竹野法魁日文居士 松本文之丞墓

明治二十九年三月十六日行年四十一歳

漢學を内村友輔に就て讀書作文に通じ數學を尾原總八に就て天元術内理術を會得す。二十餘才にして中學校教員に採用せられ漢學數學を担任す。間もなく代言人の試験に及第して代言人となるや性廉潔にして猥りに報酬を受けず好んで孟子を研究せられた故常に議論の構成を孟子に依られたと。竹野は詩作の雅

林家代々之墓 故平田町高等小學校校長林王之助

明治三十四年六月九日歿 墓前同校生徒献燈

母衣町林好禮の次男にて林次郎の弟。松江中學校卒業引續き師範學校卒業後訓導校長として廣瀬并環國富の校長を経て最後に平田町高等小學校校長在職中病歿せられた予か同校勤務中特別愛顧を受けた恩人

故海軍二等機関兵曹勲八等 山田熊市墓

明治四十一年四月三十日軍艦松島遠洋航海歸途澎湖島馬公港にて殉死す

故陸軍歩兵伍長勲七等功七級 太田友榮墓

巡查部長 昭和十二年九月六日河北省靜海縣郝庄附近に於て戦死す

## 二七 本妙山又成寺

寺町日蓮宗本尊七字首題外十

元祖見龍院普明日法居士 村上喜一即舍喜墓

安永六年丁酉十一月十二日謝世五十七才

喜一即は隱波國海士の名門村上助九郎の三男幼少より學を好み又武技を修め長するに及び頻りに登龍門の志を抱き親より得た資金を賑にして松江に出たのか二十歳前後であつた。其頃村竹といふ苗字を名乗り無職の平民として暮して居たか多藝の男として團茶点茶花彈琴等の諸技何れも名品に入らぬ者はない程にて居る事二三年松江の名門に出入し大いに其才を愛せられ、殊に執政家老小田切機中に深く信用され遂に用人格の食客となり種々其才能をあらはした。就中算勘及び貨殖の事は實に常人の企圖する所でなかつた。喜一郎の算術は十懸盤せちばんを使用する事なく天稟の算才に優れ如何に煩雜なる數字も一切胸算用にてやつてのけ厘毫も誤ることなきため御勘定方の算術家も之には舌を捲いて居つた。寛延寶曆昭和の頃に掛け藩中寄代の才



物として現はれ落の諸役人となり重に歳入調達の衝に當り能く國用を調へて藩の經費を立てた大器量人であつた（泉府方設置、松江大橋改造、財政整理、朝酌村圓流寺火災東照公廟再建、比叡山山門修復、天倫寺建立、清水寺修復、江戸城西ノ御丸修復手傳、松江大橋の改築等費用の調達）斯る偉功を立てたにも拘はらず食祿僅に百石であつた。

智龍院英明日聰大師 村上舎喜妻墓

文政八乙酉年八月二十七日壽九十才

碑文入 杆葉の産廣瀬信睦の娘名は曾那、容顏美麗、性温和、神佛信仰歌道に巧みであつた、廣瀬信睦之孫春尚識

自製短冊二葉（辞世）

あらたのし今さうき世の雲はれて西のみくくの月を見るかな 智龍

世は蝶の夢とちりつゝ衣手の露

泉女

建田家之墓 門弟醫師献燈 醫師 建田快庵

平瀧院永守日戴居士 梅垣豊三郎矩立墓

（石碑の一角破損）□□□□諱矩立通稱主馬世以馬醫事紀落住于東□□□□幼盡

心於馬醫數有奇効事詳于家譜兼遠大□□調息馬術稱天下無雙又自造鞍及鎧兼妙于識監□□在杖也手撫而知誰氏之巧毫不違焉先生為人温恭篤至雖家人弟子待之如賓殊焉欲論弟子有過則諄々風諭不敢督責其自喻聞者莫不悅服矣先生至老研精于馬術未嘗怠試焉於遠者前後無數一日馳詣下野日光山而歸來往凡七百二十里此爲遠程之最云嗚呼先生之術可謂神矣享和元年先生年八十五致仕改號道得運載其骸結併封書及和歌速寄吾藩石田貞利以寓永訣之意明年秋八月十八日先生卒貞利者先生高足弟子也其在東都事先生猶父先生亦視猶子盡傳其術之秘蘊及貞利之歸國也先生思而不置常語人曰我死則魂必歸于堂而已矣蓋以先生之道西也貞利亦追慕不休乃與二三同志謀葬所寄骸於白濁又成寺祭祀以時嘗時貞利已有建碑之志有故不果今也貞利亦歿今茲 官新命其子貞經爲調息馬術教師大開教場給賜馬及蜀菽貞經感銘之至紹述父志建碑以服德且告道之興隆實先生之神饗之銘云調息之道一□自然鞍上鞍下爲帝之先

天保十一年庚子秋八月

石田貞經建石 園山齡謹撰書

平等院主量日愈居士 岸伴平墓

先祖代々

（岸清一兩親）

法流院妙源日清大師

・ 岸平墓



岸清一博士英靈分骨合祀

清高院殿一乘日深大居士 岸 清一

昭和八年十月二十九日歿享年六十七

岸博士英靈分骨墓側之石柱を建立し左右の大燈籠二基には岸博士門下生父兄一同

駕照庵義翁日立居士 吉川屋新藏墓

實家は筆屋源吉の第二子天神町寺小屋師匠門人二千餘人。慶應二年丙寅四月十八日  
壽七十三歳

本法院宗勘日教居士 松井勘太郎墓

明治四十年八月二十八日歿嗣子松井彦、松江市有志者八束郎有志者建之

故陸軍歩兵上等兵 笹岡乙之助墓

明治三十四年八月二十六日

故陸軍歩兵伍長勲八等功七級 海士金一墓

昭和八年四月十日熱河省取領口に於て歿死

故陸軍騎重兵一等兵 高角幸造墓

昭和十二年九月二十日河北省天津第一兵站病院にて死す享年二十五歳

### 二八 望湖山龍覺寺

寺町曹洞宗本尊華嚴禪迦牟尼如来

鎌倉内村先生之墓

明治三十四年五月二十二日終享年八十一

中興松洲菴機應宗鑑居士 松浦六右衛門墓 (辨護士)

明治三十四年十二月十四日

勝軍水庵真相光英居士 元祖 勝軍水庵宗一墓

明治四年辛未四月十一日

松江灘町に蔣繪師宗一なるものあり、傳によれば治郷其技を磨かしめんか爲に江戸  
蔣繪師王川某に就きて學はしむ、業成りて松江に歸りしか治郷は其祖直政が後水尾  
院より賜はりし萬の細道蔣繪の文臺硯箱の模造を宗一に命す彼苦心修繕三年を經て  
成り精巧真に迫る依つて之を賞し賜ふに勝軍水庵の號を以てす、爾來勝軍水庵光英  
と稱す、其他膳椀茶箱裏杓合の類落主の好に應じて名作を残せしか特に金粉溜塗の  
秋草又は山水蔣繪を作るに長す、現存する央道湖及杵築の風光を主題とせし蔣繪物



現存す、何れも傑作として世人の愛賞描かざるものなり。泉一の子を英と稱し二代  
勝軍水巻といひ其子某今京都に在せりといふ。(録史)

碧霞池而居士 相見松而墓

碑文入、諱敏修字允叔號松而印刻に長す云々

明治二十四年五月九日享年四十八 明治二十四年六月友人中村準撰并書

松月庵愚翁直居士 山崎克三墓

明治三十五年八月三十日享年六十餘

雜賀町野澤彌七の弟、御茶役、山崎家相續、不倦庵藤井長古の門人、多年平田町役  
場書記勤續中、側らに茶道教授に従事せり。其頃予は平田町高等小學校勤務中、彌々  
此人と同席し時に雪州茶道の指導を受け明治二十五年七月三十一日不昧君御相傳の  
茶事唐物建の傳を受けた。有志門人等の建立した山崎克三翁碑は平田町大林寺に現  
存して居る。

清徳院幽峰香谷居士 森本兼之丞墓

昭和十二年十二月九日行年七十一才

國画教師として濱田、長野、松江の各中等學校に在勤し奏任教諭に進み香谷の画名

世に知らる

傳説 松江大橋人柱南無願地獄願王大菩薩

故陸軍歩兵 秋山傳八郎墓

明治三十三年八月十四日戦死

故海軍一等水兵勲八等 秋山兵四郎墓

明治四十一年十二月二十七日

故陸軍歩兵二等卒 山代忠之助墓

明治三十三年八月十四日北京にて戦死す

故陸軍歩兵一等卒 長野市郎墓

明治三十三年十月九日病死す行年二十二年三月

故陸軍歩兵上等兵 福島傳四郎墓

明治三十八年三月九日奉天府に於て戦死す

故陸軍歩兵軍曹勲七等功七級 平山楯三郎墓

明治三十八年三月九日奉天に於て戦死す行年二十六

真徳院忠農義孝居士故陸軍歩兵少尉勲六等功六級 石田頼之墓

昭和十三年二月十八日行年四十四歳



支那山東省鄒縣西下店の戦闘に於て戦死す。  
故陸軍歩兵伍長 藤岡竹次郎墓

昭和十三年十一月二十九日信陽に於て戦死行年三十歳

### 二九 華溪山常榮寺

寺町曹洞宗本尊藥師如来

文明院學法通而居士 市左衛門兄 田中北山墓

寛政十年戊午九月二十一日歿享年三十

碑文入なるも僅に讀得たるは左の文字

諱維幹字文規俊輔號北山我雪落世臣光輔字子瑪之長子十餘歲師事于白鹿桃先生學業

夙俊髦善詩文年三十歳葬、、、君長千余四歳才德亦所仰自幼交情莫、、、嗚呼

哀哉、、、以下不明 友人 齋藤重甫撰

松應院義岳良梅居士 田中市左衛門墓

弘化四年丁未九月十七日

八代目市左衛門字雄貞繪画をよくし瓶山と號す。享和二年大疊組文化五年御次番次

いて隠岐御代官同十二年月英院附御賄役となる。知行代々百石弘化二年隠居を許さ  
れて松窓と號した。享年不明なるも六十七歳瓶山寫の鶴の双幅より推算せば粗々七  
十歳前後ならんか。文政十一年二月小田原侯大久保加賀守より當藩へ懇囑の雲州五  
ヶ所の繪画と知名詩人の贊辭とは協議の結果田中瓶山及び道光上人(釋曰諱)の兩  
人に命せられた。繪画は絹本一枚の大き六寸に八寸

### 松江

松江城關拂雲擊山色水容圓郭清行過長橋回首望風帆沙鳥展吟情

### 大社

松杉翠擁日隅宮三井五橋華表中風雅初發八雲詠治安深感七名切

### 御崎

水繞山圍日御崎百枝松下有宮祠拜去爽燈停枝立海天雲斂望愈奇

### 船通山

素尊乘艇發三韓直列鯨源鳥山巖不啻新蛇扶稻嶺芟除百醜萬民全

### 神龜波



九曲清流山麓鬱懸瓊來拜乘龜佛岐中奇勝俄難換投筆愧吾吟口吃  
撰起庵校山宗興居士 藤井長古墓

嘉永七年甲寅七月晦日享年七十歲

天明五巳八月十一日主北堀町大工万之丞次男幼名新次郎。御茶儀藤井起故家相續。享和元酉年御給米四石二人半扶持御坊主並、文化元甲子年二月十七日御測坊主同號七年五月御目代役となり文化十年正月十六日不昧より御直に茶道御皆傳下され茶名を撰起庵と賜ふ。之か藤井長古亦後である。子新次郎八歳にて夭折し娘りくに贅養子したのか二代目長古である。門人には爲石九方、山田勘悦、藤坂松保、安食善知、虎屋重兵衛、森脇忠兵衛、野波屋庫三郎、山崎克三等

不徳庵敏外別傳居士 藤井宗古墓

船越愛藏弟幼名熊市、藤井長古養嗣子となり天保三年りくと婚姻す。茶道方並、茶道指南給米十八石四人扶持茶名不徳庵制製して宗古。明治十一年八月二十八日歿。

仁徳院碧巖慈雲居士 醫學博士 前田作墓

昭和六年三月十八日行年三十九歲

抱素庵梅主居士 俳人 山内佐助墓

大正六年十一月二十六日

十牛庵好一居士 釣年庵第二世 山内好一墓

昭和十一年六月二十三日

故陸軍騎兵一等卒勲八等 虎谷慶四郎墓

明治三十八年九月五日病死享年二十三

悼虎谷騎馬

欲以丹心答聖明從征殊域豈期生黃砂揮淚傳軍令黑夜衝敵情鵠兩瘡埋人忽逝惡風落日淚空頌欽君一死留餘烈不朽千年勇士名 雙岳 井川精一併書

故陸軍歩兵上等兵勲八等功七級 熊野万藏墓

昭和九年三月十九日吉林省九里三に於て戦死行年二十二

故陸軍歩兵一等兵 伊藤忠三墓

昭和十二年九月十五日河北省南趙扶鎮に於て戦死す

故陸軍歩兵伍長 勝部勸墓

昭和十三年四月七日山東省台兒莊東北方約三里楊樓附近の戦闘に於て戦死す行年二十三歳



故陸軍歩兵勲 等功 級 川谷正二郎墓

昭和十三年七月十四日河南省柘城縣陳集附近に於て戦死す行年二十六歳  
故陸軍騎重兵上等兵 中村辰夫墓

昭和十三年十月十五日河南省商城に於て戦死す

### 三〇 祝盛山宗泉寺

寺町曹洞宗本尊十一面觀音

至誠院壽山道悅居士 洞醫 全津春逸秀軌墓

安政五年七月十三日

靈光院總三良庵居士 中野左右藏墓

明治二十三年三月二十七日

北陰庵南涯碑 中野左右藏の事にて南西の繪師・南涯と號す

真源院前檢校實岩鉄相居士 富村檢校墓

明和七庚寅年三月十日(藩侯療治と習字の師)

鶴翁壽親居士 全具彫工 村田兵太郎壽親墓

明治二十八年三月八日行年六十七歳 全工場津唯市親次の實父

精進院鏡心妙覺大姉 松村工イ墓

昭和五年二月二十一日

松江藩醫士松村寛裕の次女理學博士北尾次郎の妹、師範學校女子部卒業多年小學校  
訓導勤務、教師松村豊吉の配偶者曾て宇都宮高等女學校教員たる事もあつた

政源義方居士 正七位陸軍少尉 喜多川政方墓

明治十年三月七日田原坂に於て戦死す

故陸軍歩兵一等卒勲八等功七級 阪田福次郎墓

明治三十七年七月三十一日 柞水城にて戦死

故陸軍歩兵伍長功七級 勝代徳次郎墓

大正二年六月三十日

故陸軍歩兵伍長 林 正三墓

昭和十二年八月八日支那事變に出動し昭和十三年五月二日山東省朮家莊附近の戦闘  
に於て壯烈なる戦死を遂ぐ

故陸軍歩兵伍長 佐藤誠造墓



昭和十三年三月二十二日

故陸軍歩兵軍曹勲七等功六級 古浦繁悦墓

昭和十二年九月十二日河北省馬廠西方四里大城縣北趙攻擊中戰死享年二十四歲

故陸軍歩兵上等兵 福井文吉墓

昭和十三年八月十五日河北省順德縣楊各莊鎮の戦闘に於て戦死

故陸軍歩兵上等兵 古川清造墓

昭和十三年九月六日安徽省六安縣城に於て陣歿享年二十四歲

### 三一 光榮山 恩敬寺

寺町真宗大谷派本尊阿彌陀如來

永文院殿釋頓敷居士 早田公錫墓

碑文入り石も事蹟不明 諱公錫初給稱太郎八、考諱公雄君長子也寛政九年襲父邑百石

後稱集太云々 桃世文撰并書 孝子早苗公税建

今村維顯墓 第四世通稱美濃退隱號此面（中老千石）

列記 延享四年丁卯十月二十二日歿

今村秀雅墓 第十一世通稱節夫

明治三十五年壬寅六月廿二日歿行年五十三歲

英秀院釋繞石 文學士英文學者俳人 大谷正信墓

昭和八年十一月十七日享年五十九

### 三二 式向山 永泉寺

寺町真宗大谷派本尊阿彌陀如來

肇祥院釋天麟法師之墓 永泉寺二十二世名僧

明治二十四年十二月廿六日歿八十五歲

樹徳庵釋文友不退 故文友舍主 高橋茂藏墓

大正二年十二月二十九日

故陸軍一等卒 野白嘉次郎墓

碑文入高橋茂藏撰 明治二十九年八月三日年二十三

### 同寺 離墓地



故陸軍歩兵一等卒勲八等 全津登太郎墓

明治三十七年八月三十一日遼陽附近に於て戦死 行年二十七歳

### 三三 白雲山龍昌寺

寺町曹洞宗本尊釋迦牟尼如来

松月堂古流生花贈諸國准總會頭宮内九兵衛事故暗湖樓無存之碑

明治三十四年春門弟建 正四位子爵植松雅平誌

大悲院蒙岳妙法居士 侍醫 長岡謙文墓

碑文入行るも不明 諱宜字大外院謙文侍醫祿邑八十石寶曆十一年辛巳四月二十三日

出生弘化三年丙午六月十五日壽を以て終る享年八十六 孝子謙立建之孝孫謙民謹書

義標院好敬全敬居士 數學者 安食好敬墓

明治十七年申四月四日行年三十餘 予か師範學校附屬小學校時代の算術の教師であつた。

石谷島七之墓 市内屈指の石工

明治四十四年六月二十一日

荒川重之輔龜齋依石地藏尊 (小泉八雲絶讃)

秋輪童女墓 は長岡屋九右衛門の童女にこ明治二十二年八月二十五日早逝地藏尊は昭和二年十二月木白湯大火の節頭首顛落し其後修理を加へたが余程其形態を損傷したのは何れい事である。九右衛門と龜齋とは別懸の間柄であつたと。

陸軍憲兵勲八等 福田新太郎墓

明治三十一年十月十八日

故陸軍歩兵伍長勲七等功七級 原 梅之助墓

明治三十八年三月一日奉天にて戦死す。

故陸軍砲兵一等卒勲八等功七級 奥野泰一郎墓

故陸軍歩兵伍長勲八等功七級 秋鹿才一墓

昭和十二年九月十五日河北省中趙扶鎮の激戦に於て戦死を遂ぐ享年二十四歳

故陸軍歩兵伍長 山根永吉墓

昭和十三年三月二十四日於支那國山東省台兒莊戦死

故陸軍歩兵伍長 森井要四郎墓

昭和十三年三月二十五日山東省台兒莊前城附近に於て戦死す享年二十七歳



故輜重兵上等兵 田村豊盛

昭和十三年八月三十一日支那事変於廣州戦々死

### 三四 機雲山全龍寺

寺町曹洞宗本尊釋迦牟尼如来

釣年庵曲川居士 蕉門七世 山内曲川墓

明治三十六年五月十九日逝享年八十七歳

山内長右衛門長男文化十四年二月二日出生幼名嘉一郎、十三歳の時両親に死別しこれより母方の姓を名乗り野津嘉一郎といふ。骨董商を營み傍ら茶事を學び後年三齋流宗匠となる素を作った。又茶寮時に古陶器の鑑定に精通した雅名は沙患、茶患、鼎室、月之、名古屋滞在中に「運動不濁曲川水」の古語よりして月之坊曲川と改め又「茶釣千年壽」の句から取つて釣年庵と稱した。弘化四年の辰三十一歳の時愈々脱俗の意を決し飄然松江を出て芭蕉派の真髓を會得せんため雪水と爲り先づ高野山に登りそれより京に入りて蒼虬の門に師事せんとしたか果さず其勧めによつてその高弟萬籟を師と仰ぎ其さに苦學を嘗む。それより諸國を行脚して遂に安房國清澄山

に上つて剃髮した。江戸に在る事七年草庵を結んで風交を事とし俳人月之の名聲を博したるも嘉永五年の秋奥州行脚を思立ち六年間各地の俳人と交つて其技を磨く。安政五年奥州行脚を終り出國後十二年目始めて國に歸つた。時に四十二歳爾來三十餘年の間年々各地に來往し本家山内佐助方に寓居して風流三昧俳句に抹茶に書に画に一生を悠遊し遠近よりの風文信書絶ゆる事もなく釣年庵曲川翁は地方俳壇の宗匠として仰かれ許多門人を養成し八十七歳の長壽を保つて逝去した。曲川翁の俳句中その二三

身は風にまかせてむかふ枯野かな

雪小んで雪なき峰やほととぎす

米あれはお正月なり降り降れよ雪

大耳や庵なればこそ臂枕

松島も見しか故郷の湖涼し

故郷や妻はなけれと更衣

うぐひすや八十八のまくらもと

自然石 全龍寺に建立し左の句を自書し松一本を植之



何ひとつ見え多と露の明りかた

曲川

松月堂古流生花日本總監職

故月軒露芳先生碑 米田萬四郎事

昭和二年丁卯十一月門弟中建之

高昌院大道隆秀居士 正六位勲六等法學士 山崎銀之助墓

明治三十九年一月十五日

原 一忠之墓 學校習字科教師兼書記能書

明治四十一年十月九日享年六十九

孝順院心操智清大姉 一忠長女 原 セイ墓

墓誌入 明治二十八年十月五日病歿行年二十歳セヶ月 (師範學校長) 齋藤熊太郎紀之

一步義勇居士 大木米一墓

明治三十三年十月十四日清國北京城にて瀆焉

故陸軍歩兵伍長 有田傳市墓

昭和十三年九月二十一日

故陸軍騎重兵上等兵 小原 求墓

昭和十三年六月十八日應召七月四日出征從軍中十月二十七日北支阜平縣王汝鎮戰鬥に於て戰傷翌二十八日歿死行年三十二歳

### 三五 松榮山東林寺

寺町浄土京本尊阿彌陀如來

禪岸院光譽金麟居士 五代目 矢島半兵衛金麟墓

文化七庚午年正月二十九日歿享年八十六歳

矢島半兵衛天明五年初めて馬術指南を命せられ寛政五年九月二十五日津田馬場にて不昧公觀覽の節賞賜を受く。同六年正月七日城内柳花畑馬場にて衆馬を公覽に供した時公より種々御下問を受け仍て信州松本城主松平再波守の臣坂井勝助の馬術傳來の巻物を悉く献上し更に公にも傳授し公より御召給を賜つた。寛政十一年七月二十一日水戸中將彼が馬術の精妙なるを聞かれ觀覽を望まれたに由り公は藩殿の駿馬壺井有明を彼に貸與し且つ紋付帷子を賜ひ水戸公の面前にて衆馬の節着用すべき旨を命せらる。文化庚午年正月二十九日出雲に歿す。(矢島家列士録)

松平不昧傳に曰く「不昧公の臣下に補代の名人馬術の師役矢島金麟といふ者顯はれ



たり彼は江戸慶名山の石階を馬にて昇降せりといふ程の名入にて當時江都に名聲噴  
々たり遂に大將軍の聽く所となり城内に召され上覽の節無頼の荒馬に乗るべく命せ  
られた金鱗先づ靜に馬の真向に立ち兩の轡を取りて馬面を熟視し既にして徐々と來  
り出したるに馬は直に前足を折りて金鱗を振り落すと同時に聲を發して嘯みかゝら  
んとするを金鱗少しも騒かす拳を固めて馬面を撃ち直に來り出し手綱を緊束しつゝ  
來り廻したれば流石の悍馬も流汗珠を成し疲勞困憊するに至つたと大將軍を咎めと  
し府觀の諸侯應に堪へ暫くは賞讃の聲を断たす褒賞として將軍家より虎の皮二枚下  
賜せらる彼公の請により此虎皮を公に奉る

三齋流中興の祖荒井一掌（不昧公三齋流の師）の楚町の居宅附近に出火ありし時不  
昧公の命を受けて門人矢島金鱗は公の愛馬雪井に打跨り一目散に馳せつけて一掌の  
安否を伺ふに彼は從容として名残の一服を喫せんと茶室の掃除を爲し靜に炭を爲し  
諸具を飾り煎茶して金鱗に喫へ自らも服した時に猛火既に天井に燃え移るを以て金  
鱗頻に立退を促す一掌乃ち今は心置きなして師無事庵より譲られた百如釜一つを  
携へて金鱗と共に退出した此時金鱗初めて一掌居士の腕力に感し己か職とする馬術  
の語に鞍上無入鞍下無馬とあるの秘意を悟り益々茶事を勵み遂に一掌より萱天目の

傳授を受くるに至つたと金鱗は公の命名で金鱗は水魚の意、人間は水魚の如く頭  
を叩かれて切磋琢磨せなければ偉人となることは出来ぬといふことを諷示したも  
か。

壽山院高譽景秋居士 數學者 矢嶋景秋墓

昭和十三年一月二十九日行年八十六歳

算術に長じ小學校教員役に郡書記となりて各地に勤務し晩年に及ぶも猶ほ土木測量  
の業に従事された。南田町に居住せられた頃予は一年務代敷の指導を受けたことか  
ある。

㊦ 先祖累代墓 大正十四年十一月合葬

安了院道譽一遊居士 四代目 石田五兵衛貞順

文化十二乙亥年十二月九日

大坪流馬術指南百石大倉組入 入道號一遊

道徳院貫譽一成居士 五代目 石田五兵衛貞利

天保八丁酉年八月廿五日

江戸にて楢垣矩丘に就て修業し師より馬術の融蕙を受く大坪流馬術指南入道號一成



道隆院寶曆一樂居士 六代目 石田五兵衛貞經

明治二十二年六月十一日

調息馬術教師入道號得壽 七代目貞重も馬術に長ず

内藤敬三郎墓

東京美術學校卒業 川端玉章の門に入り玉青と號す 明治四十四年九月三日歿享年

二十二 法號は川端玉章翁筆

大日本總華督團山松雲翁碑 (生存者)

大正十四年五月遷厝記念碑建立昭和五年六月門弟再建

故陸軍歩兵中尉從七位勲五等 神庭給禮墓

顯義院光譽雄鎮給禮居士

明治二十九年十一月一日

故陸軍騎兵中尉從七位勲五等功五級 山根重太郎墓

大正二年六月五日

故陸軍豫備輜重騎卒勲八等 野波傳墓

明治三十八年二月八日遼陽兵站病院にて病死す

故陸軍騎兵 川上善之助墓

明治三十三年清國争役に奮戦後疾作り八月三十日通州定立病院に於て歿す年二十五

(墓誌林原清謹識)

故陸軍歩兵二等卒 神門定太郎墓

明治二十七年十一月三日義州兵站病院に於て歿す享年二十二才 (墓誌林原清謹識)

臺灣宜蘭廳羅東辦務署 松浦増太郎墓

叭哩沙支署故會計主任巡查部長

明治三十三年九月一日歿死す年三十七歳

### 三六 妙法山常教寺

寺町日蓮宗本尊七尊首題外九

如泥之蹟 百年忌建之 (加賀浦産瓢箪形自然石) 東京美術學校長 正木直彦誌

蓮貞院如泥日歡靈 小林如泥墓

文化十年癸酉十月二十七日行年六十一

如泥本名安左衛門寶曆三年を以て松江白馬大工町に生る。元祖は大工にて薄租直改



に從つて信州松本より來松した父安左衛門は安永八年より寛政二年迄給銀三百七十五匁三人扶持にて不昧公に仕へた如泥性酒を嗜む。嘗て公に從つて他出せしとき泥酔して士人に衝突し將に斬捨に處せられんとした。此時公爲めに救解して彼泥土の如き者請ふこれを許せと幸にして免れた。因て如泥の名を賜つたといふ。父の役を襲ふて藩に仕へたが性來手工に巧な上に負け惜みの強い人物にて苟も公の命せられたる者は如何に難題といへども飽まで之を完成せすんは己まざるの愧があつた。寛政九年剃髪を許され給米十石三人扶持を賜ひ如泥と改號した。其名作擧げて數ふべからず。文化十年五月二十四日江戸を發し六月十八日國に歸り十月二十七日病歿。松平不昧傳記載中の如泥の履歷。如泥の門人。如泥得意の作。如泥の遺話は予の調査寄稿に係る者である。

大石家 先祖生國遠江出雲に來て松平直政に召抱へられ世々新當流擊劍師範役

二代目大石源内武敬號止水

三代目大石源内良義號一水

四代目大石源内良持號瑞龍齋隱居活道

瑞龍院活道日勇居士 大石源内良持墓

安永四乙未年八月二十日歿享年七十

碑文殆んど摩滅して居れど大石家には全文幅物と存つて保存されて居る。茲に銘のみを記す。

銘曰歎奇歎正矣合矣離變化百出焉有所窺試乎彼乎興之作之維精維一荒之者誰維此

先生斯道最奇 園山雄撰 海叔明書 孝子良故建

德雄院道源日宿居士 六代目 大石源内良寬墓

碑文入なるも不明。諱良寬字元猛通稱源内童名源太郎家世々新當流擊劍術家明和五年戊子十二月二十四日生天保三年壬辰七月十七日年六十五

門人中太夫松原和謹撰并書 孝子善太郎良敬并門人立石

精進院義勇日寬居士 高橋理兵衛長信墓

明治十二年五月二十日

旧姓瀬崎善造出雲郡三分市村（今鏡川郡出東村）の生れ刻苦奮勵一心を刀工に精め遂に松江藩御抱刀鍛冶高橋幸助冬廣の養子となり刀匠六代目高橋理兵衛長信と名乗り大に名譽を揚げた。

慈航院春海日到居士 醫師 濱田春海墓



明治三十九年十月九日

佐藤家之墓所 佐藤善八郎

諱は長経字は伯徳號は愛山又静古堂、繪画を能くシ公益事業に盡瘁シ緑綬褒章及大  
禮記念章拜受、大正九年三月六日死亡享年七十六歳

故陸軍歩兵一等軍曹勲八等 舟小文次郎墓

明治二十九年九月十三日

故陸軍砲兵技術軍曹 佐藤次吉墓

昭和十三年三月十七日行年二十四歳

磯谷部隊副官陸軍歩兵大尉中尾金彌書

故陸軍歩兵上等兵勲八等功七級 佐々木茂墓

昭和十二年八月二十九日北支那津浦線獨流鎮附近二堡の戦闘に於て戦死

### 三七 嘉雲山安栖院

寺町曹洞宗本尊釋迦牟尼如来

蒼巖峰天居士位 有志者建之 高橋源五郎君之墓

猷山道麟居士 鳥屋傳兵衛墓

側面に 孝徳墓地 芳名聞天 赫々享徳 可傳永年

蕉窓院臥雲聽雨居士 詩人 林原常次郎墓

明治四十年十一月二十七日行年六十一才

錦城院靈嶽玄機居士 醫師 林原貞吉郎墓

明治三十五年十月十九日行年三十三歳

清杏軒月溪居士 立石月溪墓

昭和十一年十月二十六日 清杏軒社中建之

安山良恭居士 安達世恭墓

明治四十五年六月七日行年六十九歳

安達良順信女 安達世恭妻ヨキ墓

昭和九年九月一日飯田市にて歿行年八十八

安達家には子が無かつた為め子は少年の頃將別寵愛を受けた事は今以て忘れぬ學友

安達章藏は其の養嗣で多年長野縣立飯田中學校に勤続せられたか此地に永住の旨

陸軍砲兵中尉七位 曾田清三郎墓



機鏡院清嚴義光居士 明治三十七年二月廿三日

曾田家之墓 昭和九年八月陸軍中將曾田孝一郎建之

故陸軍歩兵一等軍曹 神門徳次郎墓

明治二十八年九月十七日丸亀に於て

故陸軍歩兵一等卒勲八等功八級 田中三喜墓

明治三十七年八月三十日遼陽にて戦死享年二十二歳

故陸軍歩兵上等兵勲七等功七級 加藤徳一郎墓

明治三十八年三月六日戦死享年二十七歳

故陸軍歩兵伍長 間庭徳市墓

昭和十三年十月二十七日

### 三八 光樹山明宗寺・西福寺・円照寺

寺町真宗本願寺派本尊阿彌陀如来

好學院釋總持清窓居士 第七世 尾原徳八墓

明治二十五年十二月十六日歳年五十四

其數學傳統は聞く所に由ると多々納忠三郎の後に中溝佐次―岡田權七―尾原徳八―  
久保田愛之丞 中溝利一 平野臺一 武田慶次郎等あるが尾原の門弟は實に多數で  
あつた。

清亮院釋敬堂居士 尾原亮太郎墓

大正十五年十二月十九日 法名は友入村上琴屋翁筆

總八橋子松江中學校時代は岸清一に比敵する程の秀才、東京文科大學專科卒業、私  
の中學校長及び文部省などに勤務せられ著述に教育哲論、新編逸等。

松月堂古流生花大日本總會頭

一 極齋清圓先生碑 從三位子爵植松雅平題

一 極齋釋清圓不退 長谷川新兵衛墓

明治四十五年三月十三日歳享年七十六

初め花道を八軒屋町宮内無存宗匠に學び、後家元植松子爵より大日本總會頭の重職を  
授けられ嘗て同子爵に隨行して各地を視察した事もあつた。煎茶の法は京都煎茶の  
宗匠玉川宗龍に就て皆傳を得、畫は中西耕石に師事して石峯と號し、傍ら詩歌を嗜み佛  
學にも算術にも精通し、手藝精巧容姿品格を具ふ。内村鑑三師と別墅の間柄であつた。



事は阿家所藏の書簡を見て知るべきである。

風流遊藝最堪嘉齡過六旬工愈加敏上群芳皆活色知是盡發手中花

恭賀長谷川一極齋華甲并其生花會

七十八翁 謹 香 拜

至真院釋法道居士 醫師 佐藤謙吉墓

明治三十九年二月十九日享年五十三

故陸軍歩兵一等卒 福井長太郎墓

明治二十七年九月十五日

故陸軍歩兵一等卒 岡本靖之助墓

明治三十四年八月九日

故陸軍歩兵上等兵 川津繁吉墓

昭和十三年三月二十四日支那山東省台兒莊攻撃戦にて戦死す享年三十一歳

故陸軍歩兵上等兵 神門正市墓

昭和十三年四月二十日於北支那汪庄附近戦闘戦死

海軍三等厨宰勲八等 神門彦一郎墓

大正五年五月十六日

故陸軍歩兵曹長 森山吉郎墓

昭和十三年四月九日山東省台兒莊に於て戦死

故陸軍歩兵曹長 今出貞雄墓

昭和十三年四月二十七日北支蘭城店にて散華行年二十二才

故陸軍歩兵軍曹 岡本吉太郎墓

昭和十三年十月二十二日山東省柳林市の戦闘にて戦傷死享年二十九才

### 三九 無量山専念寺

寺町浄土宗本尊阿彌陀如来

錦樹院嚴譽歸來猿林居士 錦織園右衛門墓

安永九庚子年十二月二十六日

碑文入摩滅 町醫 安永十辛丑年二月 嗣子錦織周藏光矩誌

了源院遊譽道有居士 二世 正井道有墓

天明二壬寅年七月四日享年七十四

不昧公幼少の頃は豊州茶道頭正井道有に就いて茶事を學はれた。道有は遠州流不知



庵の高弟で空疎と號す。享保十六年十二月十二日父宗有の後を継いで二十五石五人扶持大倉組士となり同十九年茶道頭となった。甚だ不昧公の御氣に入り道有の名は公より賜ったもの、公嘗て冗談半分に道有に向つて汝の年齢八十に達したならば其祝に大根鳥を遣はそうと申された道有七十四歳で亡くなつたか此時公三十二歳  
正心院一譽徹道居士 澤野重兵衛墓  
明治二十年七月六日卒享年六十六  
碑文入 澤野修輔の兄讀書を好み傍ら武技に通じ算術にも達した。私塾の門人満堂と永田徳積撰

誠光院尾譽慈山直道居士 成相伴之丞墓

昭和十二年十一月二十日行年七十歳

松江中學校卒業後引継ぎ師範學校高等科を卒業し訓導兼校長勤務。文檢地理科修身倫理科合格。京都府岡長野北海道札幌の各府縣中學師範に勤務して奉任教諭從七位に果達す。退職後和東銀行松江支店長となつて實業界に又私立學校等にも献身的努力を惜まらなかつた。前年十一月五日第二回殿町小學校校友會開催の節會員として同列なる實踐養生法を述べられ、更に「人生七十古來稀、今使不珍百歳壽」と「橋水為

嵐折蒲柳隨風強」との語句を記して予に呉れた。然るに僅か二週間程して腦溢血の爲めに逝去せられ真に感慨無量

#### 四〇 三昧山稱名寺

寺町浄土宗本尊阿彌陀如來

法照院光靈元榮居士 第八代 渡部謙助墓

墓誌入 諱元榮源次郎と稱し後謙助と改む。(渡部寛一郎父) 渡部寛一郎誌

善道院維譽録兩居士 初代 渡部善繼墓

墓誌入 (渡部寛一郎弟) 渡部寛一郎誌

大得院寛譽桃蹊不言居士 渡部寛一郎墓

昭和十三年三月十日行年八十六歳

澤野修輔の門人、廣島師範學校卒業、松江中學校師範學校助教諭勤務、其後三州學校、進取館、修道館などの名稱の下に私立中學校を設立して校主となり屢々縣及び文部省より表彰を受く。最後に縣立濱田高等女學校長勤務、退職後は或は縣會議員となり克堂會長となり又市教育會長として終始一貫教育に貢献せられた事多大であ



つた。詩作の號桃蹊若槻克堂とは師弟の關係があつて彼の床几山上若槻男爵壽康の銘は此恩師の筆になつたものである。予が附屬校並に松江中學校時代の恩師。  
故陸軍衛生兵上等兵勲八等功七級 舟木林太郎墓  
精忠院進譽良道居士 昭和十三年九月十一日於河北省高辛庄附近戦死

#### 四一 水縁山誓願寺

寺町浄土宗本尊阿彌陀如来  
旧藩時代將軍家にて増上寺に葬らせらるゝ神位（御位牌の事）は白濁の誓願寺に祀らせ給ふ事となれりと（藩祖御事蹟）  
故醫學博士志立雷松之墓

明治四十三年十一月一日享年三十七  
志立傳八郎の長男初め郡役所給仕をつとめ予に就て英語を學習せられた事もあつた。頭腦明晰、一朝奮然志を立て、中學校に入り遂に東京帝大醫學部を卒業し更に歐洲に留學して瑞西に滞在中大に研究を積み歸來醫學博士の稱號を獲私立病院に聘せられ大いに前途を囑望されたるに不幸にも早く病歿せられ眞に可惜也

#### 山口家累代之墓

明治四十一年戊申九月 八世孫山口宗義建之

#### 山口家累代之墓

大正三年甲寅九月 九世孫山口亮改建之

故陸軍歩兵大尉正七位勲五等功五級 齋藤 晋墓

顯彰院殿邦光義勇居士

故陸軍歩兵少尉正八位勲六等

忠岸院音譽義俊居士 加藤樽之助墓

明治三十八年七月二十四日亡

故海軍上等兵曹勲六等功七級 尾崎市之丞墓

明治三十七年九月三日盛京省火石峯子に於て死す陸軍重砲隊小隊長也

故陸軍歩兵上等兵 澤村潤一郎墓

大正七年一月三十日

#### 四二 海中山來迎寺



天神町浄土宗本尊阿彌陀如來

松本家之墓

真孝院儀譽忠善居士 畫師 松本歡吾

明治二十年十二月三十日享年六十四

通稱歡吾諱忠善號晚翠歿島嶽の門弟 東京内閣博覽會に出品貳回受賞(葡萄と佛画)

故陸軍騎重輪卒 水村康四郎墓

明治三十八年八月盛京省新屯病院に於て

故陸軍歩兵上等兵勲八等功七級 太田由友墓

昭和九年三月三十一日吉林省依蘭縣丁家崴子に於て戰死行年二十四歳

故陸軍歩兵上等兵勲八等 折田真市墓

昭和九年十一月十四日松江衛戍病院にて長逝す

故陸軍歩兵上等兵 富山昇墓

昭和十三年十月十六日江西省羅盤山の戦闘に於て戰死行年二十四歳

故陸軍歩兵長勲七等功七級 吉岡隆吉墓

昭和十二年九月二十二日河北省小清沽附近にて戰死す

### 四三 天神境内

天満宮銅燈二基 白濁菅公新祠營建工既成殿屋壯麗門庭宏闊盡改旧觀 而獻銅燈於

階前者欲公之神靈赫々與此明光俱照永世也而同心者三十九人可謂盛也矣

銘曰 維斯昔廟赫々厥靈享祀不絶千歲万齡銅燈二株左右列庭元燭不熄明德愈馨

明治十四年四月 内村篤柴謹撰

投筆函 (文句省略) 海野叔明謹識並書

尾原篤能先生碑 荒川重之助設計

澤野脩輔撰篆書中村準一郎門人山本良次郎謹書 碑文省略左に略歴

敬左衛門の男天保十年一月生諱篤能通稱總八郎清窓幼時澤野脩輔真野太夫に就て皇漢學を修め稍長じて多々納志三郎・岡田權七・中溝佐次に就て深く算法を窮め更に英語を學んで専ら泰西の算法を考究した。嘗て着命に依り應政國分間地圖を製し又高弟數人と共に對數表を著はさる。明治三年修道館助教 彼年中溝佐次に代つて教授となる。八年島根縣教員傳習校教師 十年東京師範學校にて理化學實驗を學習後



島根縣師範學校及中學校教師と爲り後濱田中學校に轉任せられ到る所功績高く屢々賞賜を受く。十七年辭職家塾共進學舎を開いて英漢數物を授け門生頗る多し。頗る痘疫預警多く一見近寄り難きも後進に接するや辭氣譎然諄々教へて倦まず頭腦明晰而も多藝、書画、和歌、俳句、彈琴に通せられた由なるも圍碁のみは堂に入らなかつたと。此建碑者は松平泊翁以下三百十餘名。

自然石 此あたり眼に見ゆる物皆す、し  
明治十二年七月 曲川拜書 釣年庵社中建

#### 四四 獨留山信樂寺

豎町浄土宗本尊阿彌陀如來  
東風居士 東風 堀 三隆墓  
天水式墓標、醫師並に書道の大家としては粗末なりの  
東風居士先生碑 (碑文省略)  
明治十二年十月友人雨森精翁撰門人榑野逸書 門人十五人以建之  
諱義康字子直號東風藩側醫田村寧我の高足書を善くす云々

船譽香林智英居士 十二代 瀧川智英墓  
明治十五年四月十四日四十三歳  
碑文入 諱智英字中雄號大華云々 老雨居士撰文 瀧川正勝謹書  
壽譽祥雲龍山居士 十三代 瀧川壽一郎墓  
幼名忠五郎諱は正勝画號半山後は松翠、海山と改め晚年龍山と號す、狂歌名は千秋園雲人後には千秋園万歳と號した。本姓は勝部氏出で、松江市の名家瀧川家を継ぎ、壽一郎と稱し繪画茶道歌道に長じた。昭和六年三月一日歿享年八十三  
辞世 八十三とせ過せと何も千秋園た、長生をしたか万歳  
自然石奇國祝 神代より單峰さき續きいさ波も堂々壽治る浦安の國 千秋園万歳  
昭和六年七月 八雲抱腹會建之  
初代漆壺齋碑 東京美術學校長 正木直彦書  
昭和五年七月二十一日百周年忌有志者建之  
小島清兵衛の祖は堀尾山城守忠晴の家臣にて富田城より松江に移つて來たものと清兵衛は五代の孫で不昧公の命を承けて東春合等の漆藝術優秀なるを以て漆壺齋の號を賜つた。其作品多く現存子孫相継て漆工に従事も皆漆壺齋の名を襲用す。



漆壺齋墓（何も書いてないので不明）

一圓軒庄白文通居士 花道自然流家元 廣瀬慶之助墓

明治三十九年七月九日

心珠院知道源清居士 祝 子猛墓

安永三年甲午十月三日行年二十一

子猛諱孝寬通稱彌太雪藩下太夫祝君晴延之子也幼穎敏祝君母著其膝親授詩書句臣子  
猛輒能記焉而誦極不已祝君因命從余遊初入門自哲而脩有神彩坐客望之曰酷哉此兒之  
肖其父也上堂清談移晷坐客撫掌曰何其笑顏之似大祝君也及受業強記暗誦雖祝君殆不  
及矣而學一隅則三隅莫不及焉自歲十五六每在禰人廣座論世方人鴻音朗達門牆之外  
人皆異其卓犖不羈子猛兼學兵法武技又究算數齊忠藏通國之善算者子猛師也嘗謂人曰  
小祝君奇才也吾術既為此君盡矣安永三年甲午十月三日傷寒熱不發而歿年二十一葬  
白濁信樂寺識者為國惜之子猛於余交誼最篤祝君每見余淚未曾不感于猛也余見祝君則  
亦傷子猛益至乃銘曰 吾視此子無事不長天實生才誰敢是亡嗟呼長夜漫漫子猛何藏  
松源藏撰 海重漫書 從子淺之助建之

松德院殿育譽英巖重定居士 第十二代 石原三郎重定墓

昭和二年二月七日發行年五十八歲

予の松江中學校時代の學友、鎮次郎の弟、性活潑敏俊世才あり、縣屬、辯護士試験  
合格、銀行會社の重役、出雲學生會寄宿舎監督等獻身的の努力家であつた。

石原家初代九左衛門重友、二代定張、三代重張、五代形定、十一代鎮次郎重國、十

二代三郎重定、縣社須賀郡久神社正面御影石鳥居に延享元年八月石原氏藤原形定と

あるは此五代目也

故從七位勳八等 西川鉄之助墓

大正元年八月十一日臺南に於て歿す行年五十二歲

濱田聯隊野戰隊 福代義市墓

明治三十七年八月三十一日遼陽附近にて歿死す年二十三歲

故陸軍軍人 伊原米太郎墓

明治三十八年十一月十二日逝行齡二十四歲

#### 四五 砂松山正源寺

整町貞宗大谷旅本尊阿彌陀如來